南八幡遺跡 5

みなみ　はち　まん

— 南八幡遺跡第９次調査の概要 —

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第641集

２０００

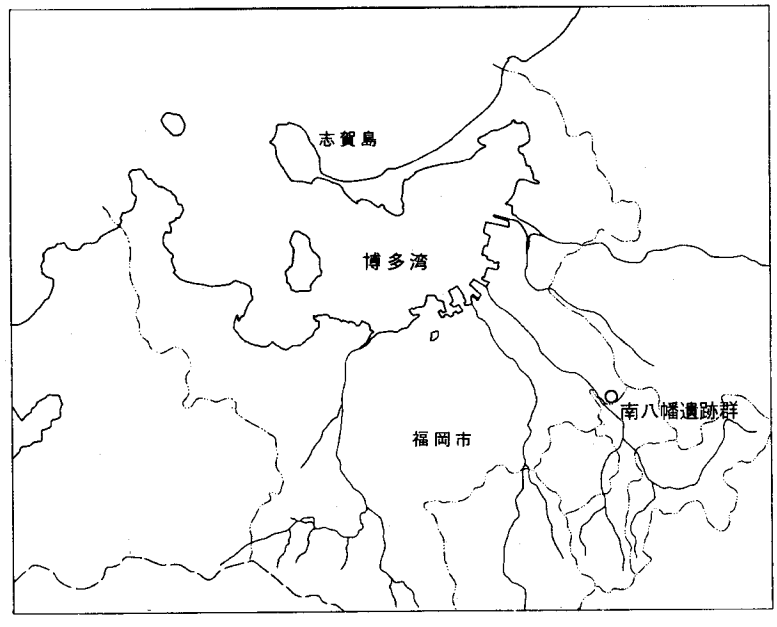
福岡市教育委員会

南八幡遺跡 5

みなみ　はち　まん

— 南八幡遺跡第９次調査の概要 —

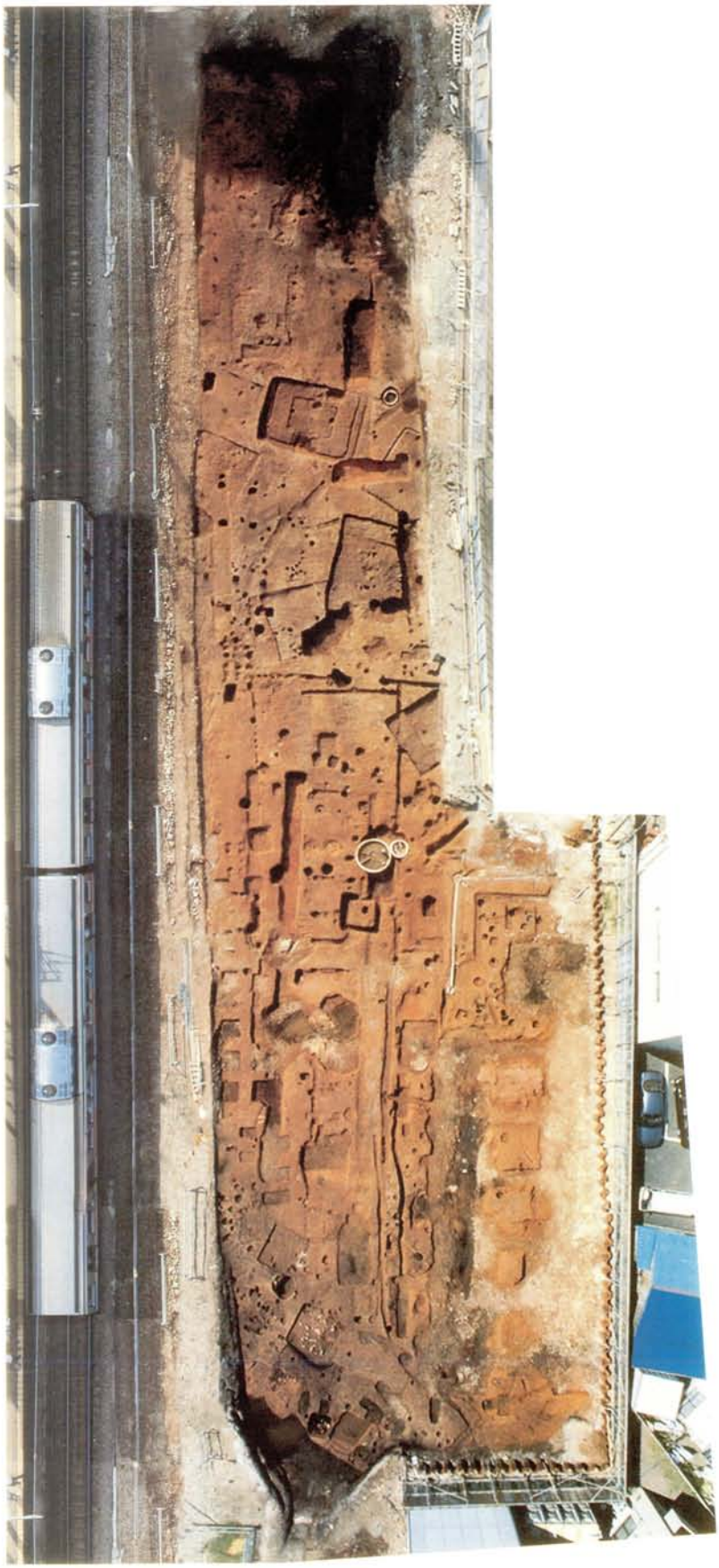
福岡市埋蔵文化財調査報告書 第641集



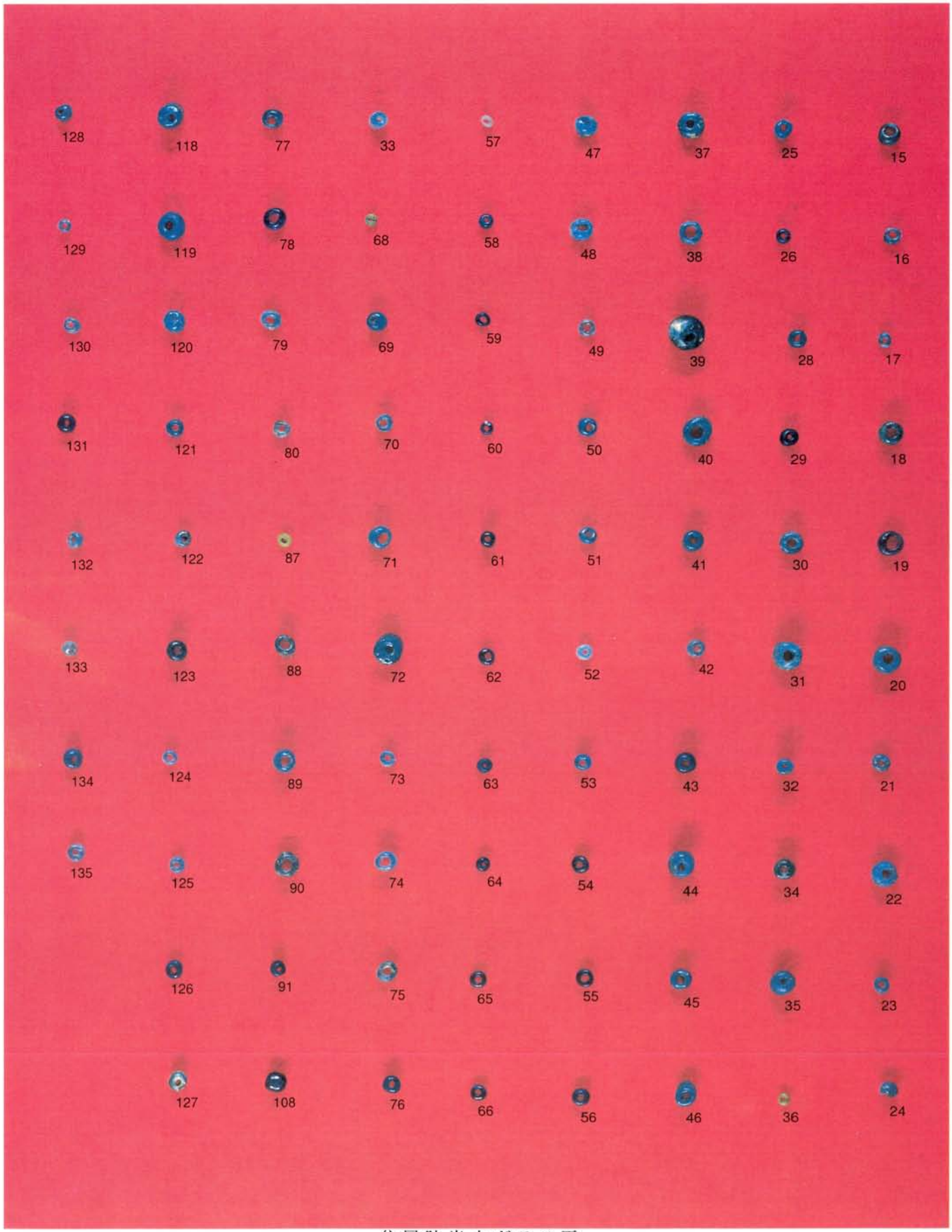
調査番号　９８１４
遺跡記号　ＭＨＭ－９

２０００

福岡市教育委員会



調査区全景（南より）


128 118 77 33 57 47 37 25 15
129 119 78 68 58 48 38 26 16
130 120 79 69 59 49 39 28 17
131 121 80 70 60 50 40 29 18
132 122 87 71 61 51 41 30 19
133 123 88 72 62 52 42 31 20
134 124 89 73 63 53 43 32 21
135 125 90 74 64 54 44 34 22
126 91 75 65 55 45 35 23
127 108 76 66 56 46 36 24

住居跡出土ガラス玉

序

いにしえの昔から大陸文化の窓口として栄えた福岡市は、２１世紀にむけての更なる発展を目指してさかんに都市開発が押し進められています。それに伴ってやむなく失われる埋蔵文化財については、将来にわたって記録を保存するための発掘調査をおこなっています。

本書は、ＪＲ九州南福岡駅ビルの再開発に先立って実施した南八幡遺跡群第９次調査の発掘調査報告書です。

今回の発掘調査では、遺跡群内ではじめて弥生時代後期の集落跡が発見され、住居跡からたくさんのガラス玉や管玉が出土しました。奴国の中心域とされる須玖岡本遺跡周辺には青銅器やガラス製品の鋳造工房跡があり、生産供給する中心核的集落と需要する衛星的集落としての南八幡遺跡群を考える上で貴重な発見となりました。

本書は、これらの発掘調査の成果を収録したものです。本書が市民のみなさんに広く活用され、埋蔵文化財保護に対するご理解の一助になるとともに、学術研究に活用していただければ幸いです。

なお、発掘調査から整理報告までの間には多くの方々のご指導とご協力をいただきました。記して心から感謝の意を表する次第であります。

平成12年3月31日

福岡市教育委員会
教育長　西　憲一郎

---------- れ い げ ん ----------

1. 本書は、福岡市教育委員会がJR九州南福岡駅の駅舎建替えに先立って、1998（平成10）年5月14日～8月28日までに福岡市博多区寿町2丁目9－30で緊急発掘調査した南八幡遺跡群第9次調査の発掘調査報告書である。
2. 本書に使用した方位はすべて磁北方位である。
3. 遺構は、建物跡をSB、竪穴住居跡をSC、溝遺構をSD、土壙をSKと呼称して記号化し、その後にすべての遺構を通番して01からナンバーを付した。なお、ピットは呼称記号SPの後に101から通番して番号を付した。
4. 本書に掲載した遺構の実測には小林義彦があたった。遺物の実測は小林と平川敬治、佐藤　信、大濱菜緒、今村ひろ子が作成した。
5. 本書に掲載した遺構と遺物の製図は、小林と今村が作成した。
6. 本書に掲載した遺構と遺物の写真は小林が撮影した。また、調査区の全景写真は、写測エンジニアリング㈱に撮影を依頼し、CGで合成した。
7. 本書の執筆・編集は小林が、SB－30の石器は実測・製図・原稿とも杉山富雄（埋蔵文化財課）が行った。また、住居跡より出土したガラス玉の科学的分析は肥塚隆保（奈良国立文化財研究所）、比佐陽一郎（福岡市埋蔵文化財センター）氏に依頼し、比佐氏の分析原稿を付論として掲載した。
8. 本書に係わる遺物と記録類は一括して埋蔵文化財センターに保管している。

遺跡調査番号：9814	遺跡略号：MHM	分布地図番号：13-0051
調査地籍：福岡市博多区寿町2丁目9-30		
工事面積：2,600㎡	調査対象面積：2,600㎡	調査実施面積：1,752㎡
調査期間：1998年5月14日～8月28日		

本文目次

序

Ⅰ．はじめに …… 1

1．発掘調査にいたるまで …… 1

2．発掘調査の組織 …… 1

3．立地と歴史的環境 …… 3

Ⅱ．調査の記録 …… 8

1．調査の概要 …… 8

2．弥生時代の調査 …… 9

1)．竪穴住居跡 …… 10

2)．掘建柱建物跡 …… 21

3)．土　壙 …… 27

4)．溝遺構 …… 28

3．奈良時代の調査 …… 29

1)．竪穴住居跡 …… 29

2)．土　壙 …… 41

4．包含層の遺物 …… 45

Ⅲ．おわりに …… 46

付論　南八幡遺跡9次調査出土ガラス及び暗赤色小塊物質の保存科学的調査について

比佐陽一郎　片多雅樹　北村幸子　肥塚隆保 …… 47

挿図目次

Fig. 1　周辺遺跡分布図（1／25,000）…… 2
Fig. 2　南八幡遺跡周辺旧地形図（1／7,500）…… 4
Fig. 3　南八幡遺跡位置図（1／10,000）…… 5
Fig. 4　南八幡遺跡第9次調査区位置図（1／1,000）…… 6
Fig. 5　遺構配置図（1／400）…… 8
Fig. 6　弥生時代の遺構配置図（1／600）…… 9
Fig. 7　1号住居跡実測図（1／60）…… 10
Fig. 8　1号住居跡出土遺物実測図（1／3）…… 11
Fig. 9　2号住居跡実測図（1／60）…… 12
Fig. 10　2号住居跡出土遺物実測図（1／3・1／4）…… 14
Fig. 11　3号住居跡実測図（1／60）…… 15
Fig. 12　3号住居跡出土遺物実測図（1／3）…… 15
Fig. 13　4号住居跡実測図（1／60）…… 16
Fig. 14　4号住居跡出土遺物実測図（1／3）…… 16
Fig. 15　5号住居跡実測図（1／60）…… 17
Fig. 16　5号住居跡出土遺物実測図（1／3）…… 18
Fig. 17　6号住居跡実測図（1／60）…… 19
Fig. 18　6号住居跡出土遺物実測図（1／3）…… 19
Fig. 19　17号住居跡実測図（1／60）…… 20
Fig. 20　32号住居跡実測図（1／60）…… 20
Fig. 21　32号住居跡出土遺物実測図（1／3）…… 21
Fig. 22　7・8・11・12号掘立柱建物跡実測図（1／80）…… 22
Fig. 23　27～30号掘立柱建物跡実測図（1／80）…… 23
Fig. 24　33～36号掘立柱建物跡実測図（1／80）…… 24
Fig. 25　30号掘立柱建物跡出土遺物実測図（1／1）…… 25
Fig. 26　13・14・37・38号土壙実測図（1／30）…… 26
Fig. 27　37号土壙出土遺物実測図（1／3）…… 28
Fig. 28　奈良時代の遺構配置図（1／600）…… 29
Fig. 29　15・18号住居跡実測図（1／60）…… 30
Fig. 30　15・18号住居跡出土遺物実測図（1／3）…… 31
Fig. 31　16号住居跡実測図（1／60）…… 32
Fig. 32　16号住居跡カマド実測図（1／30）…… 32
Fig. 33　16号住居跡出土遺物実測図（1／3・1／4）…… 33
Fig. 34　19号住居跡実測図（1／60）…… 34
Fig. 35　19号住居跡カマド実測図（1／30）…… 34
Fig. 36　19号住居跡出土遺物実測図1（1／3）…… 35
Fig. 37　19号住居跡出土遺物実測図2（1／3）…… 36
Fig. 38　19号住居跡出土遺物実測図3（1／3）…… 37

Fig. 39　21・22号住居跡実測図（1／60）…… 37
Fig. 40　22号住居跡カマド実測図（1／30）…… 38
Fig. 41　22号住居跡出土遺物実測図（1／3）…… 39
Fig. 42　23・25・31号住居跡実測図（1／60）…… 40
Fig. 43　25号住居跡出土遺物実測図（1／3）…… 40
Fig. 44　20・26号土壙実測図（1／30）…… 41
Fig. 45　20・26号土壙出土遺物実測図（1／3）…… 42
Fig. 46　24号土壙実測図（1／30）…… 42
Fig. 47　24号土壙出土遺物実測図1（1／3）…… 43
Fig. 48　24号土壙出土遺物実測図2（1／3）…… 44
Fig. 49　ピット出土遺物実測図（1／3）…… 45
Fig. 50　包含層出土遺物実測図（1／3）…… 45

表目次

Tab. 1　発掘調査地一覧表 …… 7
Tab. 2　2号住居跡出土ガラス玉計測表1 …… 12
Tab. 3　2号住居跡出土ガラス玉計測表2 …… 13
Tab. 4　3・5号住居跡出土ガラス玉計測表 …… 18
Tab. 5　32号住居跡出土ガラス玉計測表 …… 21
Tab. 6　掘立柱建物跡一覧表 …… 25

図版目次

巻頭図版1　調査区全景（南より）
巻頭図版2　竪穴住居跡出土ガラス玉
PL. 1　(1) 調査区Ⅰ区全景（北より）　(2) 調査区Ⅱ区全景（東より）
PL. 2　(1) 2～6号住居跡全景（東より）　(2) 調査区中央部（東より）
PL. 3　(1) 1号住居跡西半部（東より）　(2) 1号住居跡東半部（東より）
　(3) 1号住居跡内土壙（北より）
PL. 4　(1) 2・3号住居跡全景（西より）　(2) 2号住居跡全景（西より）
　(3) 3号住居跡全景（西より）
PL. 5　(1) 4・5号住居跡全景（東より）　(2) 4号住居跡全景（東より）
　(3) 5号住居跡全景（東より）
PL. 6　(1) 5号住居跡全景（南より）　(2) 5号住居跡北壁遺物出土状況（南より）
　(3) 5号住居跡カマド内遺物出土状況（北より）
PL. 7　(1) 5号住居跡貼床断面（南より）　(2) 6号住居跡全景（東より）
　(3) 6号住居跡石庖丁出土状況（北より）
PL. 8　(1) 17号住居跡全景（南より）　(2) 32号住居跡・33・34・36号建物跡全景（南より）
　(3) 32号住居跡全景（南より）

PL. 9　(1) 32号住居跡内土壙遺物出土状況（西より）　(2) 32号住居跡貼床断面（南より）
(3) 32号住居跡炉跡断面（西より）
PL. 10　(1) 7・8号建物跡全景（東より）　(2) 7号建物跡全景（北より）
(3) 8号建物跡全景（北より）
PL. 11　(1) 11号建物跡全景（東より）　(2) 12号建物跡全景（北より）
(3) 28・29号建物跡全景（東より）
PL. 12　(1) 27号建物跡全景（南より）　(2) 28号建物跡全景（北より）
(3) 29号建物跡全景（南より）
PL. 13　(1) 32号住居跡・33・34号建物跡全景（東より）
(2) 33・34・36号建物跡全景（南より）　(3) 35号建物跡全景（南より）
PL. 14　(1) 13号土壙全景（西より）　(2) 37号土壙全景（南より）
(3) 20・38号土壙全景（南より）
PL. 15　(1) 15～19・21～23・25号住居跡群全景（東より）
(2) 16・19・21・22号住居跡・24号土壙全景（南より）
(3) 16号住居跡・20号土壙全景（南より）
PL. 16　(1) 16号住居跡全景（西より）　(2) 16号住居跡カマド全景（西より）
(3) 16号住居跡カマド横断面（西より）
PL. 17　(1) 15号住居跡全景（南より）　(2) 18号住居跡全景（南より）
(3) 18号住居跡遺物出土状況（南より）
PL. 18　(1) 19・21・22号住居跡・24号土壙全景（南より）
(2) 19・21・22号住居跡全景（西より）　(3) 19号住居跡遺物出土状況（南より）
PL. 19　(1) 19号住居跡カマド周辺遺物出土状況（西より）
(2) 19号住居跡カマド断面（西より）　(3) 19号住居跡遺物出土状況（東より）
PL. 20　(1) 21号住居跡全景（南より）　(2) 22号住居跡全景（南より）
(3) 22号住居跡遺物出土状況（東より）
PL. 21　(1) 22号住居跡カマド横断面（南より）　(2) 23号住居跡全景（西より）
(3) 25号住居跡全景（南より）
PL. 22　(1) 23号住居跡・24号土壙全景（南より）　(2) 24号土壙全景（南より）
(3) 26号土壙全景（南より）
PL. 23　出土遺物1（1／3）
PL. 24　出土遺物2（1／3）
PL. 25　出土遺物3（1／3）
PL. 26　出土遺物4（1／3）

Ⅰ．はじめに

1．発掘調査にいたるまで

南八幡遺跡群は、春日市と境を接する福岡市の南端にあり、のどかな田園風景が拡がっていました。ところが、明治22(1889)年に九州鉄道の雑餉隈駅が開設されてから都市化がはじまります。更に大正13(1924)年には西日本鉄道の雑餉隈駅も開設され、交通の要衝地として一層の都市化が進みました。ところが、近年は副都心化による再開発が急速に進み、次第に高層ビルへと変わりつつあります。

JR九州南福岡駅は、日本国有鉄道を経た九州鉄道の雑餉隈駅で、今の駅舎は昭和12(1937)年に建て替えられて今日に至っています。そこでJR九州の事業開発本部では、保有資産の有効活用と鉄道輸送の乗客増に繋がる開発計画が検討された。計画案は、老朽化した駅舎を利便性の高い居住ゾーンと商業ゾーンからなる高層ビルに建て替えるものであった。

ところが、南福岡駅周辺は南八幡遺跡群として周知化された埋蔵文化財包蔵地内にあり、周辺地での発掘調査事例からして古墳時代から奈良時代の集落が拡がっていることが予想された。そこで、1997(平成9)年10月と1998(平成10)年4月の2度にわたって試掘調査を実施した。その結果、駅舎下からは奈良時代の住居跡や土壙が検出され、その時代の集落域が拡がっていることが確認された。遺跡は現状での保存が望ましく協議を重ねたが、JR九州の南福岡駅再開発計画案は、変更不可能なものであった。そこで、福岡市教育委員会埋蔵文化財課では発掘調査によって記録保存を図ることとなった。発掘調査は、1998(平成10)年5月14日よりはじめ、8月28日に無事終了した。この間は梅雨と記録的な猛暑下での発掘作業であり、作業に従事した方々や協力いただいた工事関係者諸氏に感謝する次第である。また、多くの見学者や体験実習として県立筑紫丘高校郷土クラブの生徒諸君の参加もあり、市民の文化財保護への理解に資するところがあったと考える。

2．発掘調査の組織

調査委託　九州旅客鉄道株式会社
調査主体　福岡市教育委員会
調査総括　文化財部埋蔵文化財課第2係
　文化財部長　柳田純孝（現任）　平塚克則（前任）
　埋蔵文化財課長　山崎純男（現任）　柳田純孝（前任）
　埋蔵文化財課第2係長　力武卓治（現任）　山口譲治（前任）
調査庶務　文化財整備課長　上村忠明　谷口真由美
調査担当　埋蔵文化財課第2係　小林義彦
調査・整理作業　北川貴洋（別府大学）　穴井加菜子　有田恵子　池田省三　石川洋子
今村ひろ子　今村弘美　浦　伸英　大賀規矩雄　大瀬良清子　大瀬良志乃　大瀬良直哉
金子二三枝　蒲地雅徳　木原保生　木村文子　幸田信乃　古賀典子　嶋ヒサ子　田中トミ子
田原キヌエ　塚本よし子　土斐崎孝子　土斐崎千枝　鍋山治子　西田文子　野村道夫　馬場イツ子
馬場久美子　馬場賢治　福場真由美　北條こず江　堀ウメコ　松本藤子　馬目真吏　三栗野明美
綟川ゆかり　持丸玲子　森田祐子　山田政治

発掘調査にあたってはJR九州や九鉄工業の関係者諸氏に多くのご協力とご配慮をいただいた。また、山崎純男、山口譲治、比佐陽一郎、肥塚隆保（奈良国立文化財研究所）氏に指導と助言を受けた。協力に感謝申し上げるとともに本報告に十分に生かせなかったことを深くお詫びする次第である。

Fig. 1　周辺遺跡分布図（1／25,000）

3．立地と歴史的環境

南八幡遺跡群は、古くから雑餉と総称される雑餉隈にあり、位置的には大野城市と春日市に挟まれた福岡市のもっとも南端にある。地形的には、福岡平野を貫流する御笠川と那珂川との間にある春日丘陵の東辺に並行してのびる丘陵上に立地している。春日丘陵には、奴国王墓とされる須玖岡本遺跡があり、その周縁には青銅器製造工房跡の須玖永田遺跡や須玖五反田遺跡が展開している。雑餉隈丘陵は、春日丘陵から北東へ1㎞の距離にある。この丘陵は鳥栖ローム層を基盤層とし、諸岡川などの解析による谷が幾筋も湾入していくつかの小さな低丘陵を形成している。この雑餉隈の低丘陵上に点在する遺跡を地形的に区分して、北から麦野A遺跡、麦野B遺跡、麦野C遺跡、南八幡遺跡、雑餉隈遺跡と呼んでいる。

南八幡遺跡群のある雑餉隈の丘陵上でもっとも古い遺物は、旧石器時代の石刃や剥片がある。麦野A遺跡1次調査区、麦野B遺跡3次調査区、雑餉隈遺跡の5次調査区や10次調査区で出土しており、丘陵上の広い範囲にわたって拡がっていることが明らかになりつつある。

次に、縄文時代の遺構は稀薄である。麦野B遺跡の3次調査区や南八幡遺跡の6次調査区、7次調査区で「落とし穴」と推察される土壙が検出されているが、出土遺物が少なく時期を明確にするには至っていない。麦野C遺跡3次調査区では該期の石鏃が出土しているが、晩期の刻目突帯文期に至るまで明確な遺構や遺物は少ない。

弥生時代になると、遺構は次第に拡がりを見せる。前期は南端の雑餉隈遺跡5次調査区で、円形住居跡と貯蔵穴からなる集落跡が検出され、大規模な中心的集落のあった可能性も考えられる。中期は、麦野C遺跡で方形の住居跡が検出されている。後期には、雑餉隈遺跡5次調査区や南八幡遺跡5次調査区で方形の住居跡が散見されるだけで、遺構の拡がりは稀薄なあり方を示す。南八幡遺跡9次調査区の後期の住居跡や掘立柱建物跡は、この空白域を補完するものである。雑餉隈丘陵では、南縁の三つの小丘陵上で比較的小規模な集落が点的に営まれたものと推考される。一方、墳墓は麦野C遺跡5次調査区で小児甕棺墓1基があるのみで集落域に伴う墳墓群は明確ではない。

古墳時代になると、遺構はまた稀薄になる。殊に、前期から中期の遺構や遺物はほとんどなくなる。後期には、南八幡遺跡2次調査区と3次調査区で住居跡が検出されており、一定の集落域を構成して展開していたものと推測されるが、奈良時代の大規模な集落跡との関連については明らかではない。

つづいて奈良時代になると、掘立柱建物群を伴う大規模な集落域が出現する。7世紀末から8世紀はじめには、雑餉隈遺跡9次調査区で方形に配置された大型の建物跡群が出現する。その規模と配置は官衙的な性格を想起させるものがある。さらに、8世紀前半から後半に至ると集落域は、丘陵の全域にわたって展開する。南端の雑餉隈遺跡では、5次調査区で50棟を越す住居跡が検出されている。また、東側の麦野C遺跡では隣接する1次調査区と5次調査区には70棟にのぼる住居跡がある。住居跡は、数回に亘っての建て替えがなされ、長期的に集落が展開していたことが推測される。西側の南八幡遺跡でも丘陵南縁の2次・3次・6次・8次・9次調査区を中心に集落域が展開しており、小さな丘陵ごとに多少の規模的な差異を有しながらも集落域が展開している。殊に、雑餉隈遺跡や麦野C遺跡はその傾向が顕著で、雑餉隈丘陵における拠点集落的な様相を想起させる。あたかも「雑餉隈」の名が、太宰府官人の雑餉の居住地とか食糧倉庫が建ち並んだ所とする古説に符合するようである。

なお、平安時代のはじめになると集落群は急速に縮小する。麦野A遺跡の3次調査で井戸跡が検出されているほかに柱穴から遺物が散見され、掘建柱建物跡の存在が想起される。さらに、中世になると麦野丘陵で掘立柱建物跡や井戸跡、土壙墓が検出されており、集落の中心域が雑餉隈丘陵から麦野丘陵へと移行している。

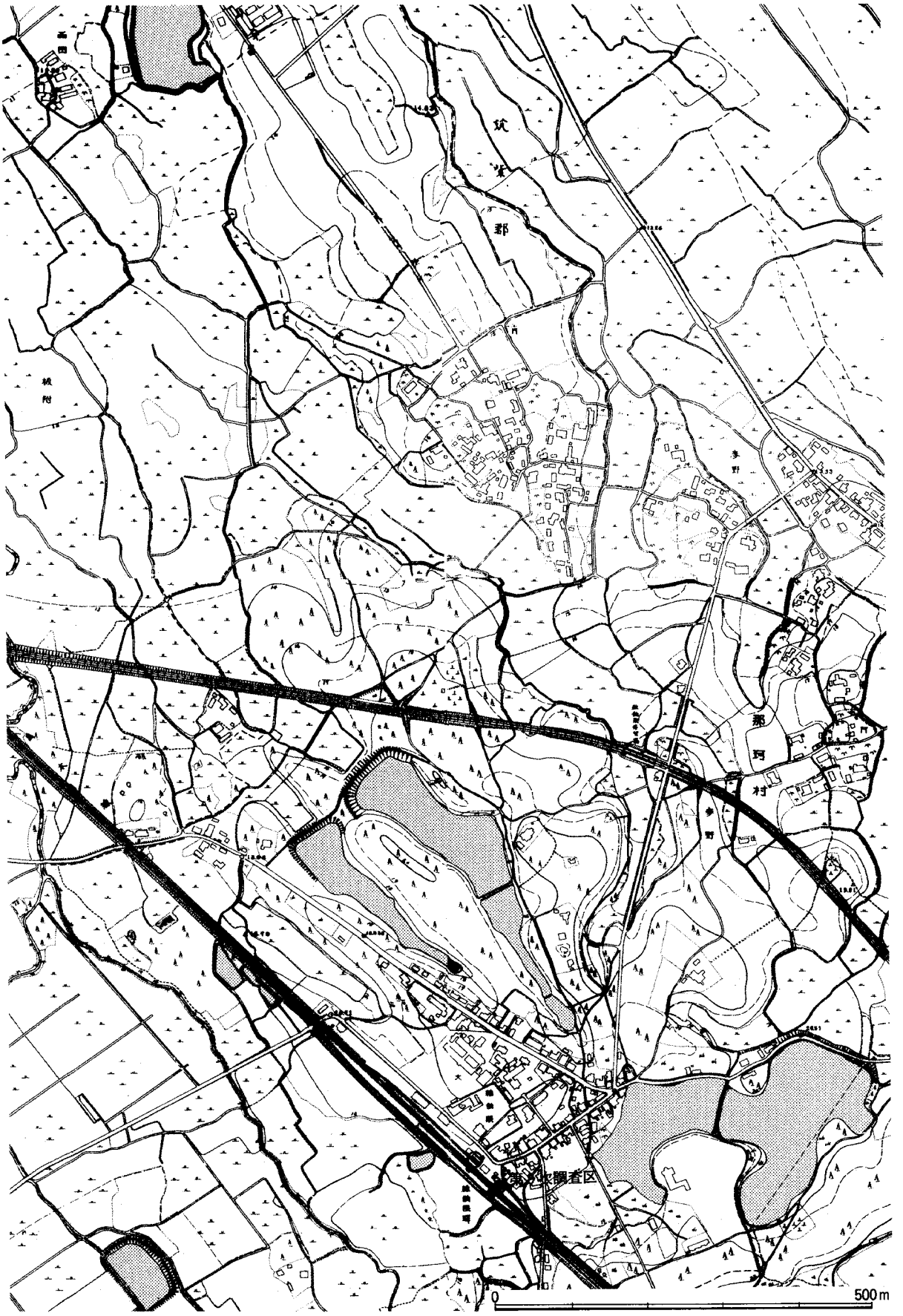


Fig. 2　南八幡遺跡周辺旧地形図（1／7,500）

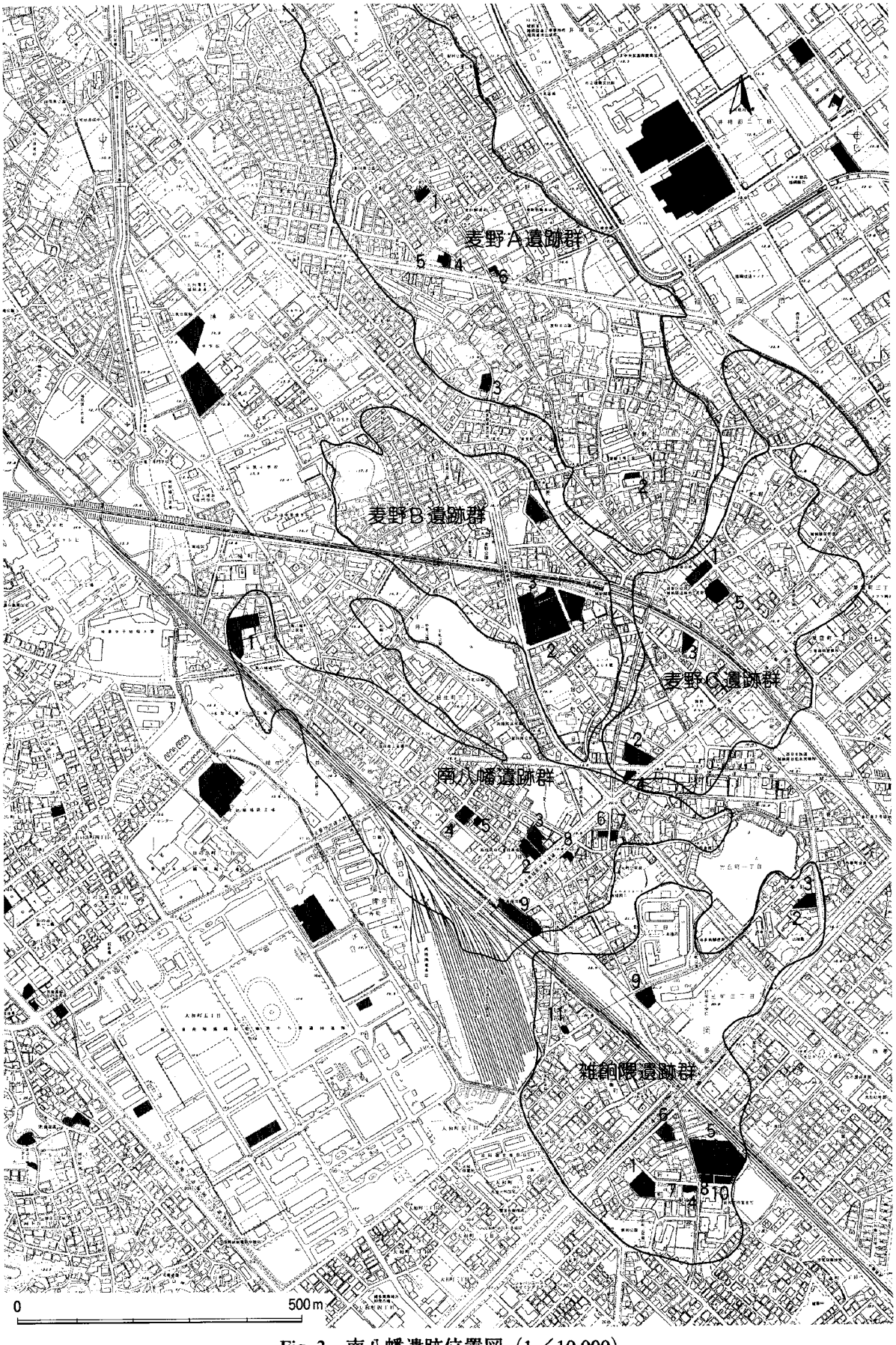


Fig. 3　南八幡遺跡位置図（1／10,000）

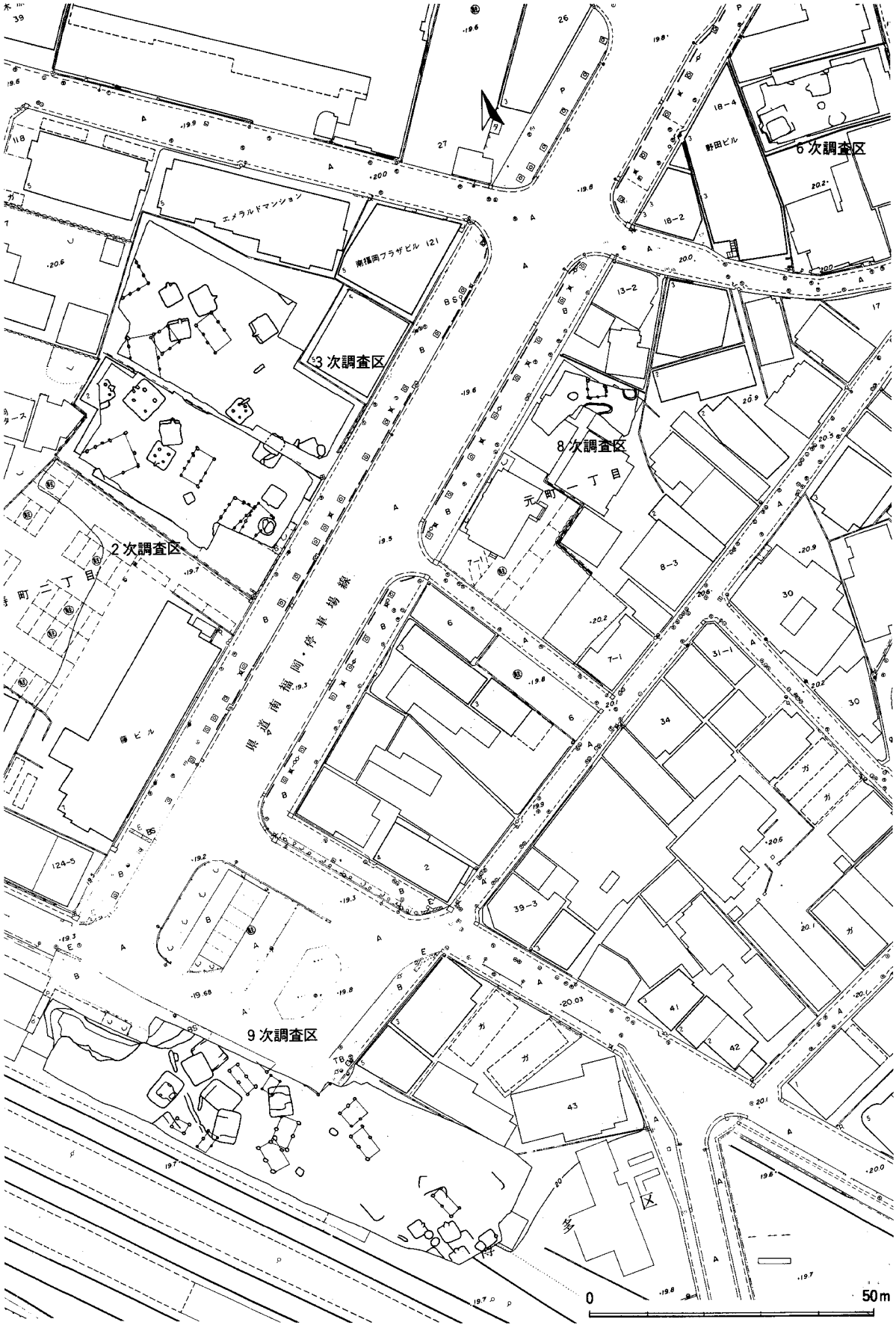


Fig. 4　南八幡遺跡第9次調査区位置図（1／1,000）

遺　跡　名	次数	調査番号	所　在　地	調査面積 (m²)	報告書	遺 跡 の 概 要
南八幡遺跡群	1	7937	南八幡2-8-5	680	489	古墳；溝
南八幡遺跡群	2	8413	寿町2-119-1	800	128	古墳；住居跡、土壙 奈良；住居跡、掘立柱建物跡
南八幡遺跡群	3	8652	寿町2-4-12	930	181	古墳；住居跡 奈良；住居跡、掘立柱建物跡
南八幡遺跡群	4	9112	寿町2-86-1.2	247	277	奈良；住居跡、掘立柱建物跡
南八幡遺跡群	5	9452	寿町2-84.85-1	56	441	弥生；住居跡、土壙
南八幡遺跡群	6	9508	元町1-19-4	206	501	縄文；土壙 奈良；住居跡、土壙
南八幡遺跡群	7	9560	元町1-20-2	181	528	奈良；住居跡、土壙
南八幡遺跡群	8	9707	元町1-3-14	114	602	奈良；掘立柱建物跡、井戸跡
南八幡遺跡群	9	9814	寿町2-9-30	1,752	641	弥生；住居跡、掘立柱建物跡、土壙 奈良；住居跡、土壙
雑餉隈遺跡群	1	9024	新和町2-10-2･6	300	276	奈良；土壙
雑餉隈遺跡群	2	9324	西春町1-17-27	345	409	弥生；井戸跡 奈良；住居跡、掘立柱建物跡
雑餉隈遺跡群	3	9345	西春町1-18	156	409	奈良；住居跡
雑餉隈遺跡群	4	9367	新和町2-13	105	409	奈良；掘立柱建物跡、土壙
雑餉隈遺跡群	5	9407	新和町1-2~6	4,785	569	弥生；住居跡、貯蔵穴 奈良：住居跡、井戸跡
雑餉隈遺跡群	6	9431	新和町2-1-35	481	528	奈良；掘立柱建物跡、土壙
雑餉隈遺跡群	7	9523	新和町2-14-1	54	569	奈良；土壙、溝
雑餉隈遺跡群	8	9550	新和町1-7	395	569	奈良；住居跡、土壙、溝
雑餉隈遺跡群	9	9648	西春町3-1	733	570	奈良；住居跡、掘立柱建物跡、土壙
雑餉隈遺跡群	10	9670	新和町1-7	395	569	奈良；住居跡、掘立柱建物跡、土壙
雑餉隈遺跡群	11	9916	昭南町2-36	50		奈良；住居跡、井戸跡
麦野Ａ遺跡群	1	8232	麦野1-28-56	600	107	中世；井戸跡、掘立柱建物跡
麦野Ａ遺跡群	2	8337	麦野5			奈良；井戸跡
麦野Ａ遺跡群	3	9116	麦野4-14-23	247	275	奈良；住居跡、土壙 中世；掘立柱建物跡
麦野Ａ遺跡群	4	9316	麦野1-27-3.5	134	409	中世；井戸跡 近世；井戸跡
麦野Ａ遺跡群	5	9412	麦野1-27-1.2	6		奈良；井戸跡、土壙
麦野Ａ遺跡群	6	9824	麦野3-11-29	224		奈良；住居跡、井戸跡 古代；土壙 中世；土壙、溝
麦野Ｂ遺跡群	1	8520	麦野4-26-32	850	164	奈良；井戸跡 中世；井戸跡
麦野Ｂ遺跡群	2	9257	麦野31-1.2	1,368	358	奈良；住居跡、掘立柱建物跡
麦野Ｂ遺跡群	3	9613	麦野2-3	4,068	568	縄文；土壙 奈良；住居跡、掘立柱建物跡
麦野Ｂ遺跡群	4	9661	麦野2	269	568	奈良；住居跡、溝
麦野Ｃ遺跡群	1	8949	麦野6-11-4	633	361	奈良；住居跡、土壙
麦野Ｃ遺跡群	2	8904	銀天町2-4	100		奈良；住居跡
麦野Ｃ遺跡群	3	9604	銀天町3-14	242	501	奈良；住居跡、土壙、溝
麦野Ｃ遺跡群	4	9628	銀天町2-3-6	265		奈良；住居跡
麦野Ｃ遺跡群	5	9856	麦野6-12-5	860		弥生；住居跡、甕棺墓 奈良；住居跡 中世；土壙墓

Tab. 1　発掘調査地一覧表

Ⅱ．調査の記録

1．調査の概要

南八幡遺跡群は、御笠川西岸の南北にのびる雑餉隈丘陵にある。この雑餉隈丘陵は、嵌入する解析谷によって五つの低丘陵に分かれ、その丘陵上には南から雑餉隈、南八幡、麦野A、麦野B、麦野Cの遺跡群が占地している。南八幡遺跡群は、南西部に位置する八つ手状の丘陵上に立地している。

南八幡遺跡群は、南東から北西へのびる標高20mの低丘陵上にあり、北側には北西方向から細長い解析谷が嵌入している。かつてはこの解析谷や麦野丘陵と雑餉隈丘陵との間の谷には用水池が築かれていた。第9次調査地点は丘陵の南西端に立地し、南側は雑餉隈遺跡群とを画する谷に面している。南八幡遺跡群では、これまでに8地点で発掘調査が実施され、周辺には奈良時代の集落跡が比較的広い範囲に拡がっていることが明らかになっており、該期の集落跡が拡がっていることが予想された。試掘調査では、竪穴住居跡や土壙が検出され、北接する第2次、3次調査区の古墳時代から奈良時代の集落跡が拡がっているものと予想された。しかし、遺構の密度はやや疎らであり、採集された弥生土器から該期の遺構が拡がっていることも予想された。

発掘調査は、平成10（1998）年5月14日の表土層の除去作業から開始した。調査区は、営業中の鉄道線路と駅前ロータリーに面して設定されており、数分間隔で列車の通過や発着があった。そのために安全対策上のさまざまな制約が加えられ、調査工程と建築工程との調整はなかなか困難であった。初めは表土層の排土は場外へ搬出して全面的に調査する予定であったが、場内処理に変更されて二分割の調査になった。そこで北半部をⅠ区、南半部をⅡ区と仮称してⅠ区より調査に着手した。さらに調査の終了間際になってⅠ区東側の駅前ロータリーに面した歩道で鋤き取り工事が始まり、竪穴住居跡や掘立柱建物跡が検出された。そこで幅6m、長さ30mの歩道部をⅢ区として新たに調査し、結果的に非効率的な三分割の調査区設定になった。加えて調査中には、養生杭の打設工事や屋体工事も並行して着工され

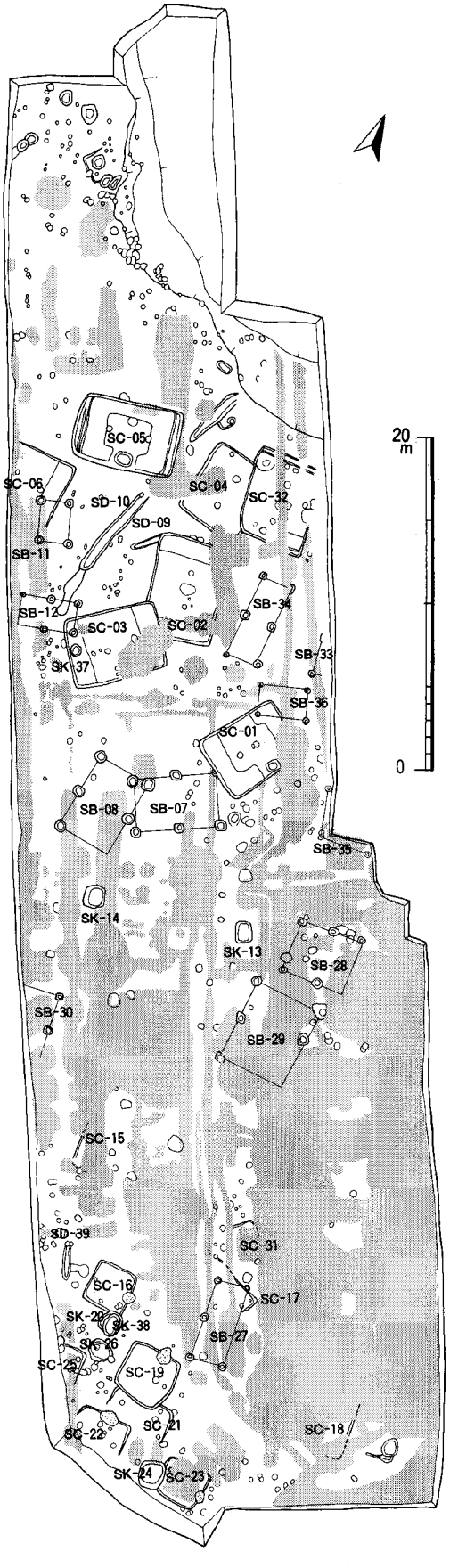


Fig. 5　遺構配置図（1／400）

安全衛生面での問題も生じたが、関係者諸氏の協力で8月28日に無事終了した。また、調査中は梅雨期で発掘区がたびたび冠水し、夏は連日30℃を越す猛暑つづきで多大の影響が出たが、滞りなく終了した。改めて発掘作業に従事した人々の労苦に感謝します。

発掘調査の結果、調査区の中央部には丘陵の尾根が東西方向にのび、尾根の北側斜面には2次調査区との間に小さな谷が、北から湾入している。また、南側は雑餉隈遺跡群との間の細い解析谷にむかって緩やかに傾斜している。調査区内には、ホームの基礎や埋設管による撹乱抗が随所にみられる。殊に南側の緩斜面は撹乱坑が多く、東半部は地山面のほとんどが消失している。そのために遺構の遺存域は西南斜面に限られるが、本来は丘陵尾根から緩斜面全域にわたって拡がっていたものと推察される。検出した遺構は、弥生時代後期と奈良時代の集落跡である。このうち弥生時代後期の集落跡は、丘陵の尾根を中心に拡がっており、竪穴住居跡8棟と掘立柱建物跡12棟のほかに土壙や溝が検出されている。また、奈良時代の集落跡は、南側の緩やかな緩斜面上に占地し、9棟の竪穴住居跡と土壙からなる。この二つの時代の集落域は、一部を除いて占地的要素が異なり、基本的には重複しない傾向にある。

2．弥生時代の調査

弥生時代の主な遺構としては、竪穴住居跡8棟や掘立柱建物跡12棟と土壙4基のほかに溝、柱穴を検出した。これらの遺構は、南側の緩斜面上に占地する一部を除いては調査区中央部の丘陵の尾根を中心にしてやや密に分布している。竪穴住居跡は、いずれも長方形の平面プランをなし、壁下にはベッド状の遺構を作りだしている。このうち2棟の竪穴住居跡（SC－05・32）は、2回から3回にわたって拡幅による増床がなされている。また、4棟の竪穴住居跡（SC－02・03・05・32）からはガラス玉やガラス管玉が出土している。殊に、2号住居跡からは68個のガラス玉と辰砂粒が出土している。

一方、掘立柱建物跡は、1間×2間のものを基本的なプランとしているが、規模的には大小の相違が認められる。柱穴の大きさや平面形も建物跡の規模によって比例するようにして異なる。大型の建物跡の柱穴は、大きな方形プランをなし、反対に小型の建物跡は小さな円形のプランを呈している。占地的には、竪穴住居跡と重複するように、丘陵の高所を中心に尾根線に沿って分布している。景観的には、住居跡群と一体として集落域を構成している印象を与えるが、いずれの建物跡も住居跡によって切られていることから住居跡に先行して営まれ、建物跡群のみで展開していたものと推考される。また、柱穴の中には明瞭な柱痕跡がありながらも、建物跡としてまとまらなかったものがある。

土壙は、1基（SK－37）を除いて住居跡からやや離れた緩斜面上に散逸的に分布している。しかし、その機能は板状圧痕の抉入が小口壁に残る1基（SK－13）が木棺墓の可能性を示唆するほかは明らかではない。

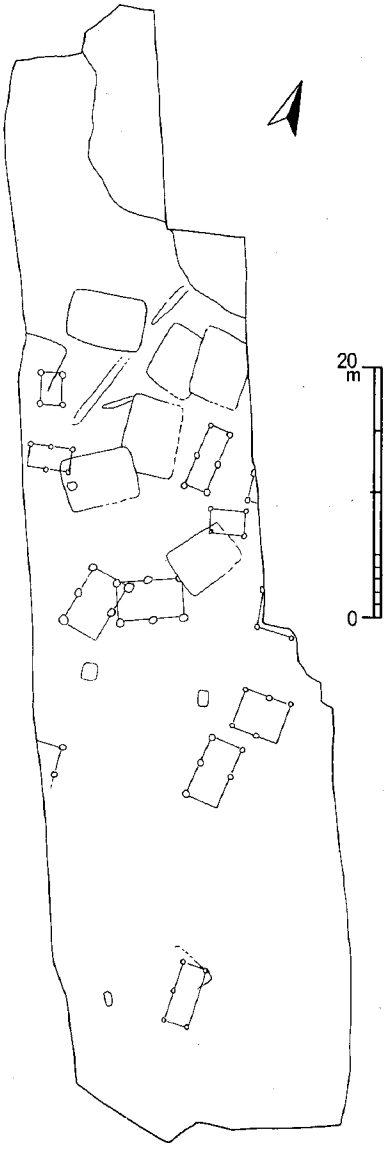


Fig. 6 弥生時代の遺構配置図(1／600)

1）竪穴住居跡（SC）

弥生時代の竪穴住居跡は、すべてで8棟を検出した。このうち7棟は、丘陵の尾根を中心とする東西20m、南北24mの狭い範囲に相接して分布しており、この一群より30mほど下った南側の緩斜面上に1棟のみが隔絶した状況で立地している。この分布状況は、掘建柱建物跡と同じ在り方を示している。このことは時間的な差違をのぞけば、弥生時代後期の集落域は基本的には丘陵の尾根線に沿って展開していたことを示唆している。なお、集落域の境界は、調査区が南北に長い帯状の設定のために明確ではない。

竪穴住居跡は、いずれも長方形の平面プランを呈するもので、壁下には「コ」字形か「L」字形のほかに短壁に沿って対峙するベッド状の貼床面を作り出している。このうち「コ」字形あるいは「L」字形のベッド状遺構をもつ住居跡は、ベッド状遺構のない空間域に長方形の土壙が掘られている。5号住居跡（SC－05）と32号住居跡（SC－32）の2棟は、短辺の拡幅による増床が2回から3回にわたって行われている。また、丘陵上に立地する7棟の住居跡のうち4棟からはガラス玉や管玉が出土している。1kmほど西方の須玖遺跡群には青銅器やガラス製品の生産工房跡があり、近接した同時期の遺跡群の関係を対比して考えると興味深い資料になろう。

1号住居跡　SC－01（Fig. 7　PL. 3）

1号住居跡は、調査区中央部の丘陵尾根上に立地し、北へ4mの距離には2号住居跡が位置している。西壁は7号建物跡の柱穴を切り、北側のベッド状遺構は36号建物跡の柱穴を突き固めて作り出している。東壁から南壁の隅壁が消失しているが、平面形は短軸が4.15m、長軸は5.2mの長方形プランに復原され、床面積は21.5m²の広さになる。東西の壁面下には、L字形のベッド状遺構を逆対照位に造り付けている。また、南壁のベッド状遺構の途切れた中央部には長さ75cm、幅60cm、深さ30cmの土壙があり、ここを始終点として壁下に幅10cmの周溝が巡っている。この周溝の壁際には厚さ約2cmの板痕跡が観察され、壁面に沿って板材が巡らされていたものと推考される。

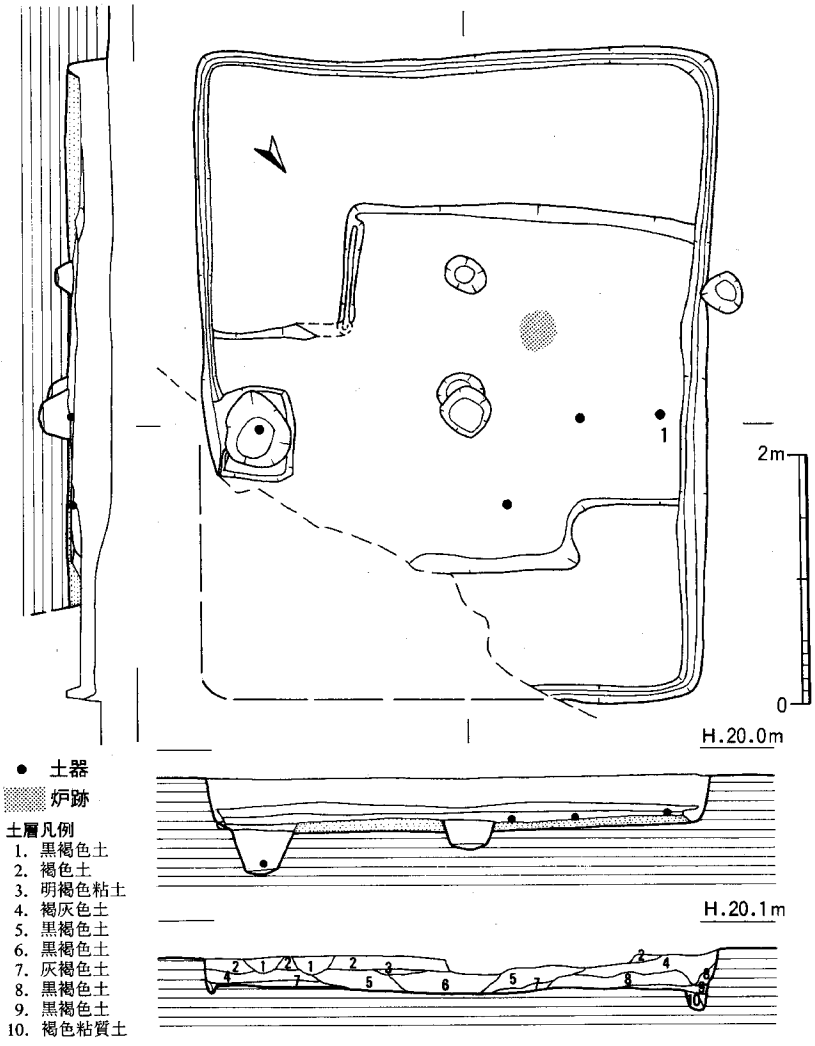


Fig. 7　1号住居跡実測図（1／60）

床面は厚さが5～10cmの貼床で、中央には炉がある。幅90～110cmのベッド状遺構は10cmの高さに貼床され、深さは27cm。床面までの深さは32～35cmを測る。

出土遺物（Fig. 8　PL. 23）

1は口径23cmの高坏である。口縁部はストレートに外反し、体部は小さな扁球形をなす。胎土は若干の石英と長石粒を含み、焼成は良好。外面が褐灰色、内面は黒褐～黄橙色。2は口径8cm、器高4.2cmの鉢。体部はラグビーボール状に窄まり、口縁部は鋭利に摘み出している。内外面ともに押圧ナデ調整。胎土は石英砂を含み、焼成は良好。外面は灰白色、内面は明褐灰色。3は口径20cmの甕。「く」字状の口縁部は口唇部が小さく肥厚する。調整は口縁部内面と胴部外面がハケ目、内面は押圧後にヘラケズリ。胎土は石英と長石粒を含む。外面は褐灰～橙色。内面は明赤褐色。

5は凝灰岩質の石庖丁片である。6は手持ち式の扁平な砥石である。小口面は両側縁から鋭利に研ぎ出している。

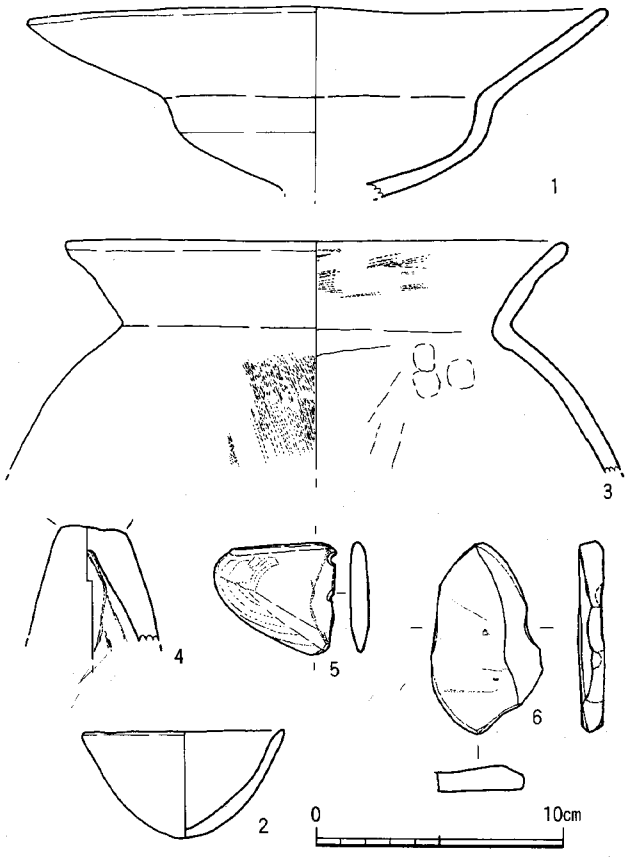


Fig. 8　1号住居跡出土遺物実測図（1／3）

2号住居跡　SC－02

（Fig. 9　PL. 4）

2号住居跡は、調査区中央部の丘陵上に立地し、34号建物跡のすぐ西に位置している。南西隅壁は3号住居跡に切られ、東壁は撹乱で削平されている。平面形は短軸が4.4m、長軸は6.2mの長方形プランを呈し、床面積は27.3m²の広さになる。北壁と南壁下には幅約1.1m、高さ7cmの短冊状のベッド状遺構が対峙して造られている。床面は鳥栖ローム土を5cmの厚さで敷き詰めて貼床としている。床面の中央には短軸65cm、長軸105cm、深さ20cmの炉跡がある。この炉跡を挟んで南北に2本の主柱穴がある。柱穴は径30～45cm、深さは40cmで、径15cmの柱痕跡が残る。柱間は2m。北壁と西壁下には幅10～15cmの周溝が巡る。ベッド状遺構までの深さは20cm、床面までの深さは25～30cm。床面上や覆土中～下層からは土器や石器と68個のガラス小玉が出土している。また、上層からは布目瓦片が1点出土している。

出土遺物（Fig. 10　Tab. 2・3　巻頭図版2　PL. 23）

7は口径15.2cm、底径6.2cm、器高が16.5cmの甕である。口縁部は短く外反し、底部は厚い。外面はヘラケズリ～ナデ、内面は押圧ナデ調整。胎土には石英と長石微細を多く含む。外面は黄橙～赤褐色、内面は橙～褐灰色。8は底径10.8cmの大型甕。内外面ともに粗いハケ目調整。胎土は粗く石英粗砂を多く含む。9は上層混入の布目の平瓦片。胎土は精良で、灰色。

10～14は砥石。10～12は手持ち式砥石。13・14は砂岩質の置砥石である。

15～82はガラス小玉である。最大径は2.3(36・68)～6.7mm(39)、重さは0.013(17)～0.284(39)g。色調はカリガラスが淡青、青紺で、ソーダガラスは黄緑色(36・68)である。

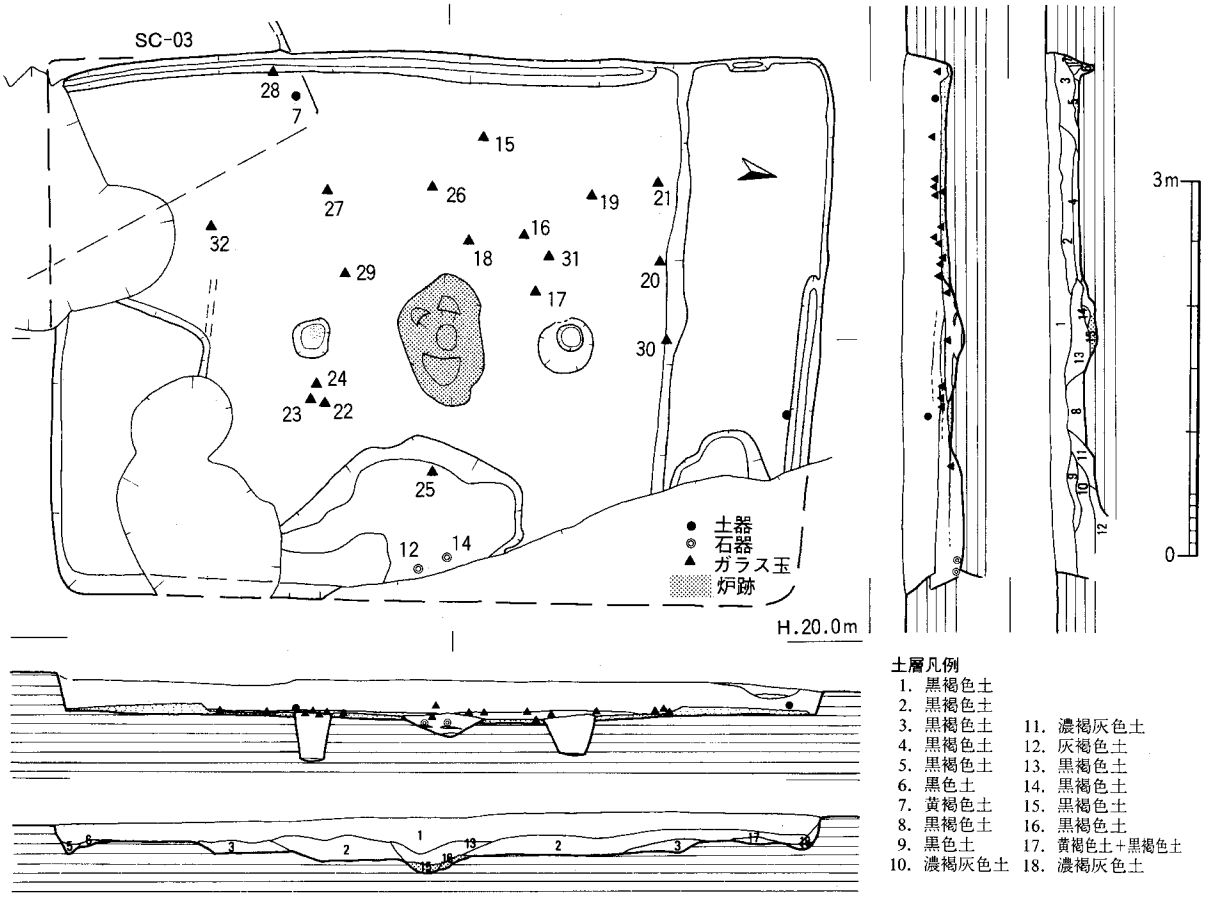


Fig. 9　2号住居跡実測図（1／60）

3号住居跡　SC－03（Fig. 11　PL. 4）

3号住居跡は、調査区の中央部に位置する短軸4.4m、長軸5.7mの長方形プランの住居跡である。北東壁は2号住居跡を、北西壁は12号建物跡と重複しており、いずれよりも新しい。東壁と西壁下には幅が1.2～1.4mの短冊状のベッド状遺構が対照位に造られている。西側のベッド状遺構下には37号土壙がある。このベッド状遺構と床面は鳥栖ローム土を5～15cmの厚さに敷き詰めて貼床としているが、東側のベッド状遺構は2号住居跡の覆土上にあるためにさらに厚く敷き固めている。床面の広さは25m²で、中央部には短径35cm、長径60cmの楕円形の炉がある。この炉を挟んで2本の主柱穴が、ベッド状遺構のそばにある。柱間は2.6m。覆土下層からは甕、鉢のほかに石庖丁とガラス小玉が5点出土している。このうちガラス玉は遺失したものがあったかも知れない。

出土遺物（Fig. 12　Tab. 3　巻頭図版2　PL. 23）

83は底径が6.2cmの甕。ハケ目調整で内面は粗く、外面はやや細かい。胎土は良質で少量の砂粒を含む。にぶい橙～黄橙色。85は口径14.6cm、底径4.9cm、器高が7.8cmの鉢。口縁部は半球形の

No.	出土遺構	資料名	色調	最大径mm	最大長mm	孔径mm	重量g	比　重	区　　分	観　察　所　見
15	SC-02	小玉	淡青	4.30	2.55	1.50	0.063	2.52	カリガラス	気泡列有り。
16	SC-02	小玉	淡青	3.60	1.70	1.21	0.027	2.08	カリガラス	引き伸ばされた気泡有り。
17	SC-02	小玉	淡青	2.80	1.50	1.11	0.013	1.86	カリガラス	気泡列有り。
18	SC-02	小玉	淡青	5.00	2.80	1.98	0.072	2.12	カリガラス	
19	SC-02	小玉	青紺	4.90	2.20	2.37	0.050	2.63	カリガラス	気泡がほとんど見られない。
20	SC-02	小玉	淡青	5.30	3.95	2.05	0.133	2.42	カリガラス	筒型の外形。引き伸ばされた小気泡有り。
21	SC-02	小玉	淡青	3.50	1.70	1.35	0.018	2.25	カリガラス	気泡列有り。
22	SC-02	小玉	淡青	4.55	3.30	1.60	0.083	2.77	カリガラス	気泡筋の蝕像が見られる。
23	SC-02	小玉	淡青	3.05	2.50	1.20	0.029	1.76	カリガラス	

Tab. 2　2号住居跡出土ガラス玉計測表1

No.	出土遺構	資料名	色調	最大径mm	最大長mm	孔径mm	重量g	比　重	区　　分	観　察　所　見
24	SC-02	小玉	淡青	3.50	2.60	測定不能	0.026	2.60	カリガラス	½残存。
25	SC-02	小玉	淡青	3.55	3.80	1.15	0.053	2.52	カリガラス	
26	SC-02	小玉	青紺	2.90	2.00	測定不能	0.020	2.86	カリガラス	
27	SC-02	小玉	淡青	測定不能	測定不能	測定不能	測定不能	測定不能	カリガラス	½残存。
28	SC-02	小玉	淡青	3.50	2.40	1.15	0.036	2.57	カリガラス	気泡列多い。
29	SC-02	小玉	青紺	3.60	2.30	1.00	0.032	2.67	カリガラス	微細な気泡が非常に多い。気泡筋有り。
30	SC-02	小玉	淡青	4.45	2.90	1.55	0.059	2.46	カリガラス	
31	SC-02	小玉	淡青	5.45	3.55	2.20	0.112	2.33	カリガラス	引き伸ばされた小気泡有り。
32	SC-02	小玉	淡青	3.35	4.50	0.95	0.068	2.27	カリガラス	外形筒型。孔径が小さい。
33	SC-02	小玉	淡青	3.10	2.95	1.00	0.040	2.50	カリガラス	外形筒型。切断面傾斜。気泡列有り。
34	SC-02	小玉	淡青	4.10	3.40	0.95	0.074	2.31	カリガラス	外形筒型。切断面の傾斜大。
35	SC-02	小玉	淡青	4.65	3.65	1.00	0.093	2.45	カリガラス	
36	SC-02	小玉	黄緑	2.30	1.05	測定不能	0.007	測定不能	ソーダ石灰ガラス	孔内に気泡が破裂した突起有り。
37	SC-02	小玉	淡青	5.00	3.10	1.35	0.097	2.20	カリガラス	引き伸ばされた小気泡有り。
38	SC-02	小玉	淡青	4.30	2.75	2.15	0.052	2.17	カリガラス	外形筒型。極細の気泡筋。
39	SC-02	小玉	淡青	6.70	5.10	1.45	0.284	2.29	カリガラス	不純物混入。
40	SC-02	小玉	淡青	5.80	2.70	2.15	0.100	2.38	カリガラス	孔内に気泡による突起。気泡列有り。
41	SC-02	小玉	淡青	3.85	3.25	1.35	0.063	2.33	カリガラス	孔内に気泡による突起。気泡筋有り。
42	SC-02	小玉	淡青	3.50	2.00	1.15	0.028	2.80	カリガラス	
43	SC-02	小玉	青紺	4.10	3.40	1.20	0.070	2.50	カリガラス	気泡列有り。
44	SC-02	小玉	淡青	5.15	4.65	1.65	0.127	2.27	カリガラス	全体に歪んだ外形。
45	SC-02	小玉	淡青	4.00	2.95	1.30	0.058	2.64	カリガラス	引き伸ばされた気泡有り。
46	SC-02	小玉	淡青	4.00	3.00	2.00	0.052	2.26	カリガラス	気泡多い。
47	SC-02	小玉	淡青	4.10	3.30	1.00	0.051	2.22	カリガラス	
48	SC-02	小玉	淡青	4.30	2.80	1.85	0.048	2.26	カリガラス	気泡多い。
49	SC-02	小玉	淡青	3.40	1.60	1.05	0.019	2.71	カリガラス	気泡少ない。
50	SC-02	小玉	淡青	3.60	2.15	1.30	0.031	2.82	カリガラス	引き伸ばされた気泡有り。
51	SC-02	小玉	淡青	3.35	2.00	1.00	0.026	2.60	カリガラス	気泡列・筋多い。
52	SC-02	小玉	淡青	2.90	1.40	測定不能	0.013	4.33	カリガラス	気泡筋多い。
53	SC-02	小玉	淡青	3.30	2.70	1.00	0.031	2.58	カリガラス	気泡の量に部分的な偏りがある。
54	SC-02	小玉	青紺	3.45	1.65	1.05	0.021	3.00	カリガラス	
55	SC-02	小玉	青紺	3.30	1.65	測定不能	0.020	3.33	カリガラス	気泡は全体に少ないが、大きい。
56	SC-02	小玉	青紺	3.35	2.10	0.95	0.027	2.70	カリガラス	気泡少な目。列・筋有り。
57	SC-02	小玉	淡青	2.35	1.90	1.10	0.008	測定不能	カリガラス	引き伸ばされた小気泡有り。
58	SC-02	小玉	青紺	2.90	2.45	測定不能	0.024	2.67	カリガラス	微細な気泡列有り。
59	SC-02	小玉	青紺	3.45	1.75	1.10	0.025	3.13	カリガラス	気泡の集約過程が見られる。
60	SC-02	小玉	青紺	2.85	2.05	1.05	0.021	3.00	カリガラス	気泡は少ない。
61	SC-02	小玉	青紺	3.30	3.25	1.00	0.040	2.67	カリガラス	外形筒型。気泡列有り。
62	SC-02	小玉	青紺	2.90	1.45	1.25	0.011	測定不能	カリガラス	
63	SC-02	小玉	青紺	2.85	1.60	測定不能	0.015	測定不能	カリガラス	気泡列と共に、列に関係なく微細な気泡の集中有り。
64	SC-02	小玉	青紺	2.60	1.55	測定不能	0.013	測定不能	カリガラス	気泡列・筋有り。
65	SC-02	小玉	青紺	3.15	1.50	1.00	0.018	2.57	カリガラス	気泡は全体に少ないが、大きい。
66	SC-02	小玉	青紺	3.05	1.80	測定不能	0.019	2.71	カリガラス	
67	SC-02	小玉	淡青	3.95	3.00	測定不能	0.037	2.64	カリガラス	
68	SC-02	小玉	黄緑	2.30	1.10	測定不能	0.009	測定不能	ソーダ石灰ガラス	気泡筋とは異なるが筋有り。
69	SC-02	小玉	淡青	3.60	3.00	測定不能	0.047	2.47	カリガラス	濃緑色の混入物有り。引き伸ばされた小気泡。
70	SC-02	小玉	淡青	3.10	2.00	1.15	0.023	2.47	カリガラス	外形筒型。気泡多い。
71	SC-02	小玉	淡青	4.05	3.30	2.00	0.055	2.39	カリガラス	
72	SC-02	小玉	淡青	5.45	3.45	1.60	0.137	2.40	カリガラス	側面に破れた気泡筋有り。
73	SC-02	小玉	淡青	3.40	2.35	1.25	0.035	2.69	カリガラス	外形歪んだ筒型。気泡列・筋有り。
74	SC-02	小玉	淡青	3.30	2.65	1.25	0.039	2.79	カリガラス	切断されたままの状態に近い。白色混入物有り。
75	SC-02	小玉	淡青	4.25	1.95	1.50	0.034	3.09	カリガラス	歪んだ外形。裂口有り。
76	SC-02	小玉	青紺	3.50	2.90	1.05	0.043	2.69	カリガラス	明瞭な気泡列有り。
77	SC-02	小玉	淡青	3.95	2.40	1.40	0.035	2.69	カリガラス	黒色の層状不純物有り。
78	SC-02	小玉	淡青	4.50	2.80	2.05	0.054	2.45	カリガラス	歪んだ外形。
79	SC-02	小玉	青紺	4.40	2.80	1.70	0.054	2.45	カリガラス	気泡列・極細筋有り。
80	SC-02	小玉	淡青	3.95	1.95	1.25	0.028	2.33	カリガラス	気泡が多く、偏在。
81	SC-02	小玉	淡青	測定不能	測定不能	測定不能	測定不能	測定不能	カリガラス	2片に分割。同一個体？。
82	SC-02	小玉	淡青	測定不能	測定不能	測定不能	測定不能	測定不能	カリガラス	½残存。

Tab. 3　2号住居跡出土ガラス玉計測表2

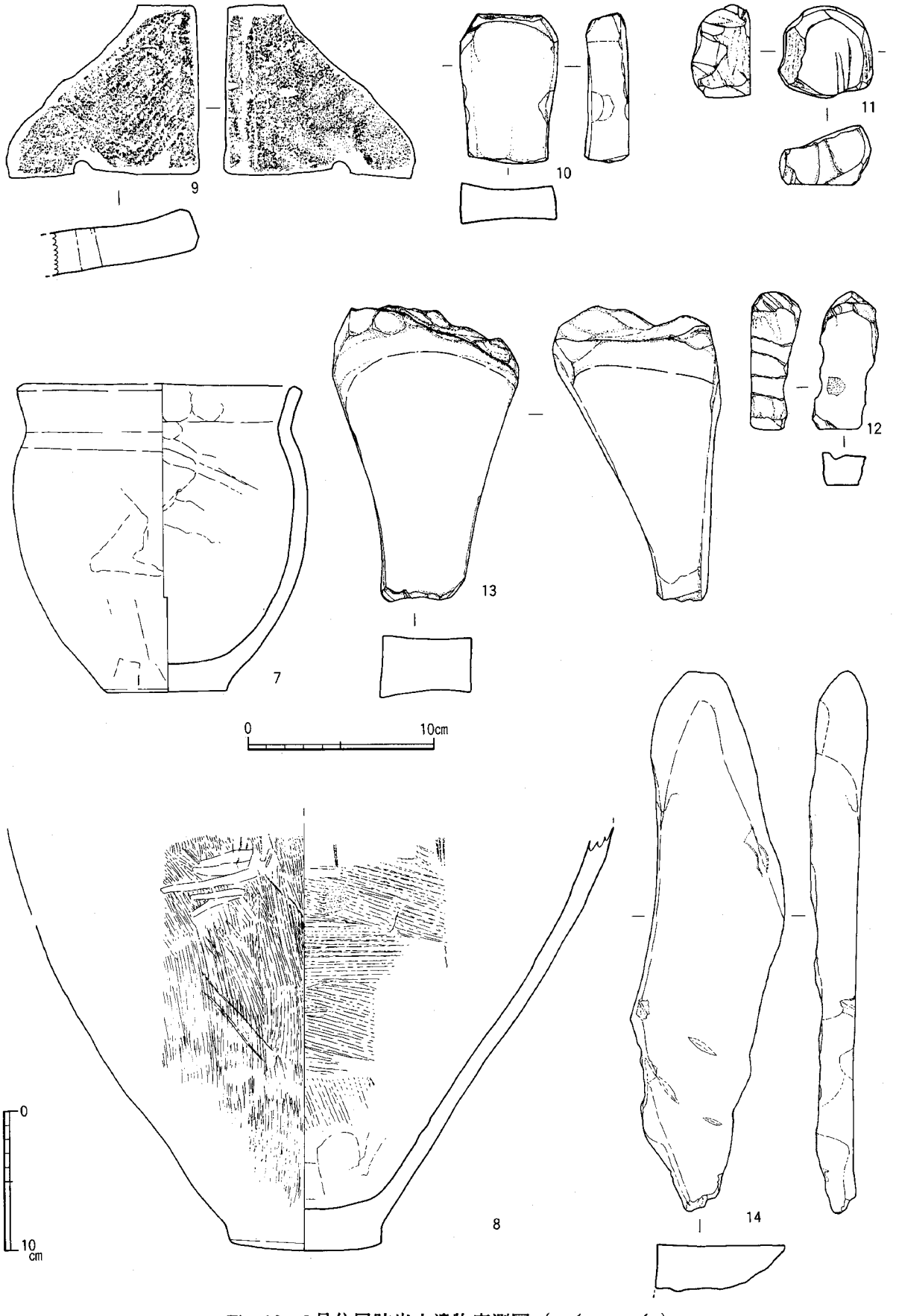


Fig. 10　2号住居跡出土遺物実測図（1／3・1／4）

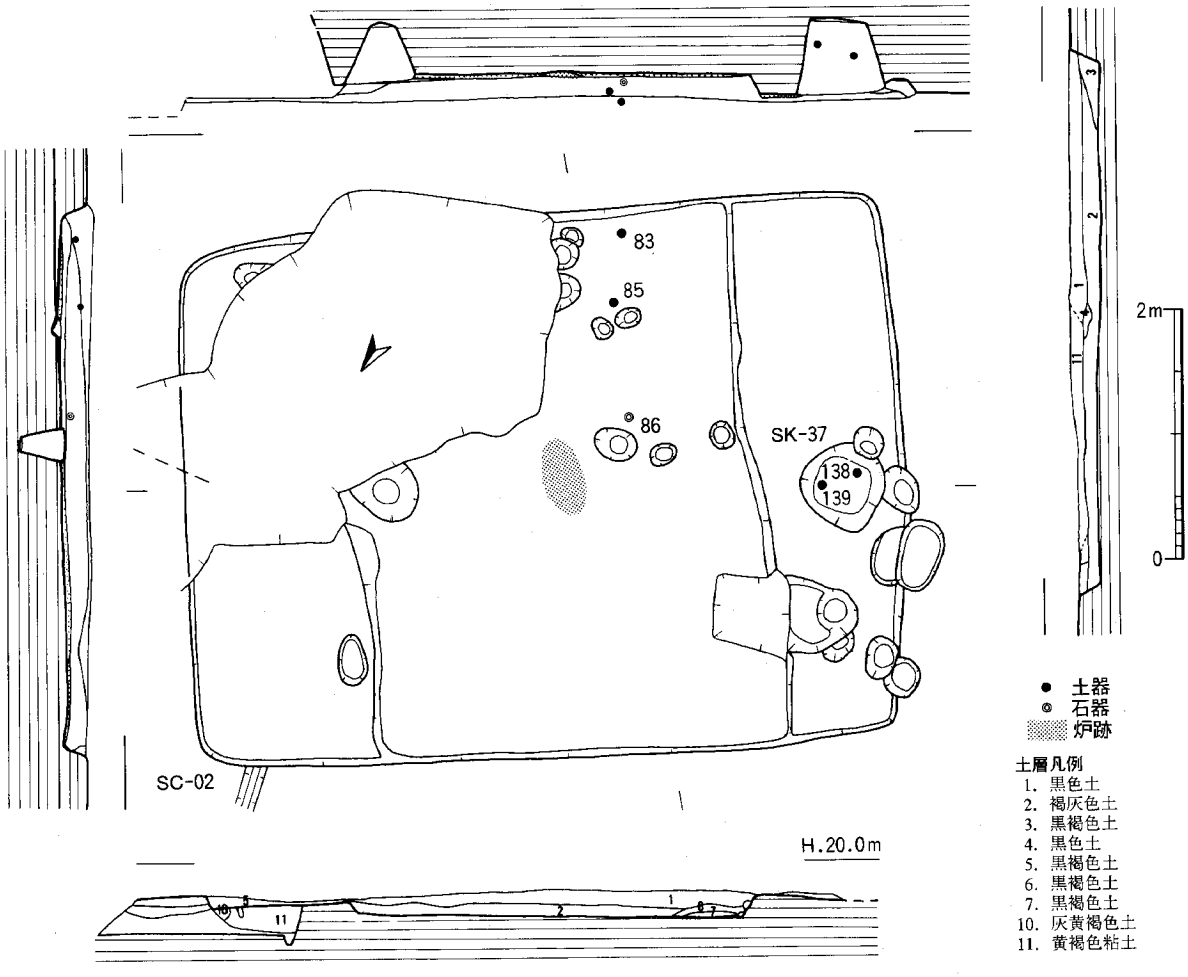


Fig. 11　3号住居跡実測図（1／60）

体部から短く直口する。調整は内面が押圧後に粗いヨコハケ目、外面は下半ヘラケズリ、上半は粗いタテハケ目。胎土は石英砂を多く含む。内面がにぶい橙色、外面は褐灰色。

86は凝灰岩質の石庖丁で、長さ13.2㎝、幅4.9㎝、厚さは7.4㎜。背面には1.7cmの間をおいて径2～3㎜の紐通し孔を穿っている。刃部は鋭利で、濃灰紫色を呈す。

87～91は最大径が2.8(87)～4.95㎜(90)のガラス小玉で、0.034㎜(91)～0.088g(89)の重さである。カリガラスが淡青色～青紺色(88～91)で、ソーダガラスは黄緑色(87)である。

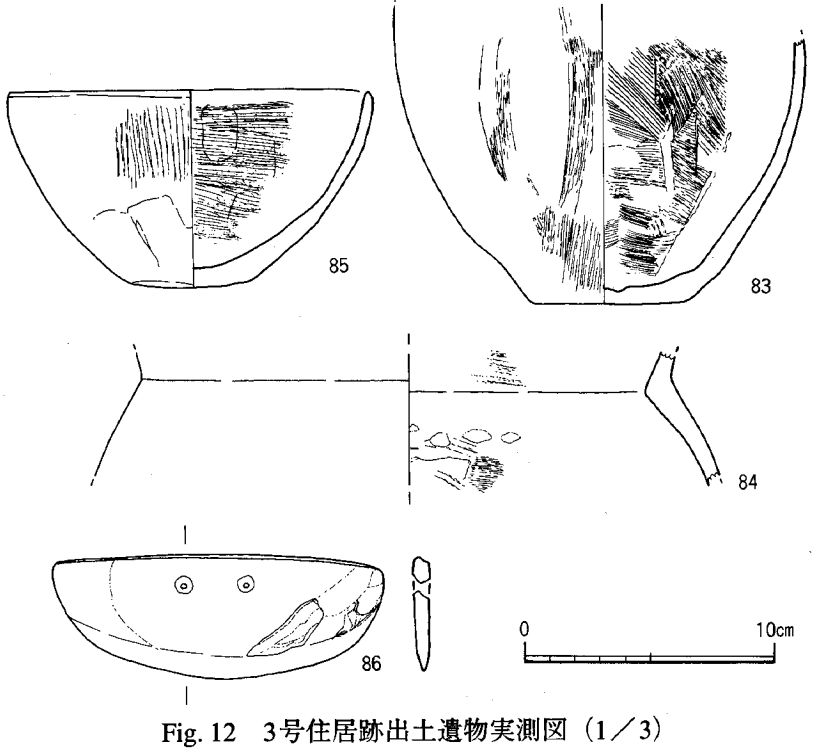


Fig. 12　3号住居跡出土遺物実測図（1／3）

4号住居跡　SC－04

(Fig. 13　PL. 5)

4号住居跡は、丘陵尾根の北寄りに立地し、南には2号住居跡、東には5号住居跡が隣接している。東壁は32号住居跡に切られている。平面形は短軸4.15m、長軸4.85mの長方形プランを呈し、床面積は20.1㎡の広さになる。壁面は削平による消失が著しいが、壁下には幅15㎝の周溝が巡る。なお、東壁の周溝は、南壁から3mの所で1.2mほど西へ矩形に曲がっている。その目的がベッド状遺構に伴う区画なのか、拡幅に因るものかは判然としない。床面は鳥栖ローム土を敷き固めた貼床で、ほぼ中央に炉跡がある。2本柱の主柱穴は1.5mの間をおいて床面の中央に2本配されているが、炉跡は北側の柱穴に寄りすぎている。覆土中からは弥生土器の甕や高坏片がわずかに出土している。

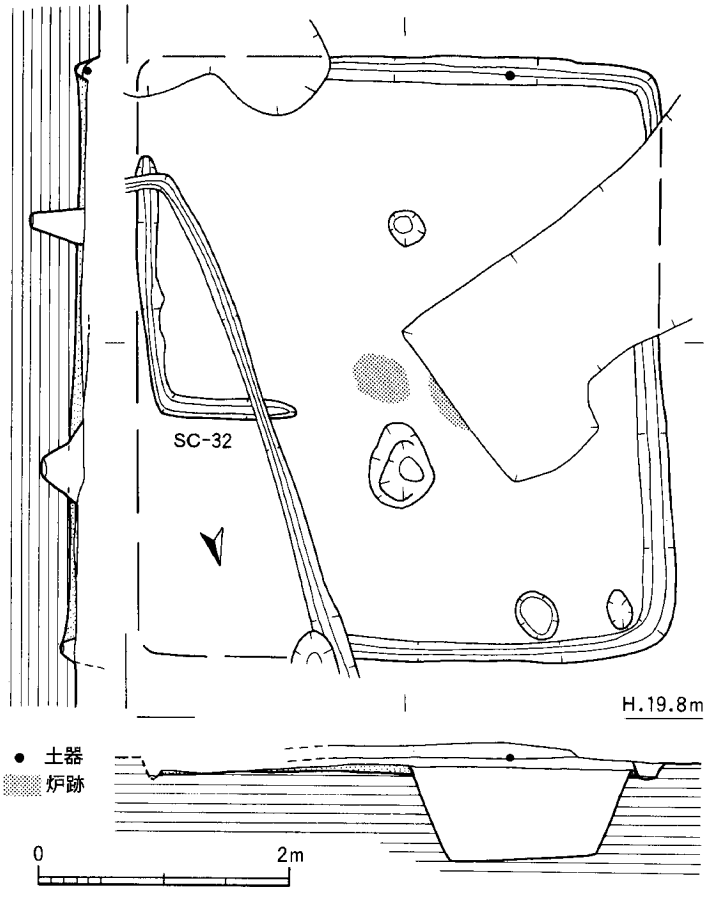


Fig. 13　4号住居跡実測図（1／60）

出土遺物（Fig. 14）

92は底径13cmの高坏の脚で、脚裾は鋭く屈曲して大きく外反する。外面から脚裾内面はヨコナデ、脚内面は回転ヘラケズリ。胎土には若干の砂粒と雲母微細を含む。色調はにぶい橙色。93は砥石。

5号住居跡　SC－05（Fig. 15　PL. 5～7）

5号住居跡は、丘陵北側の緩斜面上に立地しており、群集する住居跡群の最も北寄りに位置している。平面形は東西棟の長方形プランを呈し、二度の拡幅造作がなされている。初めは短軸が4.25m、長軸が5.15mで床面積は21.9㎡の広さである。これを東壁側に55㎝、西壁側に60㎝拡げて26.5㎡の広さにし、4.6㎡の居住空間の拡大が図られている。なお、西壁ではこの間にもう一度拡幅が行われ、結果的には東側で一度、西側で二度の拡張されている。この拡幅造作が東西壁で同時に行われ、さらに西壁側で追加して実施されたのかは不明である。南壁際の中央には長さ100㎝、幅75㎝、深さ60㎝の土壙があり、その南西隅の上縁からは壁面に沿って幅15㎝の浅い溝が掘り込まれている。この溝は壁面に沿って40㎝ほど西へ延び、そこから壁面に沿って垂直に立ち上がっている。この屈折面には灰白色粘土が半円形に貼り付けられており、煙道的な様相を示唆しているが、覆土中には多量の炭片が含まれているにもかかわらず壁面の赤変は観察されなかった。この土壙を除いた壁下には、「口」の字状にベッド状遺構が全周している。周溝も土壙を始終点とし

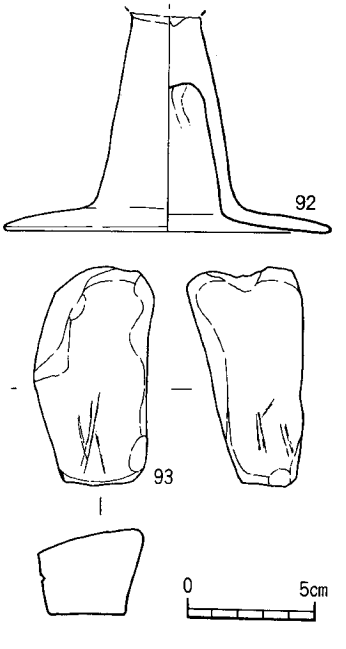


Fig. 14　4号住居跡出土遺物実測図(1／3)

て壁下を巡り、拡幅に際してはその都度埋め戻されている。床面とベッド状遺構は鳥栖ローム土を突き固めた貼床で、比高差7～10cmのベッド状遺構との間には西壁を除いて周溝が巡る。主柱穴は中軸線上に対峙する2本柱で、深さは50～65cmある。柱間距離は2.5mで、この間に炉跡はなく他と大きく異なる。遺物は丸底壷や高坏、鉢のほかにガラスの小玉や管玉が出土している。

出土遺物（Fig. 16　Tab. 3　巻頭図版2　PL. 23）

94・95は小型丸底壺である。94は口径6.3cm、器高は7cmで小さな底部がつく。口縁部は偏球形の胴部から短く直口気味に立ち上がる。胴部内面は押圧ナデ、外面はナデ調整。胎土は良質で焼成は良好。外面は橙色、内面は暗褐色。95は半球形の胴部に短い胴部が付こう。押圧ナデ調整。胎土には石英と長石を多く含み、色調は明赤褐色～橙色。96～98は鉢。96は口径7.1cm、底径4cm、器高4.1cm。底部は肉厚で、口縁部は小さく直口する。調整は押圧ナデ。胎土は若干の石英と長石を含み、焼成は良好。97は口径10.1cm、底径4cm、器高は6.5cm。口縁部は偏球形の胴部から小さく外反する。

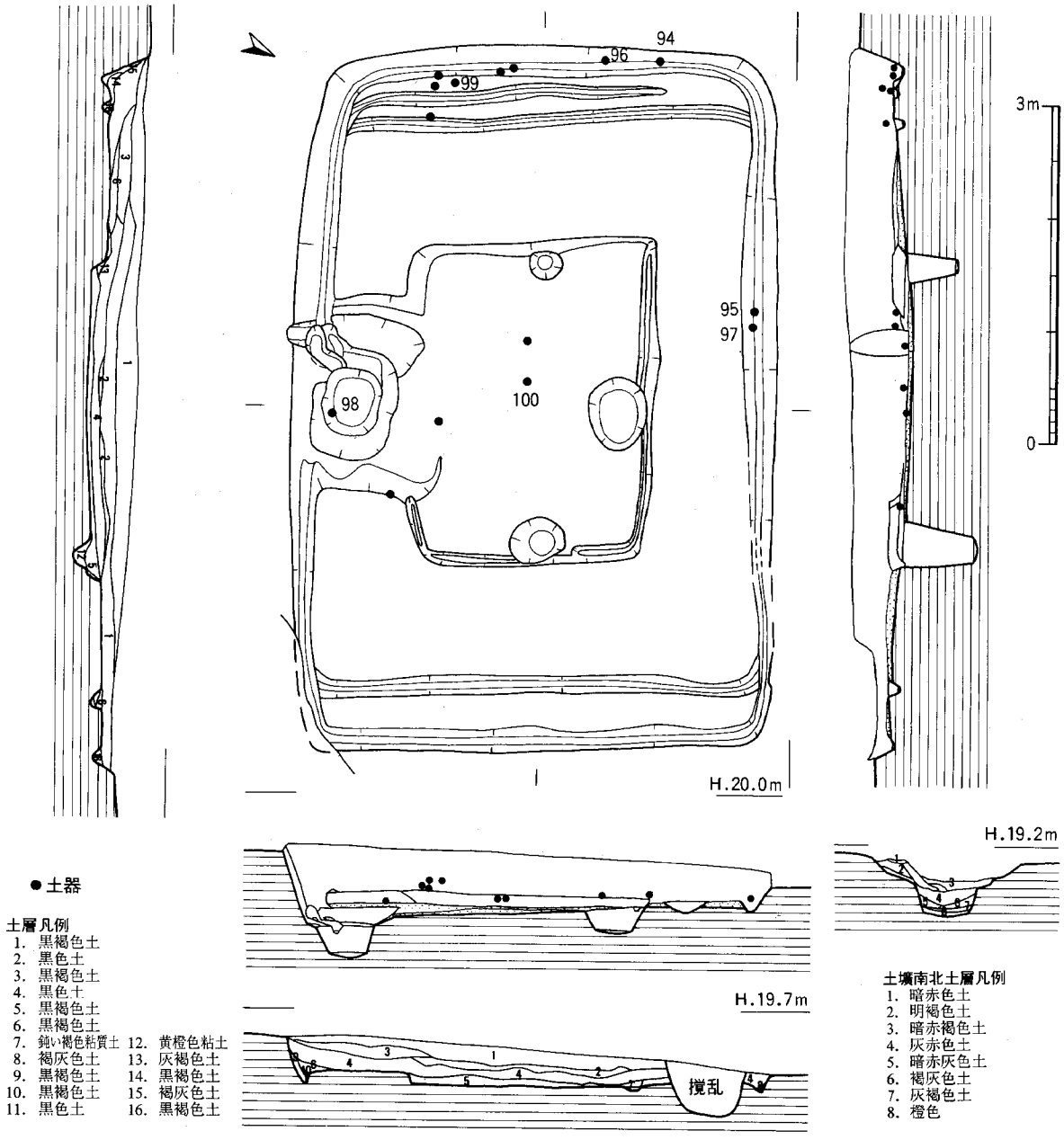


Fig. 15　5号住居跡実測図（1／60）

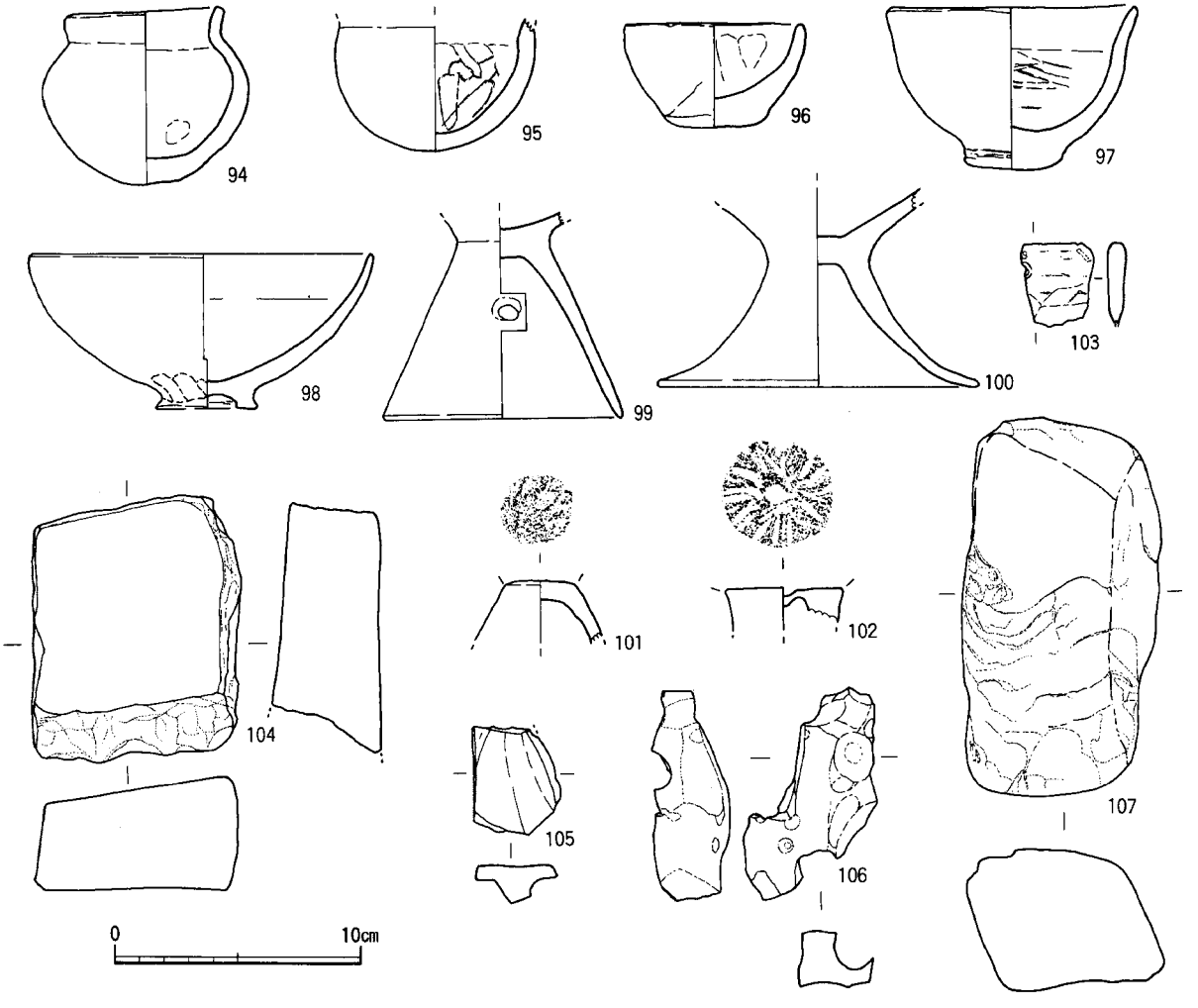


Fig. 16　5号住居跡出土遺物実測図（1／3）

底部は1.8cmと厚い。口縁部はヨコナデ、内面は押圧後にナデ調整。胎土は砂粒を多く含む。明赤褐色～橙色。98は口径13.8cm、器高は6.2cm。半球形の胴部に底径4cmの高台状の短い脚が付く。調整は口縁部がヨコナデ、内面はナデ。胎土には細砂粒を多く含み、浅黄橙色。99・100は台付鉢。99は脚径9.6cm。脚部はストレートに開き、上位に斜めの円孔を穿つ。胎土は精良で、灰白色。100は脚径13cmで、朝顔状に外反する。胎土は砂粒を多く含み、橙色。101・102は高坏の脚。

103は石庖丁の破片である。背厚は7mmで、背面には3～4mmの紐通し孔が穿たれている。104～106は砥石。104は砂岩質の置砥石で、表裏面と両側面を砥面としている。厚さは3.6～4.5cm。107は砂岩質の支脚で、長さは15.2cm。

108・109は青紺色のカリガラス小玉。108は最大径が3.8mmで、重さは0.058gである。110は、赤色のソーダ石灰ガラスの管玉である。最大径3.5mm、長さは11.75mm、重さは0.091gを測る。

No.	出土遺構	資料名	色調	最大径mm	最大長mm	孔径mm	重量g	比　重	区　　分	観　察　所　見
87	SC-03	小玉	黄緑	2.80	1.45	測定不能	0.014	測定不能	ソーダ石灰ガラス	朱色、紺色などの色微粒子が観察される。
88	SC-03	小玉	淡青	4.20	3.65	2.00	0.068	2.52	カリガラス	外形筒型気泡少。
89	SC-03	小玉	淡青	4.50	4.00	1.90	0.088	2.44	カリガラス	引き伸ばされた気泡有り。
90	SC-03	小玉	淡青	4.95	3.95	1.95	0.074	2.47	カリガラス	側面に大粒の気泡が破れた跡有り。
91	SC-03	小玉	青紺	3.05	2.85	測定不能	0.034	2.43	カリガラス	外形筒型。
108	SC-05	小玉	青紺	3.80	3.80	1.00	0.058	2.42	カリガラス	外形筒型。
109	SC-05	小玉	淡青	測定不能	測定不能	測定不能	0.097	2.25	カリガラス	
110	SC-05	管玉	赤	3.50	11.75	測定不能	0.091	2.53	ソーダ石灰ガラス	

Tab. 4　　3・5号住居跡出土ガラス玉計測表

6号住居跡　SC－06

(Fig. 17　PL. 7)

6号住居跡は、調査区西端にあり、丘陵尾根の北寄りに立地している。住居跡のすぐ北には5号住居跡が位置し、東壁側は11号建物跡の柱穴を切っている。西壁と南壁は明らかでないが、平面形は4.4m～6mの長方形プランに復原されよう。東壁下には幅が100cmのベッド状遺構が造られている。3号住居跡のように短壁に沿って対照位に付設されるタイプのものになろう。床面の中央には炉跡があり、長軸に沿った延長線上のベッド状遺構下に主柱穴がある。主柱穴は2本柱で、柱間は3.4mになろうか。柱穴は径35cmの円形で、深さは45cmを測る。床面とベッド状遺構は鳥栖ローム土を突き固めた貼床で、10cmの比高差がある。遺物は少ないが、弥生土器の壺や甕と石庖丁が出土している。

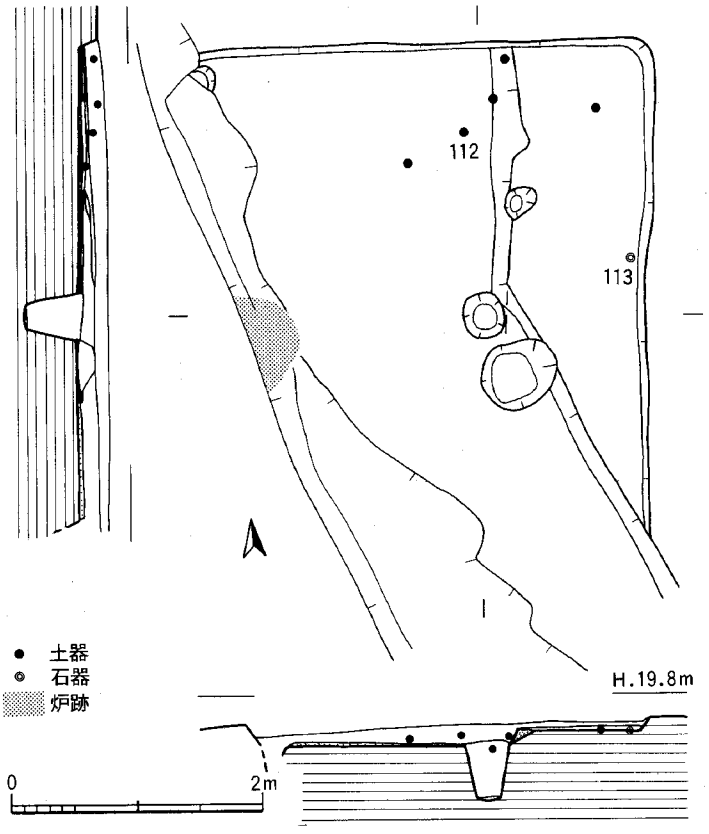


Fig. 17　6号住居跡実測図（1／60）

出土遺物（Fig. 18　PL. 23）

111は玉葱をなす壺の胴部で、最大径は20cmを測る。胎土は良質で、石英と長石粒を若干含む。橙色。

112は口径が23.6cmの甕。口縁部「く」字に外反し、胴部はやや長胴形をなそうか。胎土には微細砂と多くの雲母粒を含む。色調は外面がにぶい褐色、内面が灰黄褐色。

113は凝灰岩質の石庖丁で、長さ11.1cm、幅4.3cm、厚さは6.6mm。背面には1cmの間をおいて径4～5mmの紐通し孔を穿っている。刃部は鋭利で、濃灰紫色。

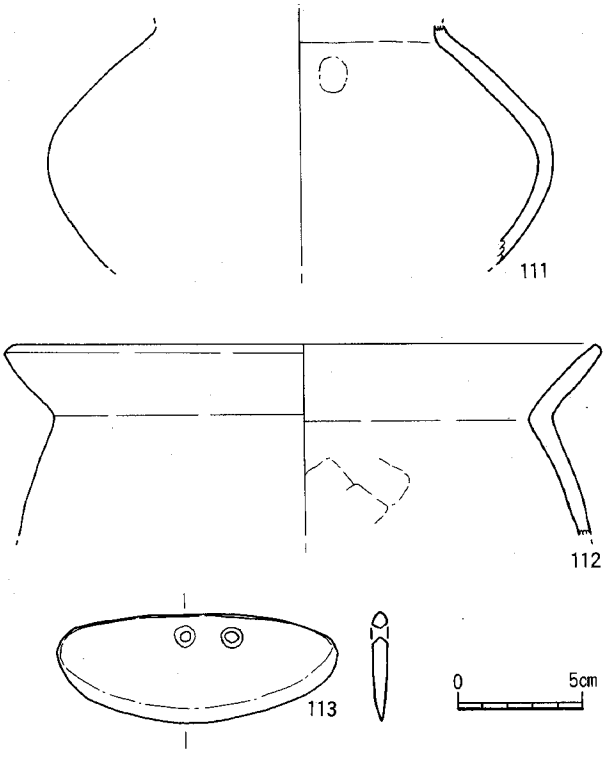


Fig. 18　6号住居跡出土遺物実測図（1／3）

17号住居跡　SC－17

(Fig. 19　PL. 8)

17号住居跡は、南側の緩斜面上に立地する。北壁は27号建物跡の柱穴を切って掘り込まれ、5m西には16号住居跡がある。住居跡は、北壁と東壁の一部を残すのみで明らかでないが、4m～5mの長方形プランをなそう。床面はローム土の貼床で、北壁に寄って楕円形の炉跡がある。主柱穴は判然としない。

32号住居跡　SC－32

(Fig. 20　PL. 8～9)

32号住居跡は、丘陵尾根の北側にあり、北から湾入する谷に面して占地している。34号建物跡のすぐ北に位置し、西壁は4号住居跡の東壁を切っている。平面プランは、南北棟の長方形をなし、居住の途中で短壁側を南北に各々広げて居住域を拡張している。初めは短軸が4.4m、長軸が4.9mの広さで壁下には幅10cmの周溝を巡らし、南壁には幅65～85cmの短冊状のベッド状遺構を付設している。次に、南壁を30cm、北壁を45cmの幅で南北に拡幅している。この拡幅時に南壁下の周溝は埋めてベッド状遺構として拡幅している。一方、北壁下の周溝はそのまま機能しており、周溝から壁面までを盛土してベッド状遺構としている。床面積は建築当初が21.5m²で、拡幅後は24.8m²の広さになり、3.3m²の居住空間が増大している。主柱穴は中軸線上にある2本柱で、柱間は2.2mである。柱穴は、径40～50cm、深さが75～85cmで、径12cmの柱痕跡が残っていた。床面とベッド状遺構は鳥栖ローム土を3～6cmの厚さで固く敷き詰めた貼床で、中央には浅い楕円形の炉跡がある。なお、南側の柱穴からベッド状遺構の下には深さ60cmの大きな窪みがあり、ローム土を一段と固く敷き詰めて床面を強化している。覆土中からは19個のガラス小玉が出土している。また、西壁の南寄りには長さ50cm、幅40cm、深さ20cmの浅い土壙があり、丸底壷や高坏が出土したが、住居跡に伴うかは判然としない。

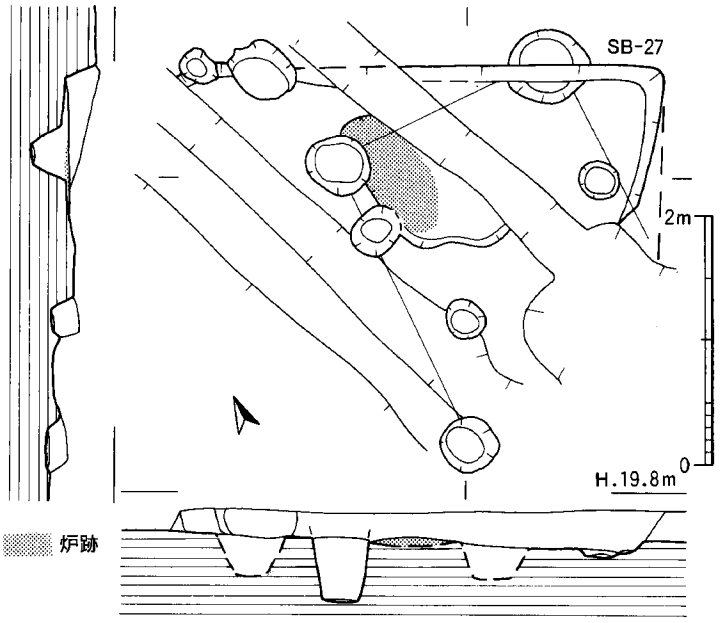


Fig. 19　17号住居跡実測図（1／60）

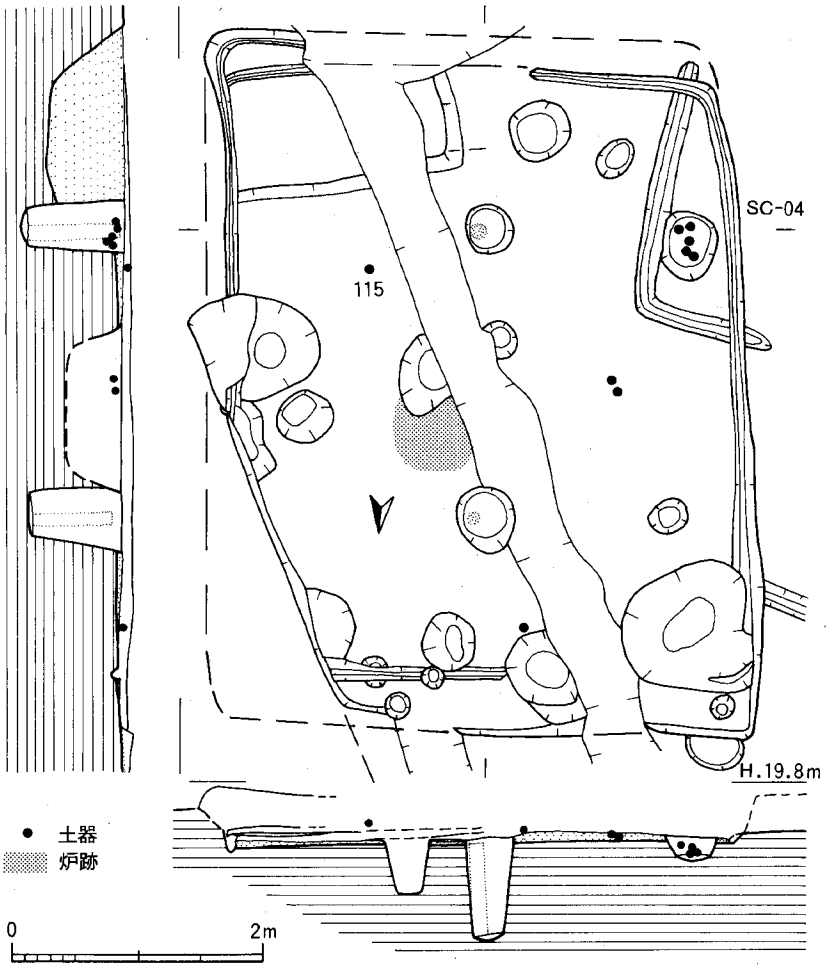


Fig. 20　32号住居跡実測図（1／60）

出土遺物（Fig. 21　Tab. 4
巻頭図版2　PL. 23）

114は口径10.2㎝、器高8.8㎝の丸底壺。口縁部は短く外反し、体部は半球形をなす。底部は厚く1.5㎝を測る。口縁部はヨコナデ、体部外面はナデ、内面は押圧後にヘラナデ。胎土は良質で、微細砂を僅かに含み、橙色。115は口径が18㎝の高坏。体部は内湾気味に立ち上がり、底部との境には小さな稜を作り出す。内外面ともにナデ調整。胎土は砂粒を含み、焼成は良好。色調は明茶褐色。

116・117は砥石である。116は小口面を両側面から鋭角的に研ぎ出している。

118～136は、カリガラスの小玉で最大径2.55～5.5㎜、重さは0.014～0.139ｇ。色調は淡青色～青紺色。

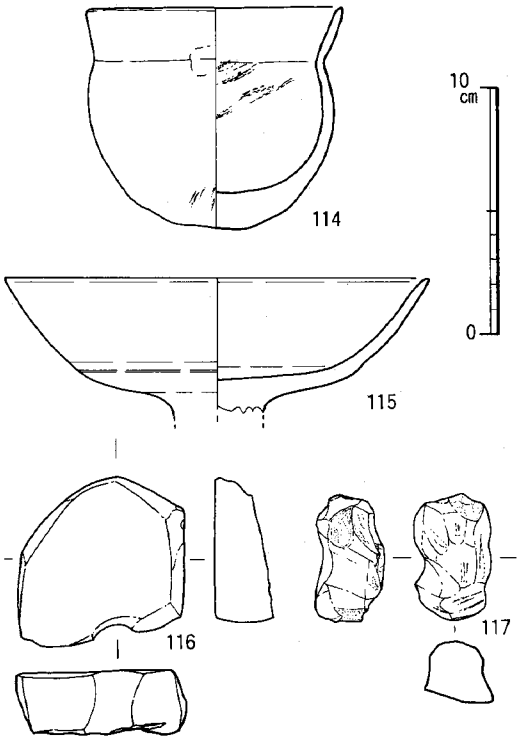


Fig. 21　32号住居跡出土遺物実測図（1／3）

2）掘立柱建物跡（SB）

掘立柱建物跡は、すべてで12棟を検出した。分布的には、丘陵の尾根線を中心に拡がって立地しているが、幾棟かは南側の緩斜面上にも占地している。景観的には、竪穴住居跡群と重複しているために一体として集落域を構成している印象があるが、いずれの建物跡も住居跡に切られており、建物跡群は、住居跡群に先立って単一で集落域を形成していたものと考えられる。規模的には二三のものを除いて1間×2間のものを基本プランとしているが、大きさに多少の差違が認められる。この建物規模の差違に比例するように、柱穴の大きさや平面プランも違いが認められる。大型の建物跡の柱穴は、大きめの方形プランをなしている。これに対して、小型の建物跡は、小さな円形のプランを呈している。

7号建物跡　SB－07（Fig. 22　PL. 10）

7号建物跡は、調査区中央に立地する東西棟の1間×2間の建物跡である。北東隅柱は1号住居跡と、西梁側は8号建物跡と重複する。梁行長3.2ｍ、桁行長5.2ｍで、柱間は2.6ｍ。柱穴は60～75㎝の方形で、深さ45～85㎝。径15㎝の柱痕跡がある。

No.	出土遺構	資料名	色調	最大径㎜	最大長㎜	孔径㎜	重量ｇ	比　重	区　　分	観　察　所　見
118	SC-32	小玉	淡青	4.90	4.75	1.30	0.139	2.28	カリガラス	気泡が多く、列・筋有り。
119	SC-32	小玉	淡青	5.50	3.40	1.50	0.111	2.41	カリガラス	引き伸ばされた気泡有り。
120	SC-32	小玉	淡青	4.20	3.90	測定不能	0.062	2.38	カリガラス	孔内に気泡による突起有り。
121	SC-32	小玉	淡青	3.55	2.30	1.00	0.033	2.54	カリガラス	引き伸ばされた気泡有り。
122	SC-32	小玉	淡青	3.25	2.45	測定不能	0.027	2.45	カリガラス	外形筒型。
123	SC-32	小玉	淡青	4.20	4.05	測定不能	0.092	2.42	カリガラス	外形筒型。
124	SC-32	小玉	淡青	2.95	2.05	1.05	0.018	3.00	カリガラス	気泡は少ないが、筋有り。
125	SC-32	小玉	淡青	3.05	1.70	0.90	0.018	2.57	カリガラス	気泡多い。引き伸ばされた小気泡有り。
126	SC-32	小玉	青紺	3.55	2.75	0.95	0.024	3.00	カリガラス	気泡少ない。
127	SC-32	小玉	淡青	3.85	2.50	1.25	0.040	2.22	カリガラス	
128	SC-32	小玉	淡青	3.40	2.95	測定不能	0.036	2.57	カリガラス	側面に平坦面有り。外形歪み有り。
129	SC-32	小玉	淡青	2.55	1.95	測定不能	0.014	測定不能	カリガラス	白色混入物。
130	SC-32	小玉	淡青	3.45	2.00	1.15	0.022	2.44	カリガラス	歪んだ外形。切断面傾斜。
131	SC-32	小玉	青紺	3.65	2.90	1.15	0.045	2.37	カリガラス	
132	SC-32	小玉	淡青	3.30	2.00	0.75	0.023	2.56	カリガラス	孔の位置、気泡偏在。(加熱の方向を示す？)
133	SC-32	小玉	淡青	3.10	2.20	測定不能	0.026	2.60	カリガラス	筋、引き伸ばされた気泡有り。
134	SC-32	小玉	淡青	3.90	3.05	1.00	0.056	2.55	カリガラス	気泡列、引き伸ばされた気泡有り。
135	SC-32	小玉	淡青	3.40	2.40	0.85	0.096	2.25	カリガラス	
136	SC-32	小玉	淡青	測定不能	測定不能	測定不能	測定不能	測定不能	カリガラス	

Tab. 5　　32号住居跡出土ガラス玉計測表

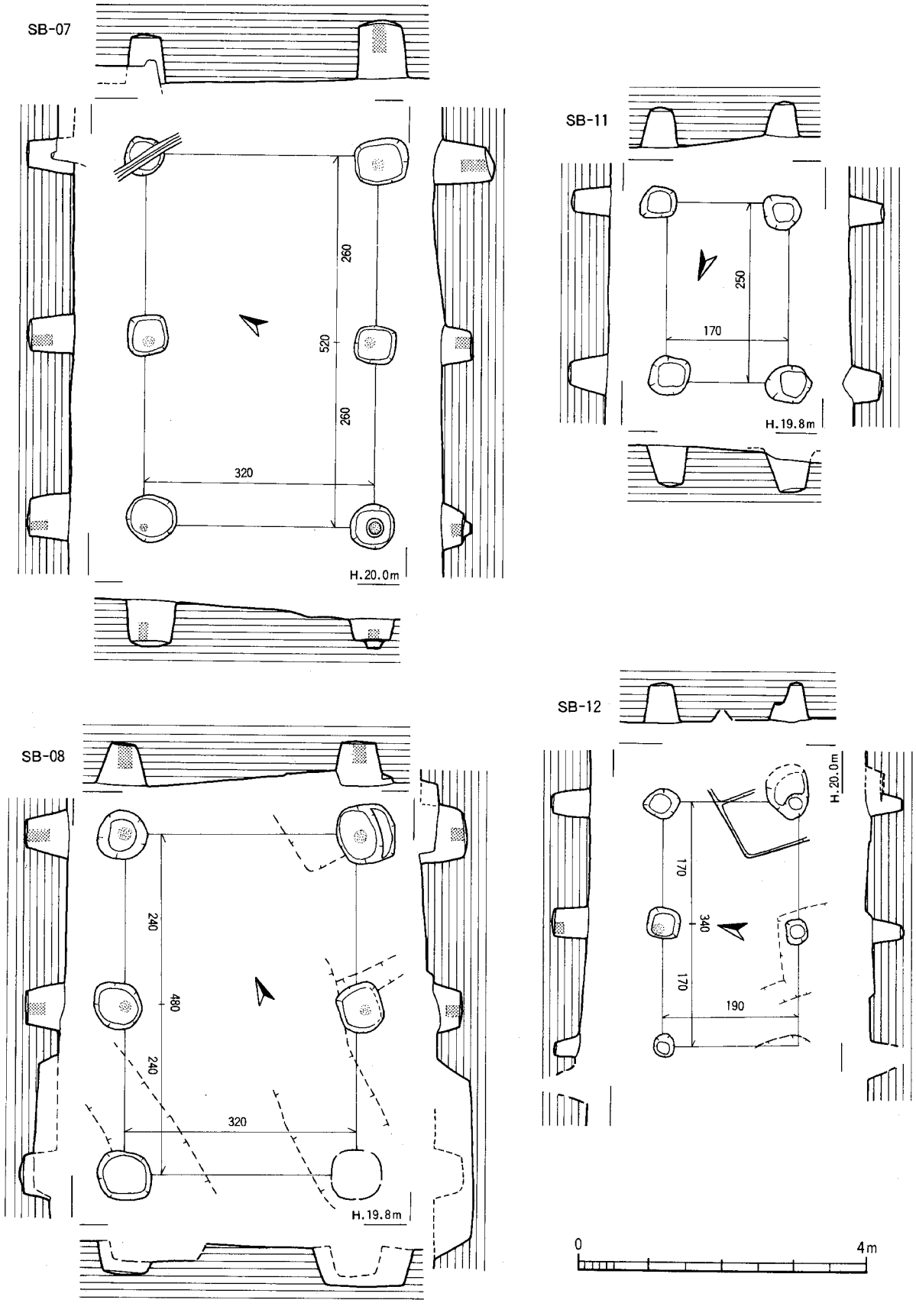


Fig. 22　7・8・11・12号掘立柱建物跡実測図（1／80）

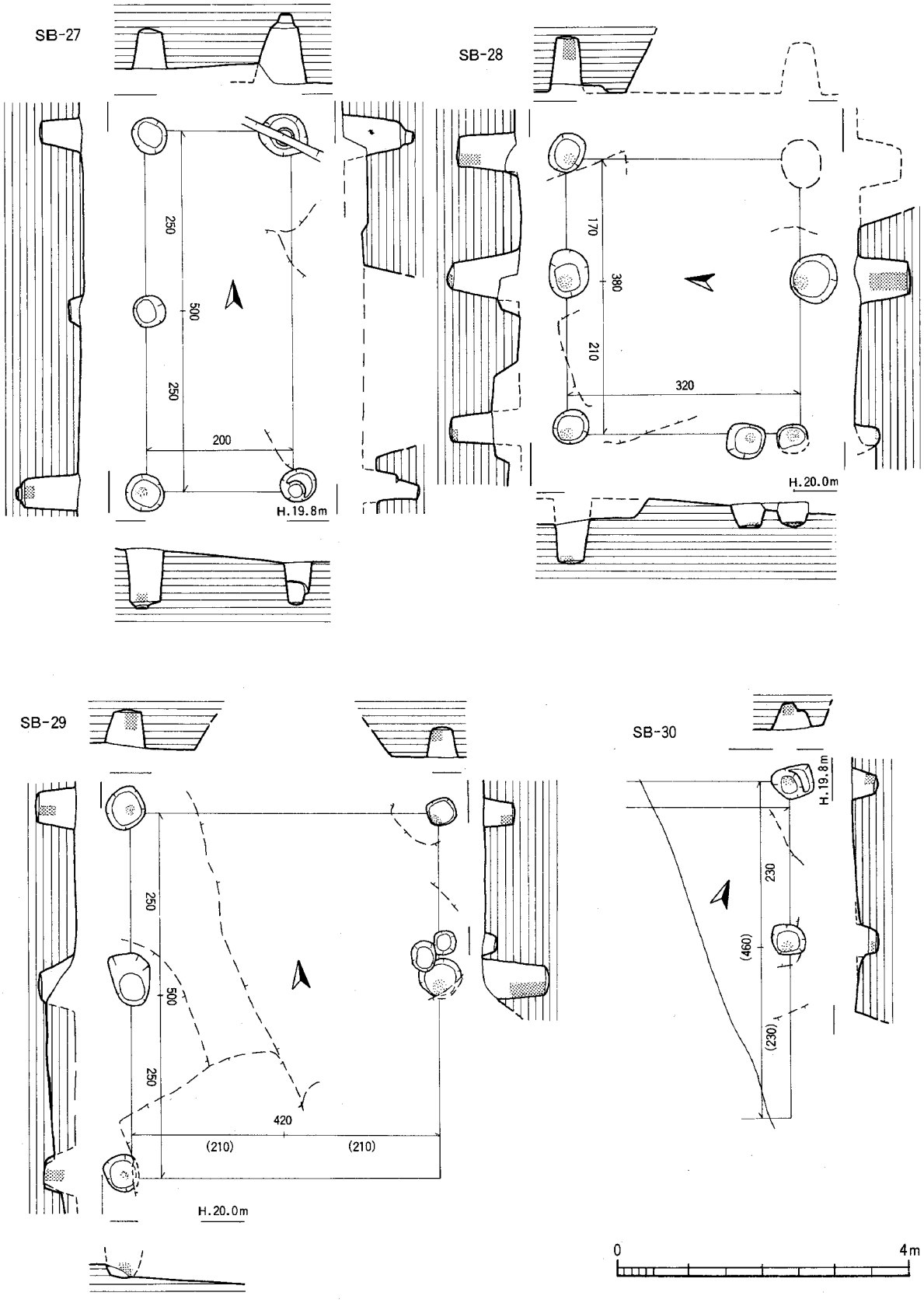


Fig. 23　27～30号掘立柱建物跡実測図（1／80）

8号建物跡　SB－08（Fig. 22　PL. 10）

8号建物跡は、調査区の中央部に位置する1間×2間の南北棟の建物跡である。4m北には3号住居跡が位置し、北東の隅柱は7号建物跡と重複している。梁行長は3.2m、桁行長は4.8mで、柱間は2.4mである。柱穴は60～80cmの方形プランをなし、壙央には径が15cmほどの柱痕跡が残っている。

11号建物跡　SB－11（Fig. 22　PL. 11）

11号建物跡は、調査区中央部の西端に位置するやや小型の建物跡で、6号住居跡よりも古い。現況では梁行長が1.7m、桁行長が2.5mを測る1間×1間の南北棟であるが、西側に拡がる可能性も考えられる。この場合は梁行長が2.5m、桁行長が3.4mの1間×2間の建物跡になろうか。柱穴は45～65cmのやや小さめの方形プランを呈し、深さは50～65cmを測る。

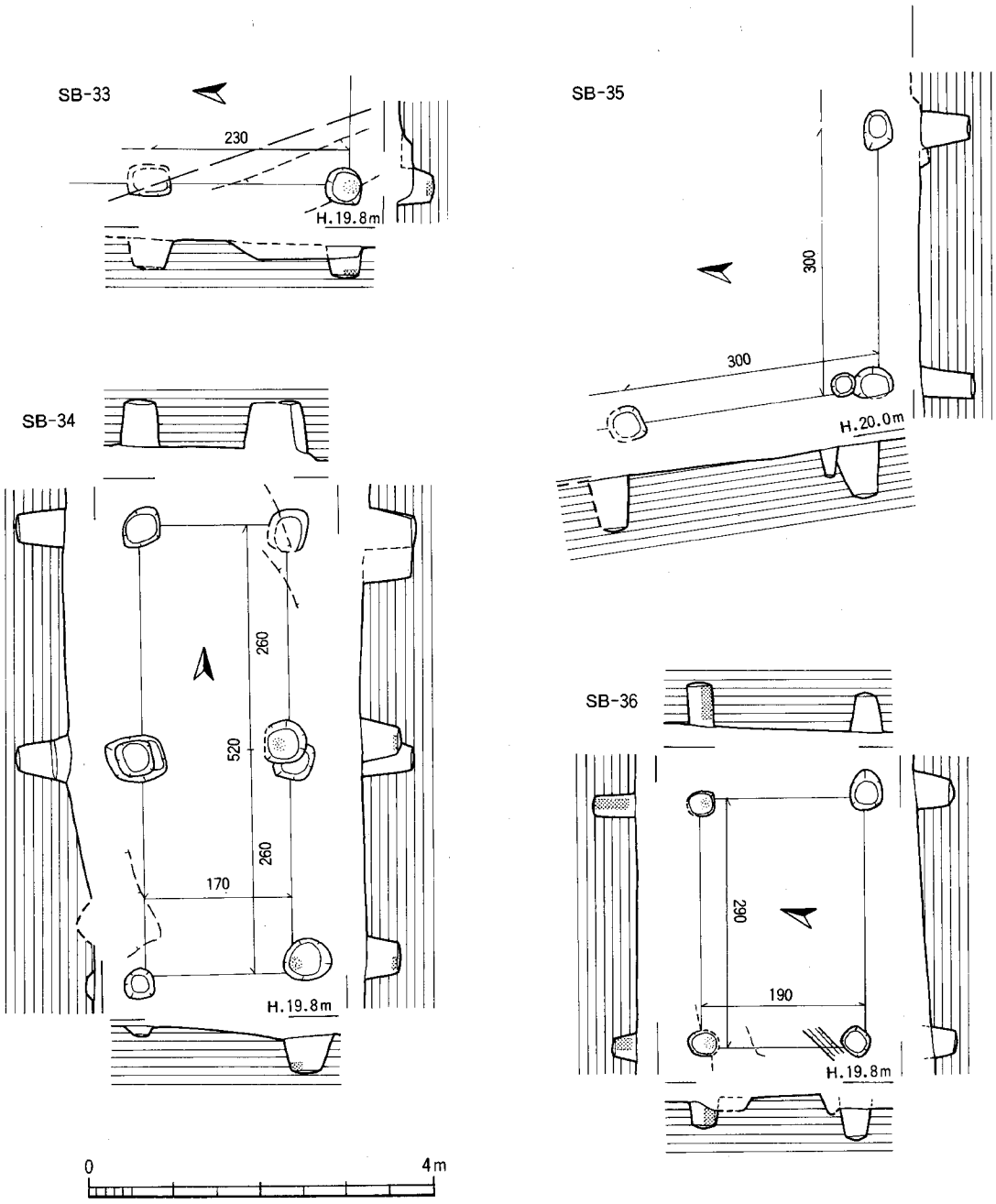


Fig. 24　33～36号掘立柱建物跡実測図（1／80）

12号建物跡　SB－12

(Fig. 22　PL. 11)

12号建物跡は、11号建物跡のすぐ南に位置する1間×2間のやや小型の建物跡。南東隅柱は、3号住居跡のベッド状遺構の貼床で埋められている。梁行長は1.9m、桁行長3.4mで、柱間は1.7m。柱穴は30～45cmの小さめの方形で、深さは50～55cm。直径が約15cmの柱痕跡が残っていた。

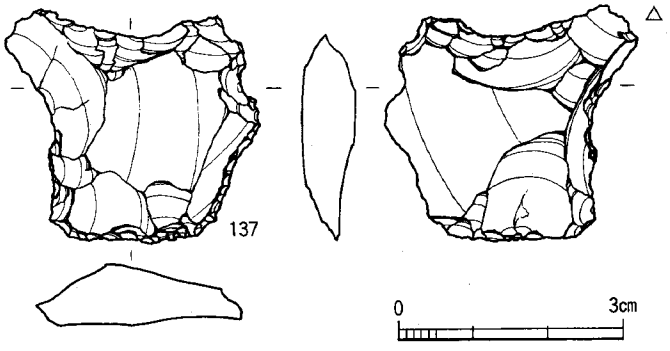


Fig. 25　30号掘立柱建物跡出土遺物実測図（1／1）

27号建物跡　SB－27

(Fig. 23　PL. 12)

27号建物跡は、調査区南側の緩斜面上に立地する1間×2間の南北に長い建物跡である。他の建物跡群からは隔絶した景観を示し、北東隅柱は17号住居跡の壁面に切られている。梁行長は2m、桁行長は5mで、柱間は2.5mである。柱穴は45～60cmの円形プランを呈し、ピット内には直径が15cmほどの柱痕跡が観られた。深さは55～95cmあるが、側柱は25cmと浅い。

28号建物跡　SB－28（Fig. 23　PL. 12）

28号建物跡は、調査区中央の丘陵上に立地する1間×2間の東西棟の建物跡である。西へ3mの距離には13号土壙があり、すぐ南には29号建物跡が直交するように隣接している。梁行長は3.2m、桁行長は3.8mで、柱間は2.1mと1.7mを測り、平面的には方形をなしている。柱穴は40～70cmの方形プランを呈し、壙央には直径が15～20cmの柱痕跡が残っていた。深さは40～75cm。

29号建物跡　SB－29（Fig. 23　PL. 12）

29号建物跡は、丘陵上に立地する1間×2間の南北棟の建物跡で、やや方形状の平面形をなしている。すぐ北には28号建物跡があり、曲屋状に直交している。桁行長は5mで、柱間は2.5m。梁行長は4.2mであるが、柱間が2.1mの2間になる可能性がある。柱穴は50～70cmの方形プランを呈し、深さは45～90cmである。ピット内には径12～15cmのやや細めの柱痕跡が遺存していた。

30号建物跡　SB－30（Fig. 23）

30号建物跡は、調査区の西端に位置する建物跡で、北へ6mの距離には14号土壙がある。西半部が調査区外にあるために規模的には明らかでないが、1間×2間の建物跡になろうか。柱穴は40～55cmの方形で、径15cmの柱痕跡が残っていた。

遺構No.	規　　模	桁行全長	桁行柱間	梁行全長	梁行柱間	主軸方位	棟　筋
SB-07	2間×1間	520	260　260	320	320	N-64°-E	東　西
SB-08	2間×1間	480	240　240	320	320	N-8°-E	南　北
SB-11	1間×1間	250	250	170	170	N-19°-W	南　北
SB-12	2間×1間	340	170　170	190	190	N-77°-E	東　西
SB-27	2間×1間	500	250　250	200	200	N-2°-E	南　北
SB-28	2間×1間	380	210　170	320	320	N-85°-E	東　西
SB-29	2間×2間？	500	250　250	420	(210　210)	N-4°-E	南　北
SB-30	2間？×1間？	460？	230　(230)			N-22°-W	南　北
SB-33	2間？×1間？	(460)	230　(230)			N-6°-W	南　北
SB-34	2間×1間	520	260　260	170	170	N-2°-E	南　北
SB-35	2間？×1間？	(300)	300	(300)	300		
SB-36	1間×1間	290	290	190	190	N-75°-E	東　西

Tab. 6　　掘立柱建物跡一覧表

出土遺物（Fig. 25）

137は、剥片を素材とする石器である。図示する左図に石器表面を示し、これを基準とすると、石器裏面に素材主剥離面を残し、石器左上方に素材打面をもつ。素材に加えられた剥離痕は、石器の上辺、下辺、左辺及び右辺を構成するものと見て取れる。いずれにおいても剥片痕は、表裏両面に残されているが、上・下辺部についてみると、上辺の剥離痕は、素材縁辺から深く切り込み、その縁辺は打潰状を呈している。一方、下辺は直線状で、その縁辺部では小剥離痕が重合した状態を示す。また、この部位は裏面にごく浅い角度で、深く広がる剥離面が組み合わさっている。さらに、石器左辺が深く湾入し、その上下位置で面を違えるものの、縁辺が打潰状を呈する剥離年があること、右辺の一部ではあるが、これと向き合った関係で極深く湾入する剥離面が残されていることを同様に考えて、ここの石器について、石器上の上下方向並びに、左右方向からの対向する衝撃の結果形成されたものと観察される。このような形状をとる石器としては、い

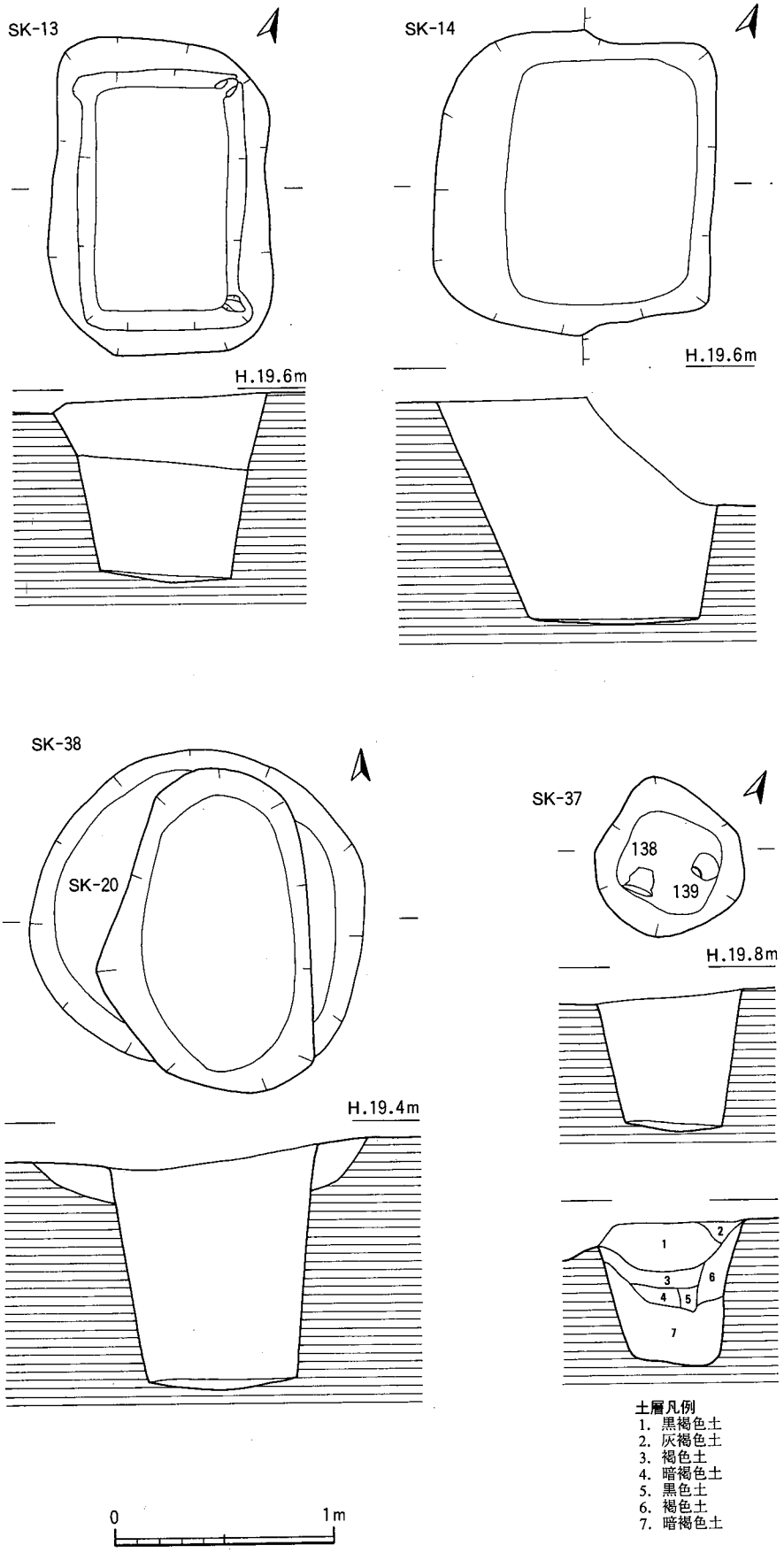


Fig. 26　13・14・37・38号土壙実測図（1／30）

わゆる楔形石器があげられる。石器の素材は漆黒の黒曜石であり、器表はやや磨硝子状に、風化かと思われる変化を示している。上下3.1cm、左右3.4cm、厚さ0.8cmを測る。

33号建物跡　SB－33（Fig. 24　PL. 13）

33号建物跡は、調査区中央の東端に立地する建物跡で、3m西には34号建物跡が並置している。建物規模は明らかでないが、並置する34号建物跡から1間×2間のものと類推される。

34号建物跡　SB－34（Fig. 24　PL. 13）

34号建物跡は、丘陵の尾根上に立地する1間×2間の南北に長い建物跡で、2号住居跡のすぐ東に位置する。梁行長は1.7m。桁行長は5.2mで、柱間は2.6mを測る。柱穴は45～65cmの方形プランを呈し、柱穴の中には直径が約15cmの柱痕跡が遺存していた。深さは45～75cmを測るが、南西の隅柱は非常に浅い。

35号建物跡　SB－35（Fig. 24　PL. 13）

35号建物跡は、丘陵尾根の東端に立地する建物跡である。南へ5mの距離には28号建物跡が、西へ6mの距離には7号建物跡が位置している。規模的には明らかでないが、柱間は各3mでやや鈍角的に開く1間×2間の建物跡になろうか。

36号建物跡　SB－36（Fig. 24　PL. 13）

36号建物跡は、丘陵の中央部に立地する1間×1間の東西棟の建物跡である。33・34号建物跡のすぐ南に位置し、南西の隅柱は1号住居跡のベッド状遺構の貼床下にある。梁行長は1.9m、桁行長は2.9mである。柱穴は30～45cmとやや小さめの方形プランをなし、深さは40～55cmを測る。柱痕跡も径10cmとやや細い。

3）土　壙（SK）

土壙は、すべてで4基を検出した。分布的には、3号住居跡と重複する1基（SK－37）を除いて住居跡からやや離れた緩斜面上に散逸的に分布しており、集落域の中で住居跡や建物跡と何らかの繋がりをもって拡がっていたものと推考される。平面形は、方形～長方形のプランを呈し、主軸方位を南北方向にとっている。機能的には、廃棄壙としての用途が考えられるが、小口壁に板状圧痕の抉入溝が残った木棺墓の可能性を示唆するものもある。

13号土壙　SK－13（Fig. 26　PL. 14）

13号土壙は、調査区中央部の丘陵尾根上に立地し、28号建物跡のすぐ西に位置している。平面形は、長さ140cm、幅が100cmの隅丸長方形プランを呈し、主軸方位をN—22°—Wにとる。深さ85cmの壁面は直口し、壙底より55cmのところで小さく屈曲して緩やかに立ち上がる。東側壁と南北の小口壁との隅角には小口壁側から挿入されたと思われる幅3～5cmの抉入痕があり、組合せ式木棺墓の可能性も否定できない。断面形は箱形で、壙底は浅い舟底状をなしている。遺物は出土していないが、覆土は建物跡と同系の黒褐色土である。

14号土壙　SK－14（Fig. 26　PL. 2）

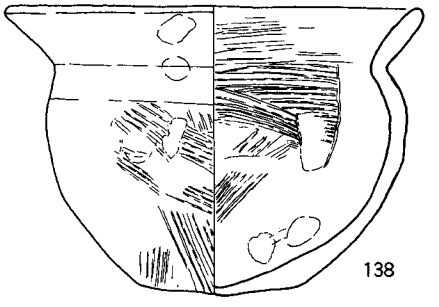
14号土壙は、調査区中央部の西寄りにあり、8号建物跡の南2m、13号土壙の西8mの距離に位置している。西側壁は撹乱壙で大きく削平されているが、平面形は長さが145cm、幅が135cmの隅丸方形プランになろう。壁面の深さは100cmを測り、側壁は緩やかに、小口壁はやや急峻に立ち上がる。底面は平坦で、逆台形の断面形をなしている。出土遺物はないが、覆土は13号土壙と同じ黒褐色土系の粘性である。

37号土壙　SK－37（Fig. 26　PL. 14）

37号土壙は、調査区中央部の丘陵尾根上にあり、3号住居跡の西側ベッド状遺構の中央に重複して位置している。平面形は、一辺が約65cmの隅丸方形プランをなし、深さは63cmを測る。断面形は箱形で、底面は浅い舟底状をなしている。壙底からは、2個体の鉢のほかに丸底壺や甕、高坏片が出土している。

出土遺物（Fig. 27　PL. 26）

138は、口径16.5cm、底径6.5cm、器高11.5cmの鉢である。肉厚の口縁部は「く」字状に外反し、体部はやや扁球形状になる。底部は厚手で、内央部が指頭押圧で浅く窪んでいる。調整は、口頸部外面がヨコナデのほかは押圧後に粗いハケ目。胎土には石英粒や長石粒を多く含み、焼成は良好。色調は外面が淡黄橙色、内面は灰白色。139は、口径15.5cm、器高12.1cmの鉢である。口縁部は、半球形の体部から直口して立ち上がり、端部を丸くおさめている。底径6.3cmの底部は肉厚で、厚さは1.4cmを測る。胎土には石英砂を多く含み、焼成は良好。色調は淡赤橙色～にぶい橙色。



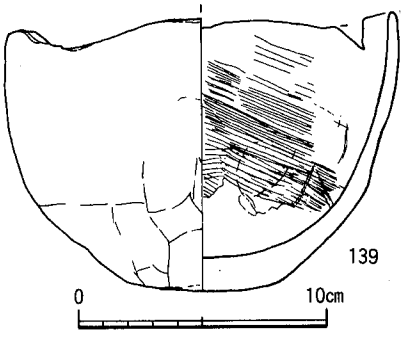


Fig. 27　37号土壙出土遺物実測図(1／3)

38号土壙　SK－38（Fig. 26　PL. 14）

38号土壙は、調査区南西隅の緩斜面上に立地し、該期の遺構群とはやや隔絶して占地している。土壙の上縁は20号土壙に切られており、すぐ北には16号住居跡が位置している。平面プランは、長さが145cm、幅が65～95cmの隅丸長方形をなし、主軸方位をほぼ南北位にとる。壁面は急峻に立ち上がり、深さは110cmを測る。底面は浅い凹レンズ状で、断面形は箱形をなしている。出土遺物は少ない。覆土は、やや粘質の黒褐色土である。

4)　溝遺構（SD）

溝状遺構としては、3条を検出した。このうち2条は、該期の住居跡群と重複するようにして集落域の中にあり、10号溝（SD－10）を除く2条の溝はいずれも短かくその用途は明らかにしがたい。

9号溝　SD－09（Fig. 5）

9号溝は、丘陵の尾根上にあり、東端は2号住居跡に切られている。幅は45cmで、長さは2.8mを測るが、住居跡に削平されたところを含めてもそう長い溝ではなかったものと推考される。断面形は浅い凹レンズ状をなしている。覆土中からは弥生土器の小片がわずかに出土している。

10号溝　SD－10（Fig. 5）

10号溝は、丘陵の尾根から北側の緩斜面を南西から北東方向へ谷にむかって直線的にのびる溝で、1～4号住居跡群と6号住居跡を区画するようにのびている。溝の中程で5号住居跡と重複しているが、トレンチによる削平で先後関係は明らかではない。溝幅は50～80cm、長さは現況で15mある。深さは5～15cmを測り、断面形は箱形～凹レンズ状をなしている。弥生土器片が少量出土している。

39号溝　SD－39（Fig. 5）

調査区の南西端にある長さ2mの溝で、弥生土器の壷と甕片が出土している。溝幅は30～45cm。

3．奈良時代の調査

奈良時代の遺構としては、竪穴住居跡9棟と土壙3基のほかに溝や柱穴を検出した。これらの遺構は、そのほとんどが南側緩斜面南西隅の500㎡ほどの狭い範囲に密に重複して占地し、調査区中央部の丘陵尾根上には拡がっていない。緩斜面の東側にも住居跡の残壁があり、基本的には緩斜面に沿って集落域が展開していたものと推考される。竪穴住居跡の平面形は方形プランで、一辺の長さは2.5m～4mとやや小型である。このうち4棟の竪穴住居跡（SC－16・19・22・23）には、北向き（SC－19・22）と東向き（SC－16・23）にカマドが付設されている。主柱穴は不明確なものもあるが、基本的には4本柱であったと推察される。

一方、掘立柱建物跡は、撹乱域の広さから建物跡としては1棟も確認できなかった。しかし、柱痕跡を残す該期の柱穴が複数あり、周辺での調査データを勘案すると住居跡群に付帯して展開していた可能性も十分に考えられる。また、土壙は平面形が、円形のものと方形のものとがある。円形プランのもの（SK－20・26）は浅い凹レンズ状の断面形をなしている。これに対して、方形プランのもの（SK－24）は箱形の深いもので、壙内からは土師器の坏や甕と須恵器の坏や坏蓋、壷等が出土している。これらの土壙の機能としては廃棄壙が考えられるが、円形土壙の性格は不確かなところがある。分布的には散逸ながらも住居跡に接して立地しており、住居跡と有機的な繋がりをもって集落域を構成していたものと推考される。溝遺構は、浅く短いものでその機能も判然としない。分布的には散逸的な在り方を示すが、土壙と同様に集落域の一翼を構成していたものと考えられよう。本調査区での該期の集落域は、南側緩斜面の南西隅に限られる。南八幡遺跡群を俯瞰して観ると、竪穴住居跡と掘立柱建物跡が一体となって集落を形成して南八幡丘陵の南側全域に展開しており、雑餉隈遺跡群や麦野C遺跡群の集落に比肩する集落域が拡がっていたものと推考される。

1）竪穴住居跡（SC）

奈良時代の竪穴住居跡は、調査区の南側に拡がる緩やかな斜面上の9棟を検出した。住居跡群は、東西20m、南北25mの500㎡ほどの狭い範囲に重複して分布している。調査区東側の緩斜面上は撹乱壙による消失が甚だしいが、本来はさらに幾棟かの住居跡があった可能性も十分に考えられ、竪穴住居跡群は緩斜面に沿って調査区の東西に拡がっていたものと推考される。住居跡のうち全容の明らかなものは3棟（SC－16・19・23）で、平面プランは一辺が2.5m～3.5mのやや小型の方形をなす。また、4棟の住居跡（SC－16・19・22・23）には、北壁（SC－19・22）と東壁（SC－16・23）に青灰色粘砂土で固めたカマドが付設されており、基本的には何れかの壁面の中央に付設されていたものと考えられる。床面は、鳥栖ローム層を数cmの厚さに敷き固めているが、壁際はやや軟弱である。主柱穴は不明確なものもあるが、基本的には4本柱であったと推察される。

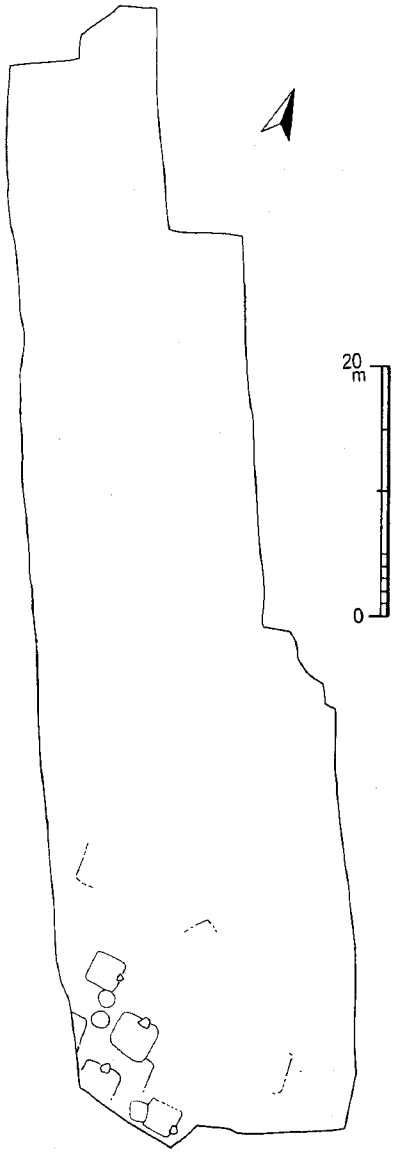


Fig.28　奈良時代の遺構配置図（1／600）

15号住居跡　SC－15（Fig. 29　PL. 17）

15号住居跡は、調査区南西部の南側緩斜面上に立地し、該期の住居跡群中で最も北寄りに占地している。5m北西には30号建物跡が、5m南には16号住居跡が位置している。住居跡は、西壁の一部が遺存するのみで全容は明らかではないが、2.5～3.5mの方形プランをなそうか。床面は貼床で、鳥栖ローム土を3～5cmの厚さに薄く突き固めている。壁高は10～15cmで、壁際から土師器甕が出土している。

出土遺物（Fig. 30　PL. 24）

140は、土師器甕の丸底の底部である。調整は外面が粗いハケ目、内面は押圧ナデ後にヘラケズリ。胎土は粗く、石英や長石粒を含み、焼成は良好。色調は内面が赤灰色、内面はにぶい橙色。141は、口径が29.6cmの土師器甕である。口縁部は「く」字状に外反し、胴部は短い卵形になろう。外面は粗いハケ目調整、内面は押圧後にヘラケズリ。胎土には粗く石英砂、長石粒を含み、焼成は良好。色調は外面が褐灰色、内面は灰褐色。142は、扁平な須恵器坏で、口径は12.8cm、底径は10cm、器高は2cmを測る。体部は短く立ち上がり、口唇部は小さく摘み出す。胎土は精良で、焼成は堅緻。色調は灰青色を呈する。

16号住居跡　SC－16

（Fig. 31・32　PL. 15・16）

16号住居跡は、調査区南西部の緩斜面上にあり、南東隅壁は20号土壙に切られている。5m北には15号住居跡があり、南へ2～3mの距離には19・25号住居跡が位置している。平面形は、一辺が2.6～2.7mの正方形プランを呈し、北壁の中央部にはカマドを付設している。カマドは火床が壁面に接し、煙道は35cmほどが壁外に突き出ている。焚き口は火床の前面を浅く円形に掘り込み、底面には灰層が堆積していた。火床は良く焼けて真っ赤に赤変していた。床面は鳥栖ローム土を薄く敷き固めた貼床としており、主柱穴は判然としない。遺物は少ないが、カマド内からは土師器甕と須恵器の坏、坏蓋が、またカマド袖の前面からは移動式カマド片が出土している。

出土遺物（Fig. 33　PL. 24）

145・146土師器の甕である。145は口径が27.6cmを測る。頸部は緩やかに屈曲し、口縁部は「く」字状に外反する。器壁は口縁部が薄く、胴部は肉厚である。調整は外面が粗い縦ハケ目、

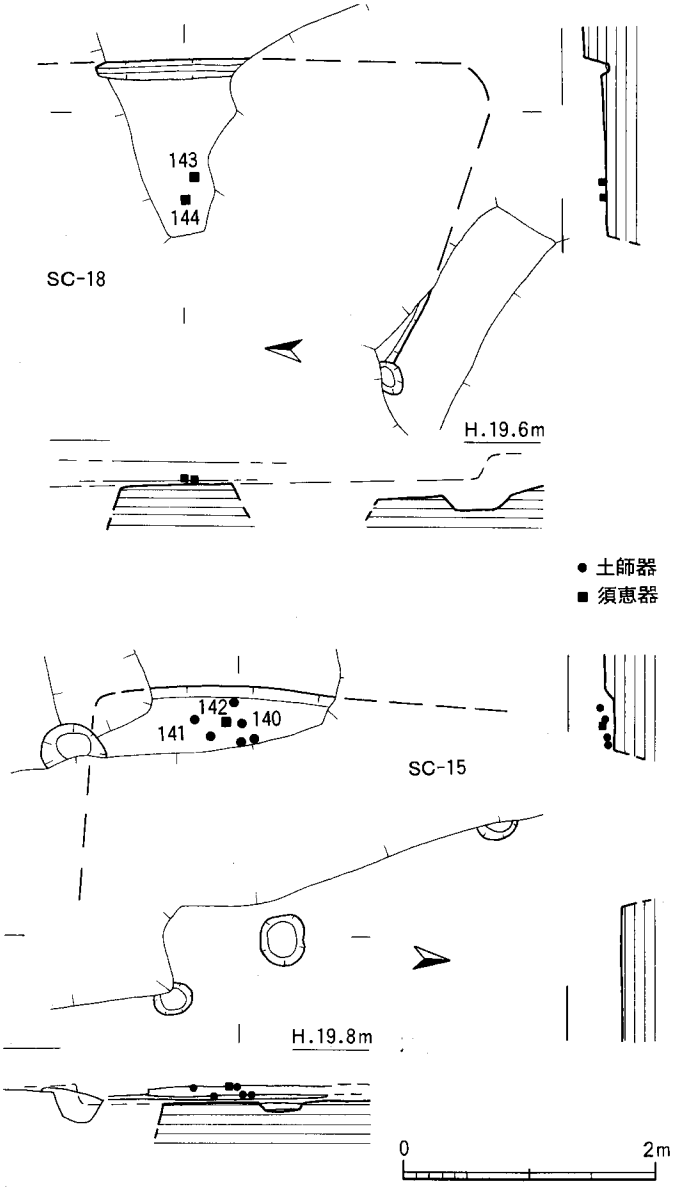


Fig. 29　15・18号住居跡実測図（1／60）

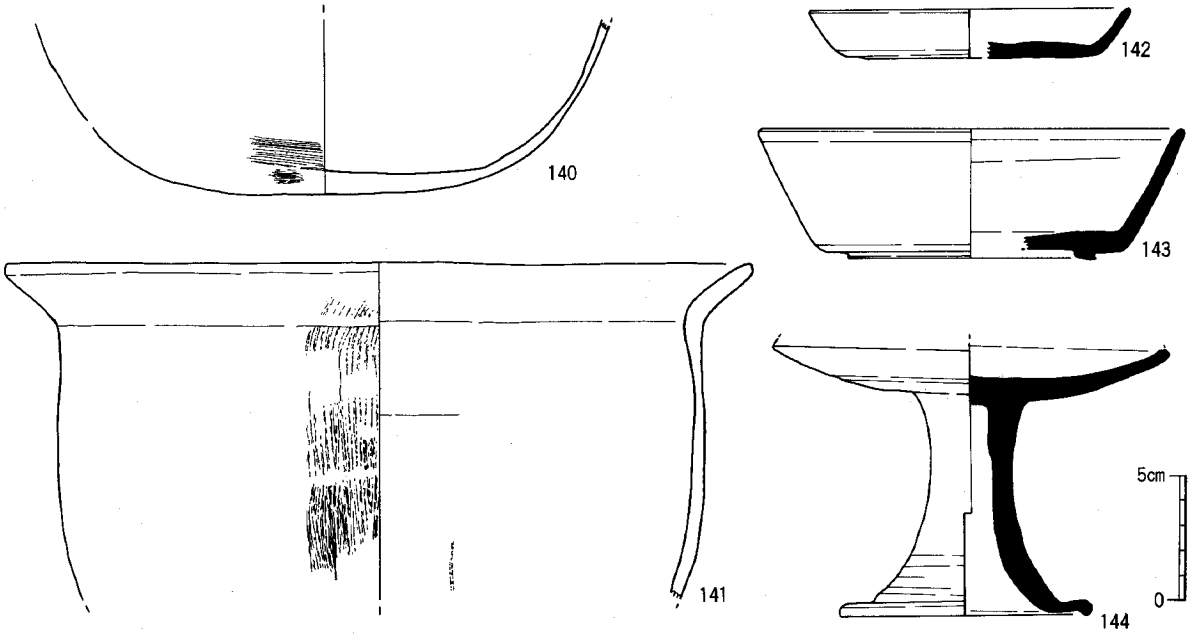


Fig. 30　15・18号住居跡出土遺物実測図（1／3）

内面は下から上へのヘラケズリで、口縁部内面には細かい横ハケ目。胎土はやや粗く、石英や長石粒と雲母微細を多く含み、焼成は良好。外面はにぶい赤褐色、内面は灰褐色。146は口径が28.4cmを測る。口縁部は緩やかに屈曲して外反する。調整は口縁部外面がヨコナデ、内面は細かい横ハケ目。胴部は外面が粗い縦ハケ目、内面はヘラケズリである。胎土は石英・長石粒と雲母微細をわずかに含む。色調は外面が明赤褐色、内面は橙～灰赤色。147は生焼けの須恵器坏蓋で、口径は16.2cm、器高は2.6cmである。平坦な天井部から体部は短く内湾し、口縁部は小さく垂直に摘み出している。天井部内面はナデ、外面はヘラケズリで体部はヨコナデ調整。胎土は精良で、若干の微細砂粒と雲母微細を含む。色調は外面がにぶい橙～赤褐色、内面は橙～黒褐色。148は口径13.8cm、底径8.8cm、器高が4cmの須恵器坏である。体部はストレートに立ち上がり、口縁部は端部を小さく摘み出している。体部はヨコナデ、内底面押圧ナデ調整。胎土は精良で、焼成は良好。外面は黒褐色～灰白色、内面は灰黄褐色。149～151は移動式のカマドで、同一個体であろう。口径は27cmを測り、焚き口前面には真庇状の鍔が巡り、口縁部下15cmには角状の短い把手が付けられている。円筒状の胴部は把手を境として上半部が内傾し、直口気味に立ち上がる口縁部は端部を水平に整えている。底部は厚く逆「L」字状を呈する。調整は内面がヘラケズリ、外面はナデ後にハケ目か。胎土は粗く、多くの石英砂や長石粒を含む。外面はにぶい橙色、内面は橙～暗赤灰色である。

18号住居跡　SC－18（Fig. 29　PL. 17）

18号住居跡は、調査区南東端の丘陵裾に立地しており、19号住居跡の東8mの距離に位置している。東壁の一部を残すのみで全容は明らかでないが、一辺が3mほどの方形プランになろうか。壁下には幅8～10cm、深さ5cmの周溝が掘り込まれている。床面は薄い貼床で、直上からは須恵器の坏や高坏が出土している。なお、南側には壁面と推考される浅い遺構が検出されたが、その延長線は東壁とはやや鋭角的になり、同一の遺構かは即断しかねる。

出土遺物（Fig. 30　PL. 24）

143は、口径17cm、器高5cmを測る高台付の須恵器坏である。体部は高くストレートに外反し、底部には径が9.8cmの扁平な高台がやや外傾気味につく。体部はヨコナデ、底部はナデ調整。胎土は精良で、若干量の石英と長石粒を含み、焼成は良好。色調は灰白色。144は、須恵器の高坏で、脚径は

10cm。体部は浅く内湾し、内傾する口縁部が付くものであろう。脚部はラッパ状にのびた後に水平に外反し、端部は垂直に立ち上げている。胎土は精良で、焼成は良好。色調は内面が灰白色、外面が灰色。

19号住居跡　SC－19

(Fig. 34・35　PL. 18・19)

19号住居跡は、調査区西南端の緩斜面上に立地する重複する住居跡群の北端に位置する。21号住居跡よりも新しく、北西へ2mの距離には16号住居跡がある。平面形は東西長が3.4m、南北長が2.8～3.25mで西壁側がやや短い台形状の方形プランを呈し、床面積は9m²ほどの広さになる。北壁のやや東寄りにはカマドが付設されている。カマドは15cmほどが壁外に突き出し、その先端には直径が30cmほどのピット状の煙道が付けられている。袖部はこの煙道を覆うようにして幅20～25cmの青灰色粘砂土を楕円形に巡らしている。この袖部の内芯部には長軸55cm、短軸40cmの空白域があり、甕の受け口としている。また、袖部は上縁がオーバーハングして内側に張り出しているが、焚き口の上は袖厚が薄くなっている。火床は焚き口に面したカマド前面にあり、凹レンズ状に浅く掘り込んでいる。床面は、2～5cmの鳥栖ローム土を薄く敷き固めて貼床としており、中央部が凹レンズ状に浅く窪んでいる。東壁際に径25cm、深さ20cmの柱穴があるが、主柱穴は明らかでない。床面上には土師器や須恵器の甕、高坏、坏、坏蓋等が多量に投棄されていた。

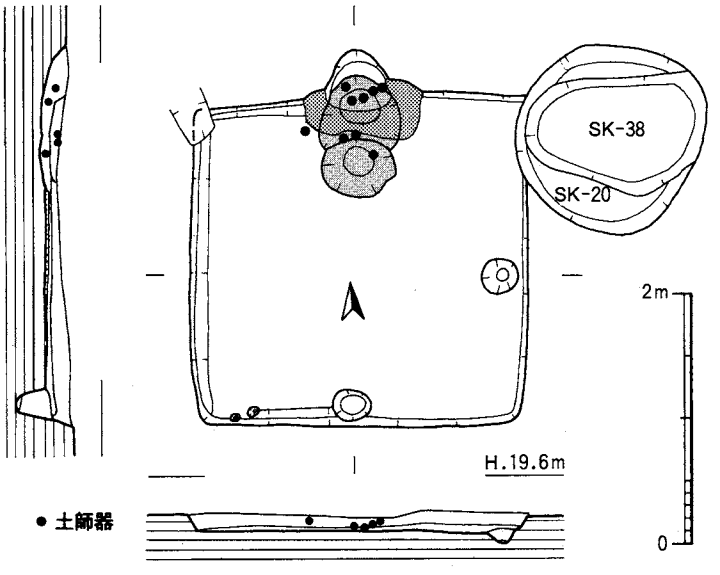


Fig. 31　16号住居跡実測図（1／60）

出土遺物（Fig. 36～38　PL. 24・25）

152・153は扁平な土師器の皿である。体部は短くストレートに立ち上がり、底部は中央部が小さな上げ底状になる。152は口径が18.4cm、底径が15.1cm、器高は1.8cmである。調整は体部がヨコナデ、内定面はナデ、外底面は回転ヘラケズリである。胎土には砂粒や雲母微細のほかにシャモット様の赤褐色粒を含む。色調は外面が橙色、内面は褐灰色。153は口径19.4cm、底径16cm、器高は2.1cmを測る。胎土は精良で、石英や長石粒と雲母微細を含む。色調は淡橙色～橙色。154は盤状の土師器皿で、径22.2cm、高さ5mmの箱形の高台が付く。外底面は回転ヘラケズリ。胎土は良質で、若干の砂粒と雲母微細を含み、焼成は良好。橙～にぶい橙色。155は口径13.7cm、底径10cm、器高が3.4cm土師器坏である。体部はストレートに立ち上がり、口縁部は鋭利に摘み出している。胎土には多くの石英砂や長石粒を含む。色調は橙色、内面はにぶい赤橙～明褐灰色。156は高台付の土師器坏である。口径は10.7cm、器高は6cmで、高台は径10cm、高さは5mmを測る。長い体部はストレートに立ち上がり、口唇部は外方に小さく摘み出している。体部はヨコナデ、底部はナデ調整。胎土は精良で、若干の細砂粒を含む。外面は黄灰色、内面は灰白色。157～161は土師

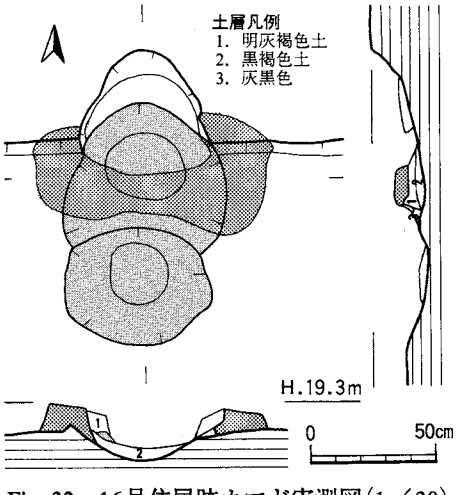


Fig. 32　16号住居跡カマド実測図(1／30)

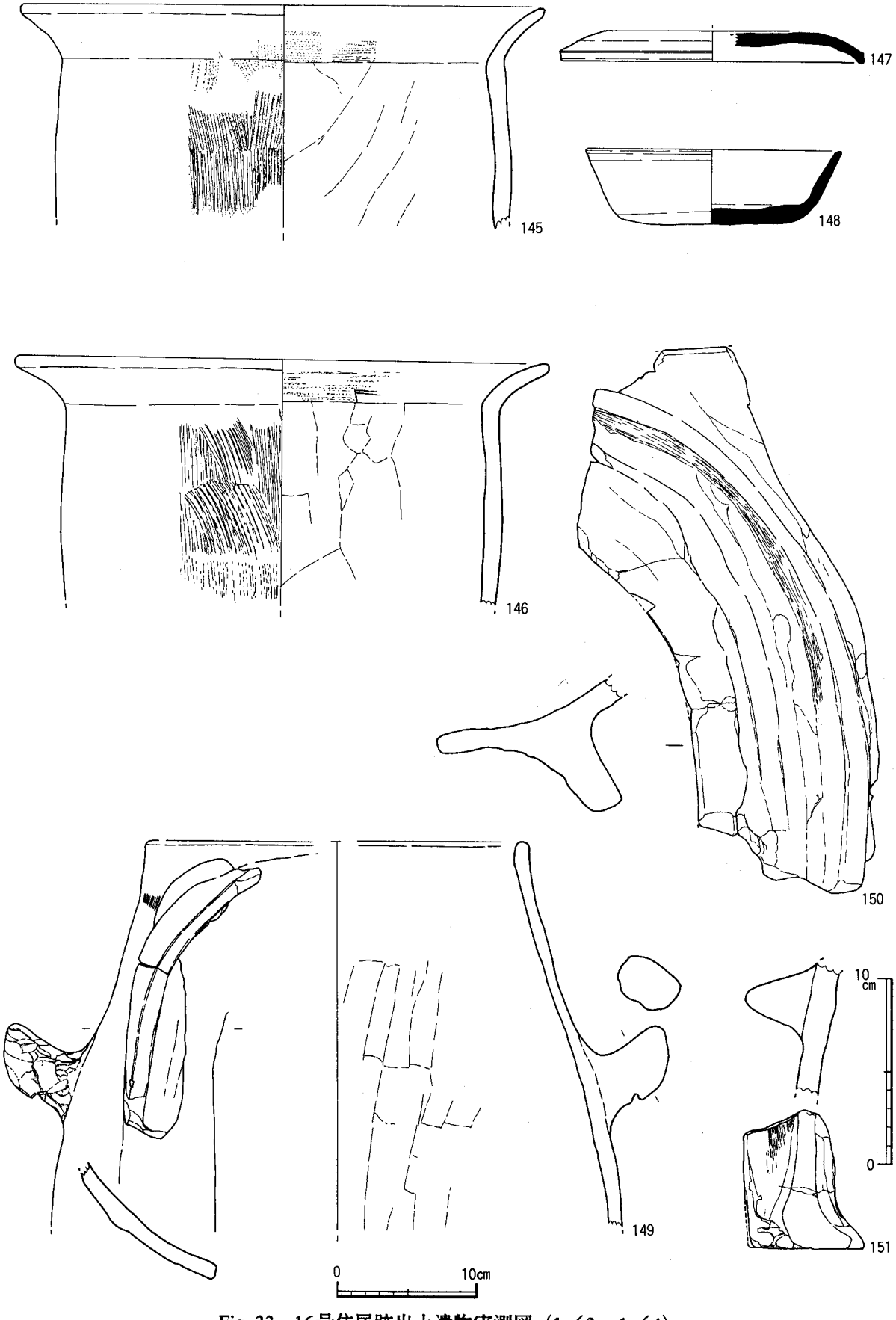


Fig. 33　16号住居跡出土遺物実測図（1／3・1／4）

器の甕で、大型のもの（157～159）と小型のもの（160・161）とがある。大型の甕（157～159）の口径は157が29.2cm、158が28.6cm、159が31.2cmを測る。「く」字状の口縁部は緩やかに外反する。調整は口縁部がヨコナデ、胴部内面はヘラケズリである。159は外面が縦、口縁部内面は横方向に粗いハケ目調整を加えている。胎土はやや粗く、石英砂や長石粒を多く含んでいる。色調は淡黄橙色～灰白色～褐灰色。小型の甕（160・161）の口縁部は、肥厚して短く「く」字状に外反する。調整は口縁部がヨコナデ、胴部内面は斜め～横方向のヘラケズリ。胎土には砂粒や雲母微細を含み、焼成は良好。色調は外面がにぶい赤橙色～暗赤灰色。内面は褐灰色～黄橙色。口径は160が19.4cm、161が16.4cmを測る。

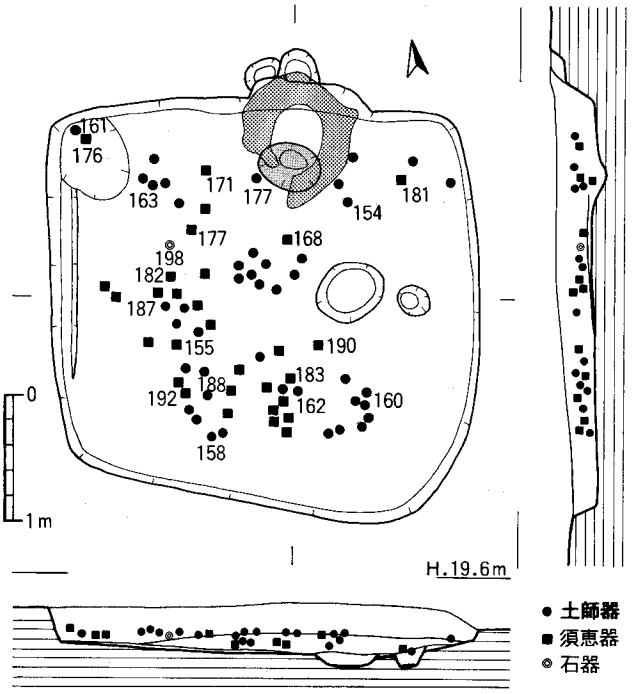


Fig. 34　19号住居跡実測図（1／60）

162は口径14.8cm、底径5.4cm、器高が6.2cmの土師器鉢である。胴部は内湾気味に立ち上がり、端部を丸くおさめた口縁部は短く直口する。調整は内面が押圧ナデ、外面はヘラケズリ。胎土は良質で石英砂や長石粒の微細を含み、焼成は良好。色調は淡橙色。163は土師器の甑で、底径は25cm。胴部は内湾気味に窄まり、底部は最も肥圧して内唇を丸くおさめている。調整はヘラケズリで、外面はナデを加えている。胎土はやや粗く、多くの砂粒とシャモット様の赤褐色粒を含む。

164～169は天井部に扁平な摘みの付く須恵器の坏蓋で、天井部が丸く内湾するもの（164）と低く扁平なもの（165～169）とがある。口縁部は端部を下方に小さく摘み出している。調整は口縁部～体部がヨコナデ、天井部内面はナデ、外面は回転ヘラケズリ～ナデ。胎土は精良で、細砂粒をわずかに含み、焼成は堅緻。色調は灰色～濃灰青色。164は口径が15.2cm。165は口径16.6cm。166は口径が18cm、器高は2.5cmで、直線的に開く天井部には径2cm、高さ9mmの摘みが付く。167は口径が18.6cm。168は口径が19.2cmで、天井部までの高さは2.6cmを測る。口縁部は屈曲して短く直口し、内傾する口唇部は内方に小さく摘み出す。

170～173は須恵器の皿である。体部は短く立ち上がり、口縁端部は丸くおさめる。173の体部は底部から垂直に立ち上がった後に屈曲して短く外反する。調整は体部がヨコナデ、内底面はナデ、外底面はヘラ。胎土は精良で砂粒をわずかに含み、焼成は堅緻。170は口径16.4cm、器高は2.1cm。171は口径が17.4cm、器高は2.8cm。172は口径19.8cm、器高は2.1cm。173は口径が16.8cm、器高は2cmを測る。

174～178は須恵器坏である。体部はストレートに

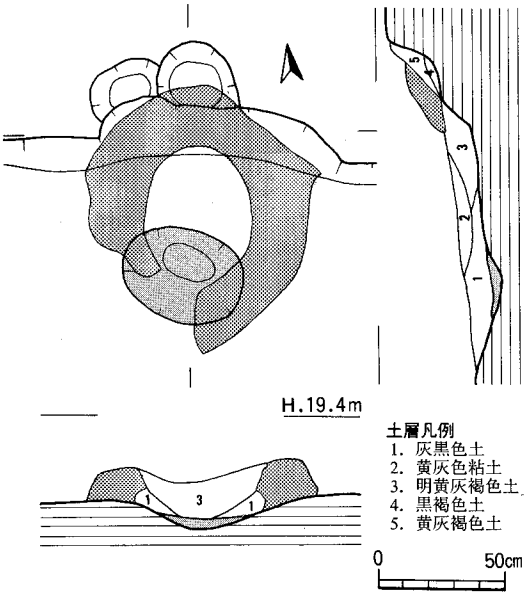


Fig. 35　19号住居跡カマド実測図（1／30）

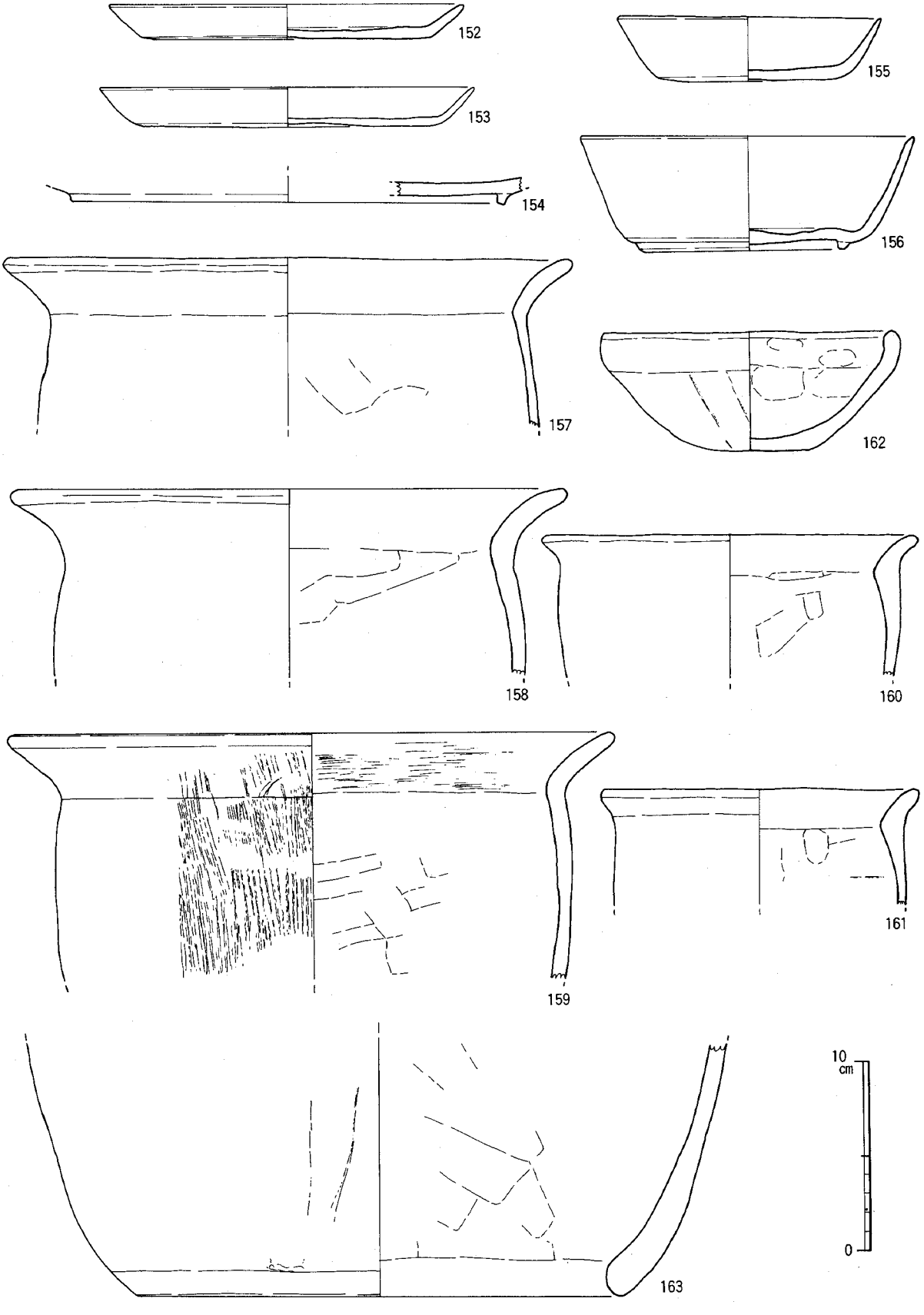


Fig. 36　19号住居跡出土遺物実測図 1 （1／3）

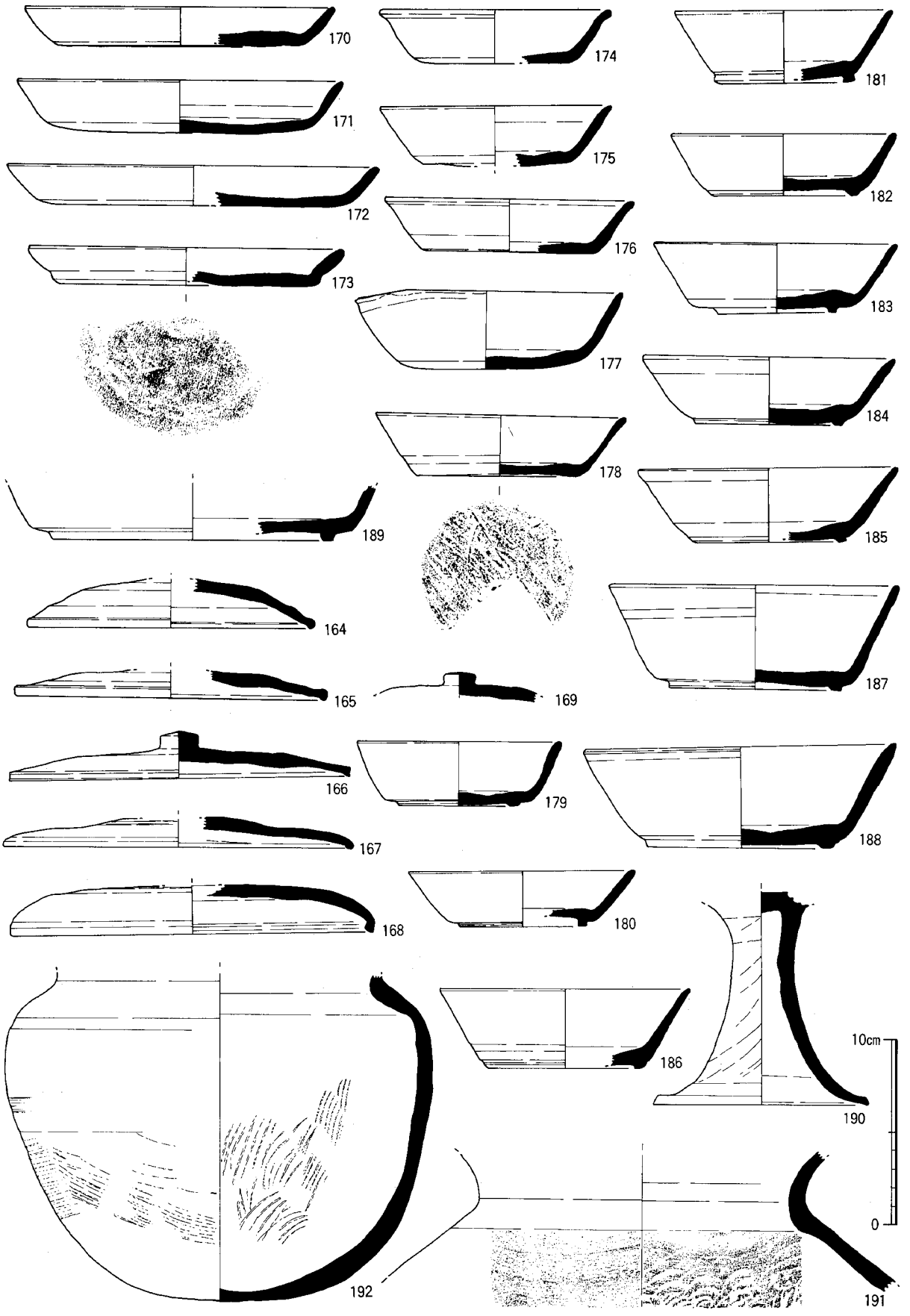


Fig. 37　19号住居跡出土遺物実測図2（1／3）

立ち上がり口縁端部は小さく外方に摘み出している。調整は体部がヨコナデ、内底面がナデ、外底面は回転ヘラケズリである。174は口径が12.2cm、底径は7.4cm、器高は2.9cm。175は口径12.2cm、底径7.6cm、器高は3cmである。176は口径11.2cm、底径9.4cm、器高は2.8cm。177は口径13～14.2cm、器高は4.2cmを測る。178は口径13.2cm、器高は3.2cmで底径8.2cmの底部には板目圧痕がある。179～189は高台の付く須恵器坏である。口径が10.8～12cmの小型のもの（179～182）と13～13.8cmの中型のもの（183～186）、15.3～16.4cmを測る大型のもの（187・188）とに区分される。体部はストレートに立ち上がり、口縁部をわずかに摘み出すものと丸くおさめるものがある。扁平な高台は、底部端に付けるもの（181・182・186・188）と少し内側に付けるもの（179・180・183～185・187）とがある。調整は体部がヨコナデ、内底面はナデ、外底面はヘラケズリである。胎土は精良で細砂粒を含み、焼成は堅緻。色調は青灰色～濃灰色を呈する。

190は須恵器高坏の脚で、底径は12.3cmを測る。脚部はラッパ状に開き。裾端部は小さく折り曲げて外方に摘み出し、外唇は平坦に整えている。坏部はヨコナデ、脚部は捻るように絞りの後にヨコナデ調整を加えている。胎土は精良で若干量の石英砂と長石粒を含み、焼成は堅緻。色調は青灰色。

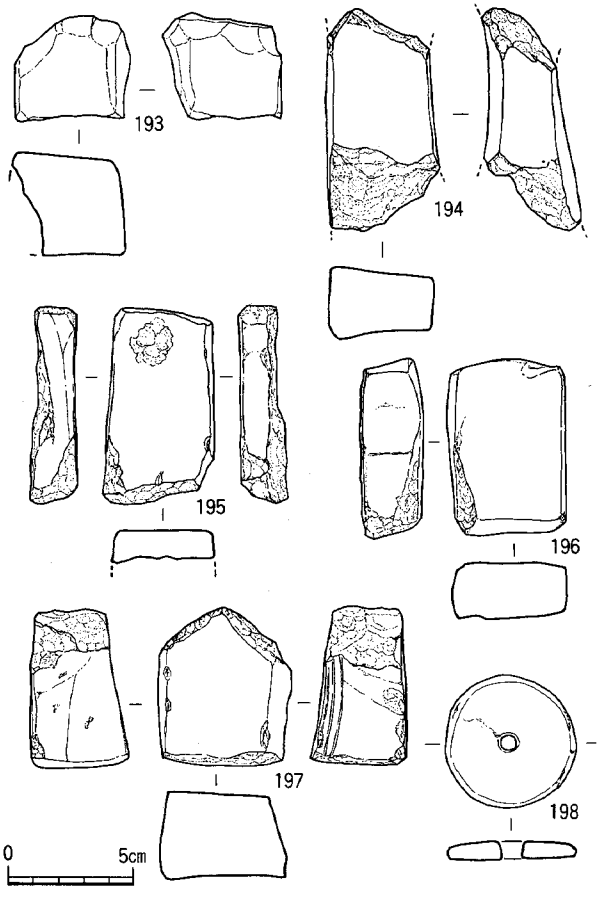


Fig. 38　19号住居跡出土遺物実測図3（1／3）

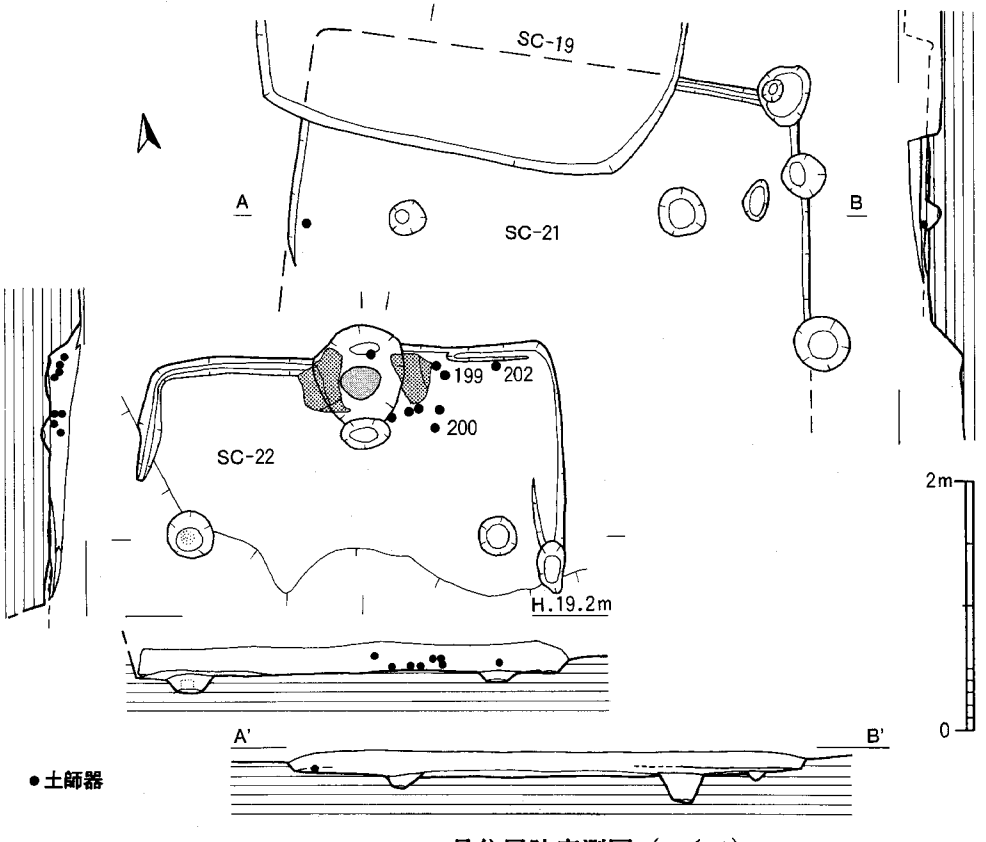


Fig. 39　21・22号住居跡実測図（1／60）

191は須恵器の甕である。頸部は内面に緩やかな稜を作って外反する。調整は頸部がヨコナデ、胴部外面は格子目叩き、内面は青海波の叩き後にヨコナデを加えている。胎土は良質で微細砂を含み、焼成は堅緻。色調は外面が褐灰色～青灰色～赤灰色。内面は灰青色。

192は須恵器の壷である。球形の胴部は小さく肩が張り、口縁部は直口気味に立ち上がる。調整は外面が平行叩き目、内面が粗い同心円文叩き目である。胎土は良質で石英砂や長石粒を含み、焼成は良好。色調は灰色を呈している。

193～197は砂岩質の砥石である。表裏面と側面が砥面として使い込まれている。197の側面には筋状の擦痕がある。

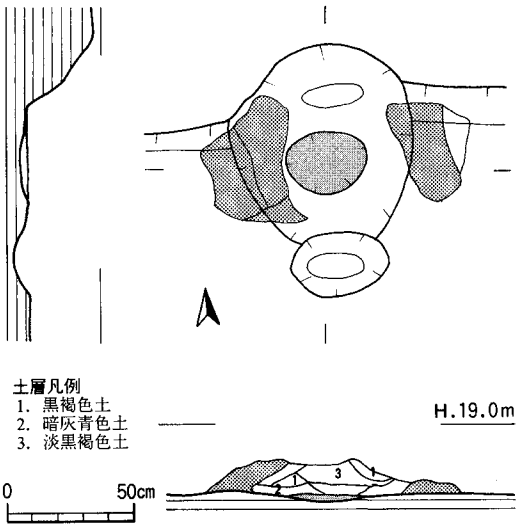


Fig. 40　22号住居跡カマド実測図（1／30）

198は滑石製の紡錘車である。直径は5.3cm、厚さは9.8㎜で中心には孔径6.8㎜の円孔が穿たれている。

21号住居跡　SC－21（Fig. 39　PL. 20）

21号住居跡は、調査区の南西部に重複する住居跡群の中央にあり、北壁は19号住居跡に、南壁は22号住居跡に削平されている。東西長は4.1ｍで、南北長は4.7ｍに復原される方形プランをなそう。主柱穴は東西柱間が2.2ｍ、南北柱間は1.7ｍの4本柱で、やや鈍角的に開いている。柱穴は直径が30～40㎝の円形で、深さは15～30㎝である。床面は、鳥栖ローム土を薄く敷いて貼床としている。カマドは東壁側にはなく、消失した北壁に付設していた可能性が考えられる。

22号住居跡　SC－22（Fig. 39・40　PL. 20・21）

22号住居跡は、調査区南西端に重複する住居跡群中で最も南端にあり、南壁は解析谷にむかって急速に傾斜してゆく。北壁は21号住居跡の南壁を切って掘り込まれており、すぐ東には23号住居跡と24号土壙が位置している。平面形は、東西長が3.4ｍで、南北長は3ｍほどの方形プランに復原されようか。北壁の中央部には、両袖を幅が20～30㎝の青灰色粘土混じりの粘砂土で固めたカマドを付設している。カマドは長径が85㎝、短径が70㎝の楕円形プランを呈し、15㎝が壁面外に突出している。火床は床面を5㎝ほど浅く掘り込み、壁面に沿って15㎝ほど立ち上がる。その後に、壁外で小さなフラット面を造って緩やかにのびて煙道としている。このカマドを始点として壁下には幅5㎝ほどの周溝が巡る。主柱穴は柱間が2.5ｍを測る東西軸の2本柱と考えられるが、4本柱と仮定すると南北に長い長方形になる。柱穴内には、直径が約10㎝の柱痕跡が残っている。遺物はカマドの東袖際から土師器や須恵器の甕や坏が出土している。

出土遺物（Fig. 41　PL. 25）

199～202は土師器の甕で、口縁部は大きく「く」字状に外反し、内面に弱い稜を作る屈曲部は肥厚する。外面は粗いハケ目調整で、内面は横～縦方向のヘラケズリである。胎土には石英砂や長石粒と雲母粒をやや多く含み、焼成は良好。199は口径が32㎝。外面は明褐灰色、内面はにぶい橙色～褐灰色。200は口径が33.6㎝で、口縁部内面は横方向のハケ目調整を施している。外面はにぶい赤褐色、内面はにぶい橙色。201は口径が33.6㎝で、色調はにぶい橙色。口縁部内面は横方向のハケ目調整。202は口径が28.8㎝で、頸部の屈曲は緩やかである。底部は丸底になろう。外面は橙～黒褐色で内面はにぶい赤褐色。203は扁平な須恵器の坏で、口径は14.4㎝、底径は10㎝、器高は2.3㎝を測る。体部は短くストレートに外反する。体部はヨコナデ調整、外底面は回転ヘラケズリ。胎土は精良で、焼

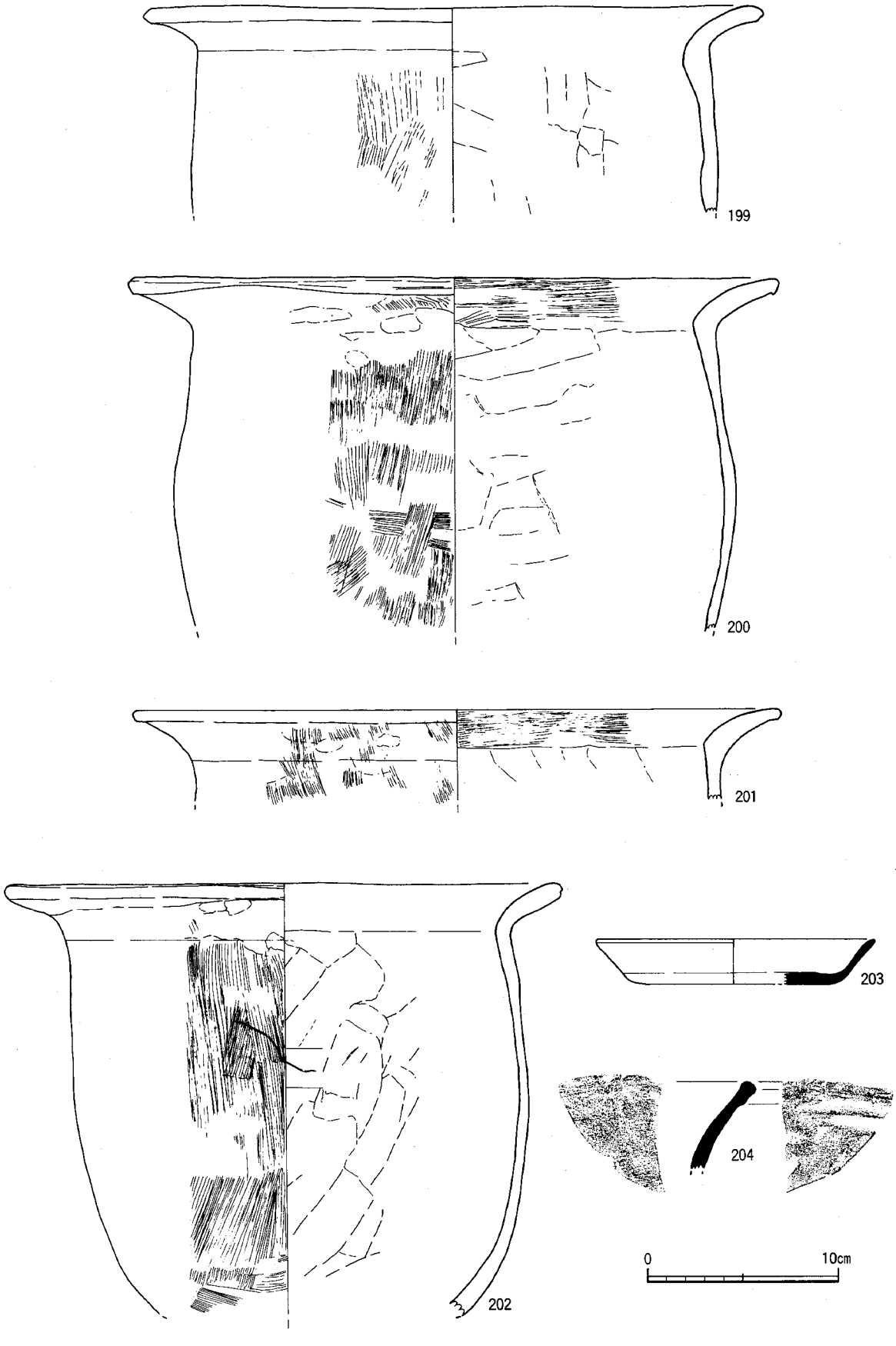


Fig. 41　22号住居跡出土遺物実測図（1／3）

成は良好。外面は灰褐色、内面は黄橙色。204は須恵器甕の口縁部である。口縁部は外面に粘土紐を貼り付けている。胎土はやや粗く、内外に布目圧痕がある。色調は青灰色。

23号住居跡　SC－23

（Fig. 42　PL. 21）

23号住居跡は、調査区南端の緩斜面端に立地し、南壁側は解析谷に向かって急速に傾斜していく。21・22号住居跡のすぐ東に位置しており、西壁は24号土壙の東壁に削平されている。平面形は、長軸が2.9m、短軸が2.5mの方形プランを呈している。東壁のやや南寄りに位置して、カマドが付設されている。カマドは直径約50cmの円形で、1/3の20cmほどが壁外に突き出ている。火床は浅い凹レンズ状をなし、底面は良く焼けて著しく赤変している。火床の北側には青灰色粘土で固めた幅20cm、長さ30cmの袖部が壁面からのびて遺存していた。床面には貼床の痕跡がわずかに残り、北壁下には幅6cmの浅い周溝が巡っている。床面の大半が撹乱で消失しており、主柱穴は不明。カマド内から土師器甑片が出土している。

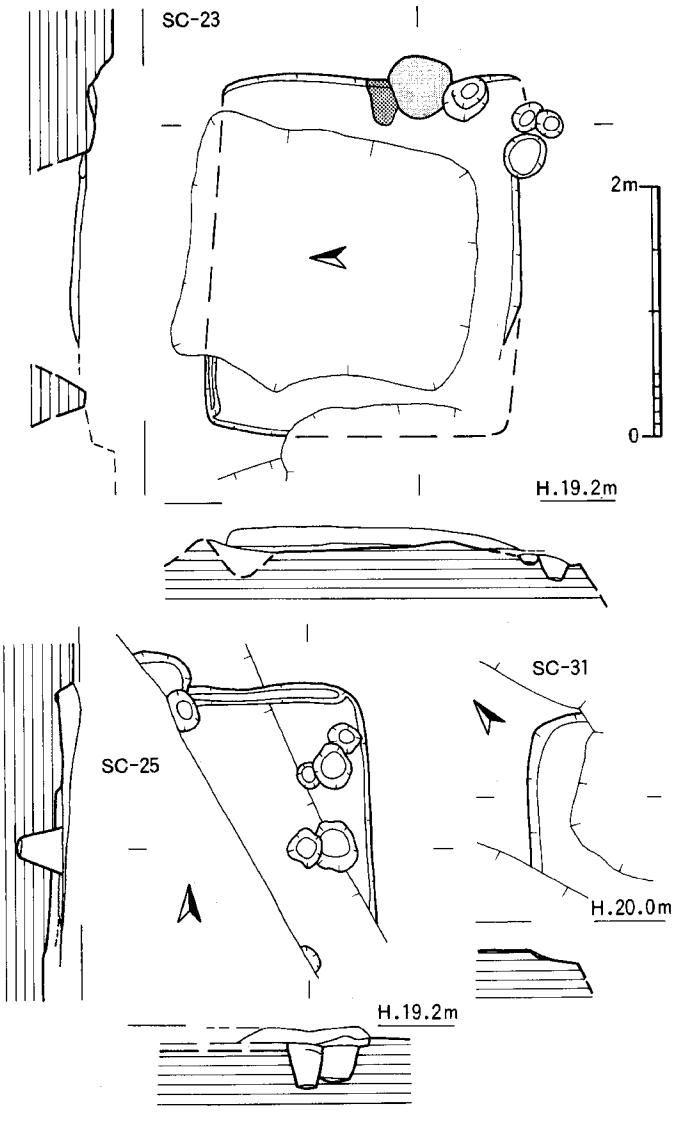


Fig. 42　23・25・31号住居跡実測図（1／60）

25号住居跡　SC－25

（Fig. 42　PL. 21）

25号住居跡は、調査区の南西端にあり、緩斜面南縁の丘陵端に占地している。西壁と南壁が調査区外に拡がるために全容は明らかでないが、一辺が4mほどの方形プランをなそうか。北壁下には幅10cmの周溝があり、床面は鳥栖ローム土を薄く突き固めて貼床としている。主柱穴は判然としない。遺物は少ないが、土師器や須恵器の甕や坏、坏蓋が出土している。

出土遺物

（Fig. 43　PL. 25）

205は、土師器の坏である。口径は14cm、底径は6.6cm、器高は3.3cmを測る。

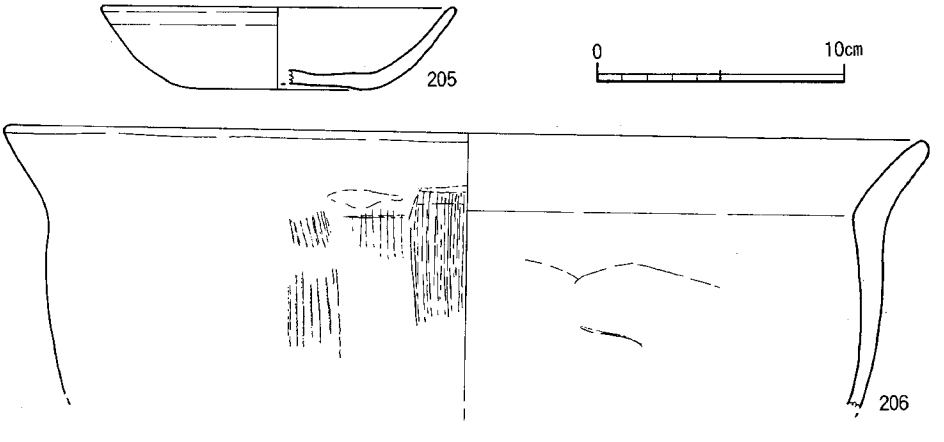


Fig. 43　25号住居跡出土遺物実測図（1／3）

体部は内湾気味に立ち上がり、底部はやや上げ底状をなす。調整は体部がヨコナデ、底部がナデ。胎土には砂粒と雲母粒を多く含み、焼成は良好。色調は灰褐色～にぶい橙色。206は、口径が36.6cmの土師器甕である。口縁部は短く「く」字状に外反する。外面は粗いハケ目、内面はヘラケズリ。胎土は多くの石英と長石粒を含み、焼成は良好。色調は淡赤橙～赤橙色を呈する。

31号住居跡　SC－31（Fig. 42　PL. 15）

31号住居跡は、南側緩斜面のほぼ中央に立地しており、17号住居跡のすぐ北に位置している。壁面は北壁の一部と東壁隅角を残すのみで全容は判然としないが、平面形は一辺が3～4mほどの方形プランをなそうか。北壁下には幅が10cm、深さが5cmの周溝が巡っている。床面にはローム土を薄く敷き固めて貼床としている。遺物は、土器小片がわずかに出土している。

2）土　壙（SK）

土壙は、すべてで3基を検出したが、攪乱を受けて形状の判然としないものがあり、さらに幾つかの土壙があった可能性も十分にありうる。立地的には、いずれの土壙も住居跡群の密接する南側緩斜面の南西隅に近接して占地している。プラン的には、円形のものと方形のものとがあり、機能的には廃棄壙としての性格が十分に考えられる。また、土壙の形状の違いがなにに起因するかは明らかではないが、単に時間的な差違に因るものではないと思われる。分布的には、住居跡に取り込まれるようにして立地しており、集落域の中で住居跡等と何らかの有機的な繋がりをもって展開していたものと考えられる。

20号土壙（Fig. 44　PL. 14）

20号土壙は、調査区南西隅の緩斜面上に立地している。土壙のすぐ北には16号住居跡が位置し、

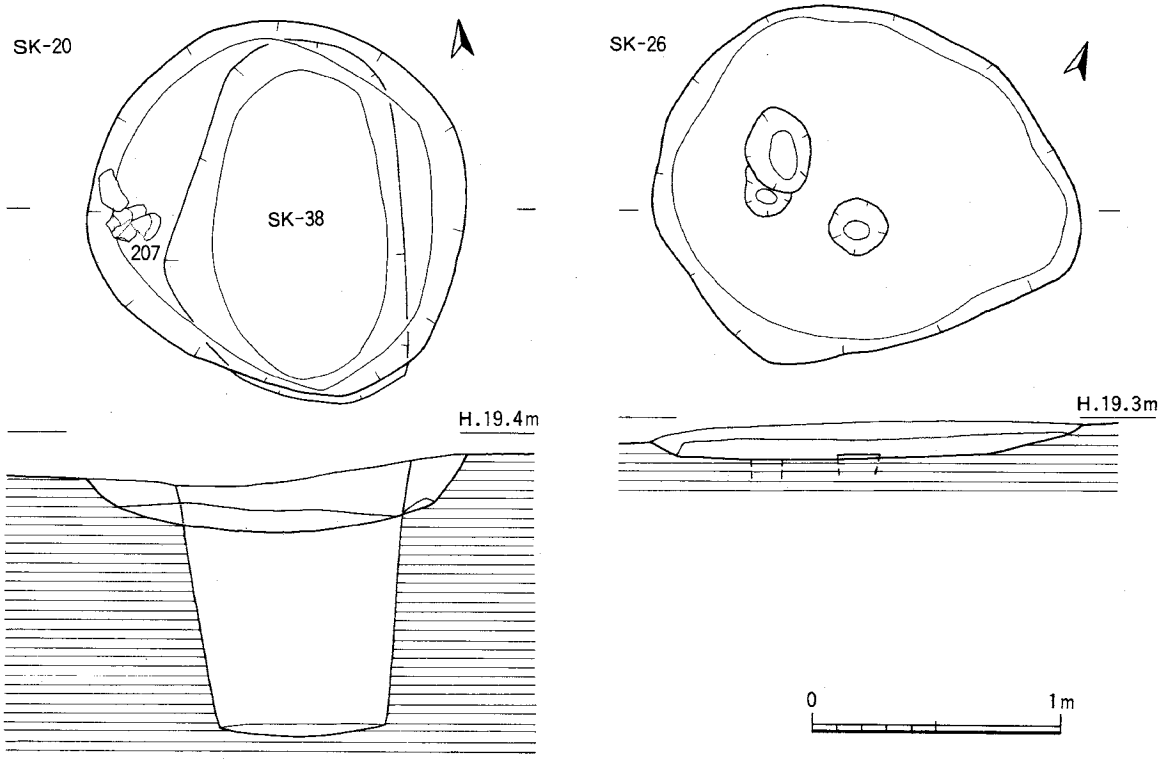


Fig. 44　20・26号土壙実測図（1／30）

真下には38号土壙がある。平面形は、直径が142～147cm、深さが20～30cmの円形プランを呈している。壁面は緩やかに立ち上がり、底面は凹レンズ状をなしている。覆土中からは弥生土器の甕のほかに土師器の甕や須恵器の甕と坏が出土している。

出土遺物（Fig. 45　PL. 25）

207は、口径が19.5cm、底径が15cm、器高が2cmの扁平な土師器の皿である。体部は短く外反し、底部は回転ヘラケズリ後にナデ調整。胎土は良質で若干量の砂粒を含み、焼成は良好。色調は浅黄色～橙色。208は、口径が12.8cm、底径が8cm、器高が3.5cmの須恵器坏である。体部はストレートに外反し、底部には扁平な高台がつく。胎土は精良で、色調は青灰色。

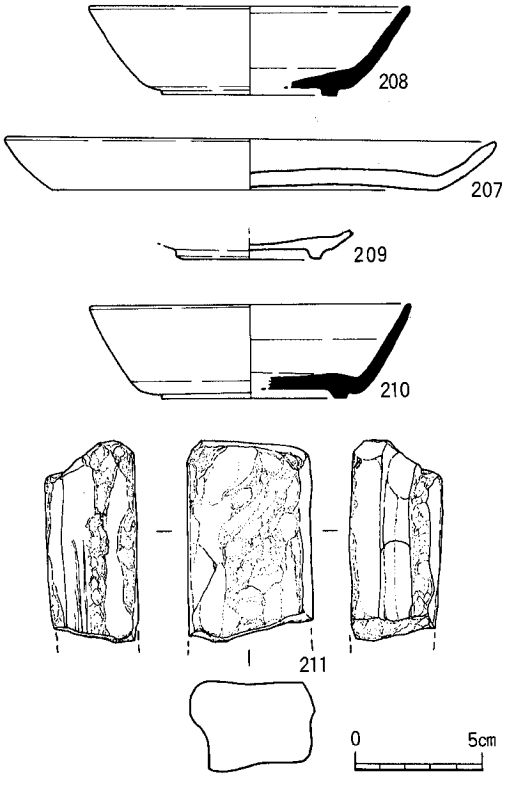


Fig. 45　20・26号土壙出土遺物実測図（1／3）

24号土壙（Fig. 46　PL. 22）

24号土壙は、調査区南端の緩斜面端に立地し、21・22号住居跡のすぐ南東に位置している。東壁は23号住居跡の西壁を切っており、南壁から南は解析谷に向かって急速に傾斜していく。平面形は、長さが165cm、幅が150cmの南壁側がやや短い隅丸方形プランをなしている。壁面は緩やかに立ち上がり、深さは45cmを測る。底面はほぼ平坦で、断面形は逆台形を呈している。覆土中からは、土師器や須恵器の甕や坏身、坏蓋が多量に出土した。また、調査中は谷に近いためか湧水が多かった。

出土遺物（Fig. 47・48　PL. 25・26）

212～214は土師器の坏である。体部は内湾気味に立ち上がり、口縁端部は丸くおさめている。体部はヨコナデ、内底面は押圧ナデ調整で平底の底部は回転ヘラケズリ。胎土は精良で若干の細砂粒と雲母微細を含み、焼成は良好。色調はにぶい橙～橙色。212は口径が17.2cm、底径は8.2cm、器高は17.2cm。213は口径17.4cm、底径は9.3cmで器高は3.4cmを測る。215・216は高台付の土師器坏である。215は高台径が11.6cmで、色調は黄灰色～灰黄色を呈する。216は口径が15.8cm、器高は6.2cmを測る。体部はストレートに立ち上がり、底部端に径9.8cmの高台を貼り付けている。高さ4mmの畳付けは水平に整えている。

217～220は土師器の甕である。「く」字状の口縁部は屈曲する頸部が厚くなり、内壁に弱い稜を作って緩やかに外反する。胴部はやや肉薄で短い。調整は口縁部外面がヨコナデ、内面が横ハケ目。胴部外面は粗い縦ハケ目、内面はヘラケズリ。胎土は良質で石英砂や長石粒と雲母を含む。焼成は良好。色調は外面がにぶい橙色～黄橙～褐灰色、内面はにぶい赤褐色～にぶい褐灰色。口径は217が30.6cm、218が29.8cm、219が29cmで、220は32.8cmを測る。

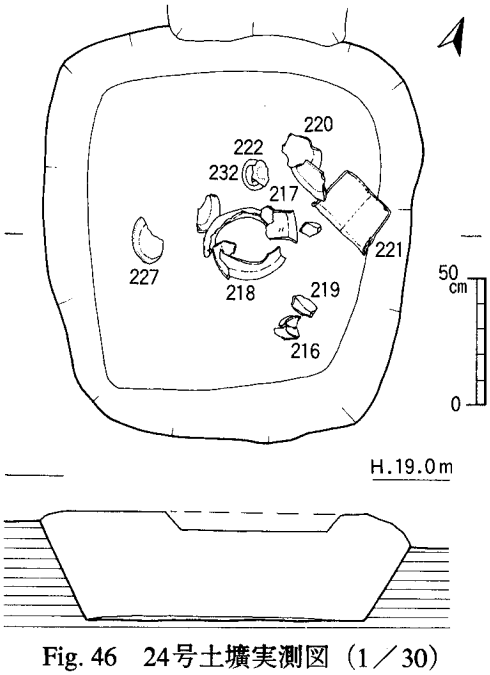


Fig. 46　24号土壙実測図（1／30）

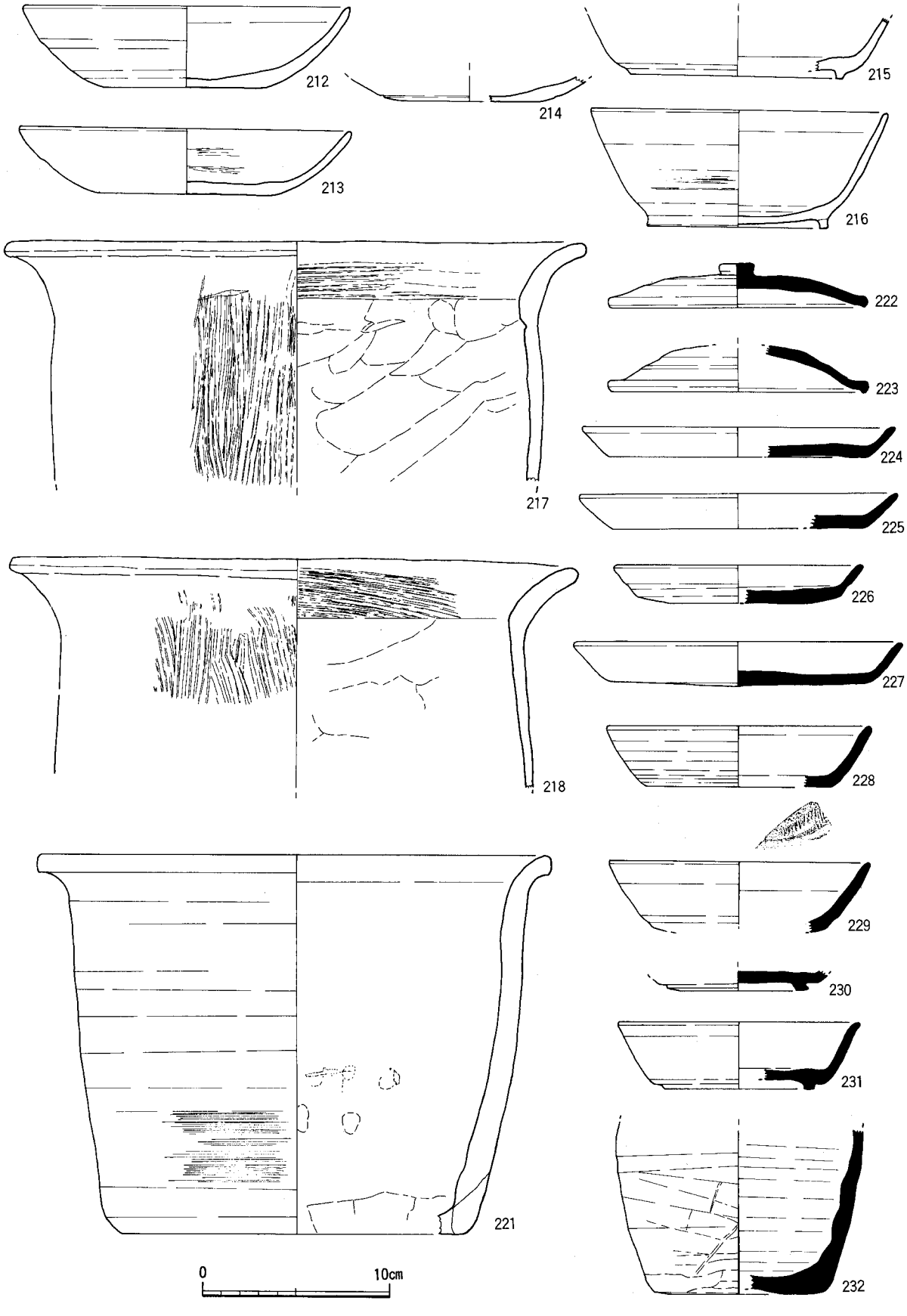


Fig. 47　24号土壙出土遺物実測図1（1／3）

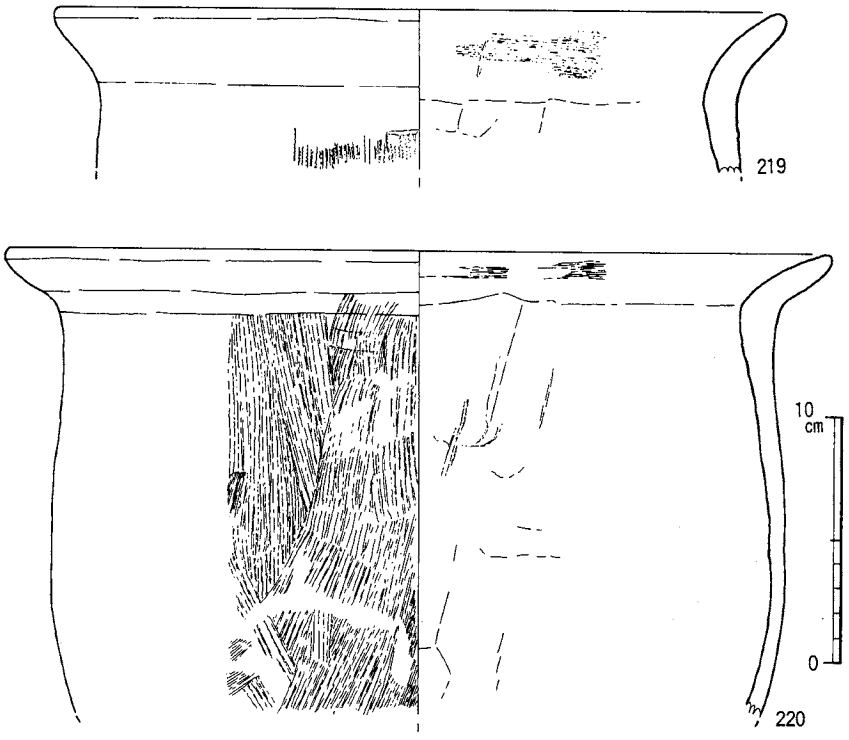


Fig. 48　24号土壙出土遺物実測図2（1／3）

221は口径が27.1cm、底径17.8cm、器高が20cmを測る土師器の甑である。肉厚の胴部は円筒状をなす。口縁部は、緩やかに屈曲して短く外反し、口唇部は小さく下方に摘み出して垂直に仕上げている。底部には突起状の桟具が付いている。調整は胴部上半がヨコナデ、下半はカキ目。内面は指頭押圧後にナデで底面はヘラケズリで桟具痕を刳り抜いている。胎土は石英砂や長石粒を多く含み、焼成は良好。外面はにぶい橙～黄橙色、内面はにぶい橙色。

222・223は摘みの付く須恵器の坏蓋である。222は口径が13.6cm、器高が2.4cmで摘み径は1.8cmを測る。天井部は平坦で、摘みは高さが8mmの扁平なものである。口縁部は小さく下方に摘み出し、外唇は垂直に整えている。調整は口縁～体部がヨコナデ、天井部内面はナデ、外面は回転ヘラケズリである。胎土は精良で細砂粒を含み、焼成は堅緻。暗青灰～青灰色。223は口径が14cm。天井部は丸みを帯びて立ち上がり、水平に屈曲した口縁部は端部を下方に摘み出している。

224～227は須恵器の皿で、口径が13cmの小さいもの（226）と17cm内外の大きいもの（224・225・227）がある。体部は大きく扁平な底部から短くストレートに立ち上がる。調整は体部がヨコナデ、底部内面はナデ、外面は回転ヘラケズリ～ナデ。胎土は良質で砂粒を含み、焼成は良好。色調は青灰色～灰白色。224は口径が16.6cm、底径13.6cm、器高は1.6cm。225は口径16.8cm、底径13.2cm、器高は1.8cm。226は口径13.2cm、底径7cm、器高は2cm。227は口径が17.4cm、底径13.2cm、器高は2.4cm。228・229は須恵器の坏。体部は内湾気味にストレートに立ち上がる。調整は内外ともにナデ。胎土は精良で細砂粒を含み、焼成は堅緻。228は口径14cm、底径9.8cm、器高は3.2cmで、底部には板目圧痕が残る。青灰色。229は口径が13.8cmで、底部は膨らみ気味になる。色調は灰白色。230・231は高台付の須恵器坏。調整は底部外面がヘラ、内面は回転ナデで体部はヨコナデ。胎土は精良で、焼成は堅緻。青灰～明青灰色。230は高台径が7.6cmで、畳付けは端部を外方に小さく摘み出す。231は口径が12.8cm、器高は3.5cmで高台径は7.4cm。体部はストレートに立ち上がり、口縁部は小さく屈曲して短く外反する。高台は底面のやや内側につき畳付けは平坦である。

232は底径が9cmの須恵器壷である。胴部は円筒状をなし、肉厚の底部は中央がやや上げ底になる。調整は外面がヘラケズリ～ヨコナデ、内面は回転ヨコナデで凹凸が著しい。底部はヘラケズリで上げ底部はナデ調整。胎土は精良で砂粒をわずかに含み、焼成は堅緻。色調は青灰色。

26号土壙　SK－26（Fig. 44　PL. 22）

26号土壙は、調査区南西隅の緩斜面上に立地している。土壙のすぐ北には20号土壙が、東には19

号住居跡が、また西には25号住居跡が位置している。平面形は、長軸が171㎝、短軸が138㎝の楕円形プランを呈している。緩やかに立ち上がる壁面は、深さが15㎝で、浅い凹レンズ状をなしている。覆土中からは、土師器の甕や坏と須恵器の坏が出土している。

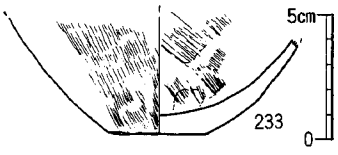


Fig. 49 ピット出土遺物実測図(1／3)

出土遺物（Fig. 45　PL. 26）

209は土師器の坏で、高台径は5.8㎝を測る。胎土は精良で若干の石英砂と雲母を含み、焼成は良好。色調は橙色。210は、口径12.8㎝、底径8.6㎝、器高が3.6㎝の須恵器坏である。体部はストレートに立ち上がり、底部はわずかに上底状をなしている。胎土は精良で若干の雲母微細と石英砂を含み、焼成は良好。色調は青灰色～褐灰色。

211は、幅が5㎝、厚さが3.6㎝の砥石。小口を除く4面が砥面として使用されており、側縁には筋状の線刻がある。

4．包含層出土の遺物

調査では主に弥生時代と奈良時代の遺構を検出したが、包含層や丘陵北側の谷からは古墳時代の土師器や須恵器片も出土している。ピットの中にはこの時期のものもあり、ひとつの遺構として把握できなかった古墳時代の遺構が濃淡は別として拡がっていたことが十分に予想される。

233はピット出土の甕で、底径は3.9㎝を測る。外面はハケ目、内面は指頭押圧後にハケ目調整。外面には煤が付着している。胎土は石英砂や長石粒を含み、焼成は良好。色調はにぶい橙～灰褐色。

234～237は丘陵の北側に湾入する谷の上縁から出土した。234は口径が18.6㎝の土師器甕である。「く」字状の口縁部はわずかに端部を摘み出し、薄い胴部は球形をなす。調整は口縁部がヨコナデ、胴部は外面がハケ目、内面はヘラケズリである。胎土は石英粗砂や細砂粒、雲母粒を多く含み、焼成は良好。色調は褐灰色～灰白色。235は口径が8㎝の台付鉢になろうか。体部は球形で、口縁部は緩やかに内傾する。内面は指頭押圧後にハケ目調整。胎土は良質で細砂粒と雲母を含み、焼成は良好。色調は灰白色。236は口径が14.2㎝の器台である。内面はナデ、外面は粗いハケ目調整。胎土には多くの砂粒を含む。外面はにぶい黄橙色、内面は浅黄橙色。237は細くストレートにのびる高坏の脚で、裾部は緩やかに外反する。内面は絞り後にナデ、外面は研磨。胎土は石英砂や長石粒を多く含む。明褐灰色。

238は切先を欠く鉄鏃で、基部の抉り込みは鋭く深い。現長は2.9㎝を測る。

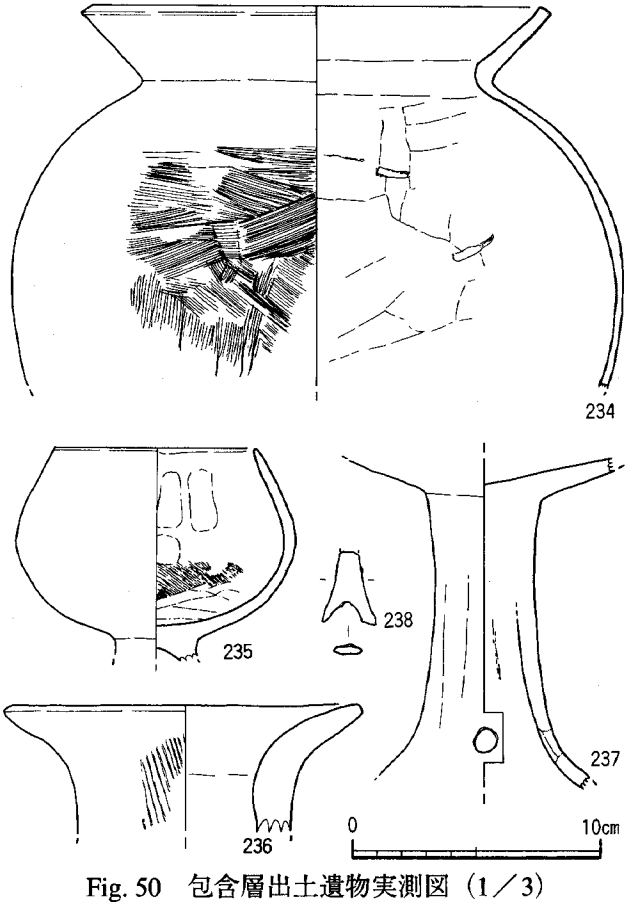


Fig. 50　包含層出土遺物実測図（1／3）

Ⅲ．おわりに

第9次調査では、弥生時代から奈良時代の集落跡を検出した。殊に弥生時代の集落跡は、住居跡の構造解明とガラス玉や辰砂の出土など幾多の資料を提供した。ここでは調査で明らかになった点について簡単に整理し、後途に託したい。

はじめに弥生時代後期の集落跡は、竪穴住居跡と掘立柱建物跡からなり、東西にのびる丘陵の尾根を中心にして展開している。住居跡同士の切り合いは、SC－02→SC－03とSC－04→SC－32の2カ所で観られるが、SC－05とSC－06の2棟を加えた6棟は東西22m、南北18mの400㎡の狭い範囲に密接しており、状況的には3期以上に亘って存立していたものと推考されよう。構造的には長方形プランを基本とし、短壁に沿って短冊状のベッド状遺構を対峙して造り出しているが、「L」字形（SC－01）や「ロ」字形（SC－05）に巡らすものがある。このタイプはベッド状遺構の途切れた南壁際の中央部に土壙がある。このうち5号住居跡（SC－05）の土壙は、その南西隅の壁際から壁面に沿って半円筒状に浅い溝が煙道状に掘り込まれており、竈的な要素を示唆している。ところが覆土中には多量の炭片が混入しているにもかかわらず壁面の赤変はなく、竈としては機能したかは即断しがたい。一方、1間×2間を基本とする掘立柱建物跡は柱筋を同じくする東西棟（SB－07・11・12・28・36）と南北棟（SB－08・27・29・33・34）の2グループがあり、2時期の存立が容認されよう。これらの住居跡と建物跡の重複は、SC－01とSB－07・36、SC－03とSB－12、SC－06とSB－11、SC－17とSB－27の4カ所で観られるが、いずれも建物跡が住居跡よりも古い。このことは建物跡が住居跡に付随して機能したものではなく、それぞれが独立的に存立して集落域を構成していたことを示唆している。北西へ150mの距離にある第5次調査区でも同期の竪穴住居跡1棟が検出されており、南八幡丘陵の西南縁に沿って弥生時代後期の集落域が展開していたものと推考される。麦野丘陵～雑餉隈丘陵を俯瞰すると、前期後半から中期には貯蔵穴群を伴う集落域が雑餉隈丘陵に拡がり、その廃村後は一時的な断絶期をおいて後期に北の解析谷を越えた南八幡丘陵に新たな集落域が展開する。しかし、これらの集落域はいずれも小規模で墳墓域も明らかでなく、継続的に存立したものではない。

また、住居跡のうち4棟（SC－02・03・05・32）からは95個を越すガラス小玉や管玉が出土している。殊に、2号住居跡（SC－02）は68個と圧倒的に多く、辰砂粒も出土しているが、生産を示唆するようなガラス滓や鋳造具等は検出されなかった。1kmほど西方には青銅器やガラス製品の生産工房跡として著名な須玖遺跡群があり、供給集落に対する消費集落として集落間の地縁的、主従的関係の対比と検討が必要となろう。一方、辰砂粒は、北方の比恵丘陵で2例（比恵遺跡57次・69次調査）が報告されている。なお、ガラス玉の成分分析は巻末に詳報している。

次に、奈良時代の集落域は丘陵南縁の緩斜面に沿った東西20m、南北15mの300㎡の狭い空間に9棟の住居跡が密集しており、状況的に観て3～4期に亘る存立が想定される。住居跡は構造的に共通した特徴を有する。平面形は、基本的にはほぼ方形に企画されている。規模的には、一辺の長さが2.5m～3mの小型と3.5m～4mを測る中型があり、4.5mを越すような大型のものは現状ではない。竈は、北壁と東壁の中央部に突出して付設されている。この突出は住居跡の規模と密接に関連し、狭小な床面の有効域確保に起因すると推考される。主柱穴は21号住居跡の4本柱を除いて住居内では未検出で、壁外に設けた可能性を考えざるを得ない。景観的に俯瞰すると、雑餉隈遺跡～麦野C遺跡～南八幡遺跡の丘陵群南縁にかけて密集的に分布し、北縁域は稀薄になる。殊に、雑餉隈遺跡は大型の掘立柱建物跡群を中心に集落が展開し、官衙的施設の存在も予測されているが、9世紀には全く途絶してしまう。この廃村の起因と丘陵群ごとの集落変遷や関連づけが不可欠な検討課題である。

南八幡遺跡９次調査出土ガラス及び暗赤色小塊物質の保存科学的調査について

比佐陽一郎[1]・片多雅樹[2]・北村幸子[3]・肥塚隆保[4]

1. はじめに

南八幡遺跡9次調査では、100点近いガラス関連資料と、併せて暗赤色を呈する小豆粒状の鉱物様物質が出土した。古代のガラス製品については、これまでの調査研究により様々な材質のものがあり、それらの流通や伝播の経路・その変遷等が解明されつつある。埋蔵文化財センターでは平成11年4月に施設が増築リニューアルし、その中で各種事前調査用分析機器を導入した保存処理施設が完成したことから、これらを用いた自然科学的な調査を中心に、それによるガラス資料の歴史的位置づけと、暗赤色小塊の同定を試みた。なお一連の作業は肥塚指導の元、比佐等が埋蔵文化財センターにおいておこなった。

2. ガラス関連資料

(1) 玉類

◆概要調査

その内容については本文中の各表に示すとおりである。ガラス玉は、SC－02・03・05・32の4棟の住居から出土した。肉眼観察では、その色調と形状から右表（Tab. 1）の様に分類できる。また各遺構からの出土状況と合わせて表にまとめてみた。破損している個体の内No.27については複数の破片があるが、色調や気泡の入り具合から同一個体として認識している。

（単位：ケ）

形　　状	色　調	SC02	SC03	SC05	SC32	計
小　　玉	淡青色	48	3	1	17	69
小　　玉	青紺色	18	1	1	2	22
小玉(粟玉)	黄緑色	2	1	0	0	3
管　　玉	赤　色	0	0	1	0	1
計		68	5	3	19	95

Tab. 1　遺構別・種類別の出土数

大きさは黄緑色の粟玉[5]が、ややまとまりを見せるものの、それ以外の淡青色、青紺色の小玉は径が2.35㎜～6.7㎜、長さ（厚さ）が1.4㎜～5.1㎜と、ばらつきが大きく、グルーピングは不可能といえる。参考のため小玉における径と長さの法量分布をグラフ化してみた（Fig. 1）。

比重はアルキメデス法による測定を行った。しかし資料によってはあまりに小さく測定値に疑問の残るものや、それ以前に測定できないものもあったが、結果は、本文中の各一覧表に記すとおりである。淡青色の小玉はやや幅が大きく1.76から4.33で平均2.48、青紺色の小玉は最小値2.37のものから最大値3.33のものまであり平均2.69、赤色の管玉は1点のみであるが2.53と、いずれも2.5前後の数値を示している。この数値は、これらの玉類が鉛を含まないアルカリ珪酸塩系のガラスであることを予測させるものであった。なお黄緑色の粟玉は小さすぎて、いずれも測定不能であった。

◆蛍光Ｘ線による材質調査

続いてガラスの組成を知るための分析を試みた。分析は含まれる元素を調べることによって、どのような材質で製作されているかを明らかにするものであるが、今回は蛍光X線分析法による調査を行った。この方法は試料にX線を照射し、含有する各元素から発生する二次X線（特性X線）を検出器でとらえてX線エネルギーとその強度をピークとして表すものである。ガラス資料の場合、局部的に強いX線を照射す

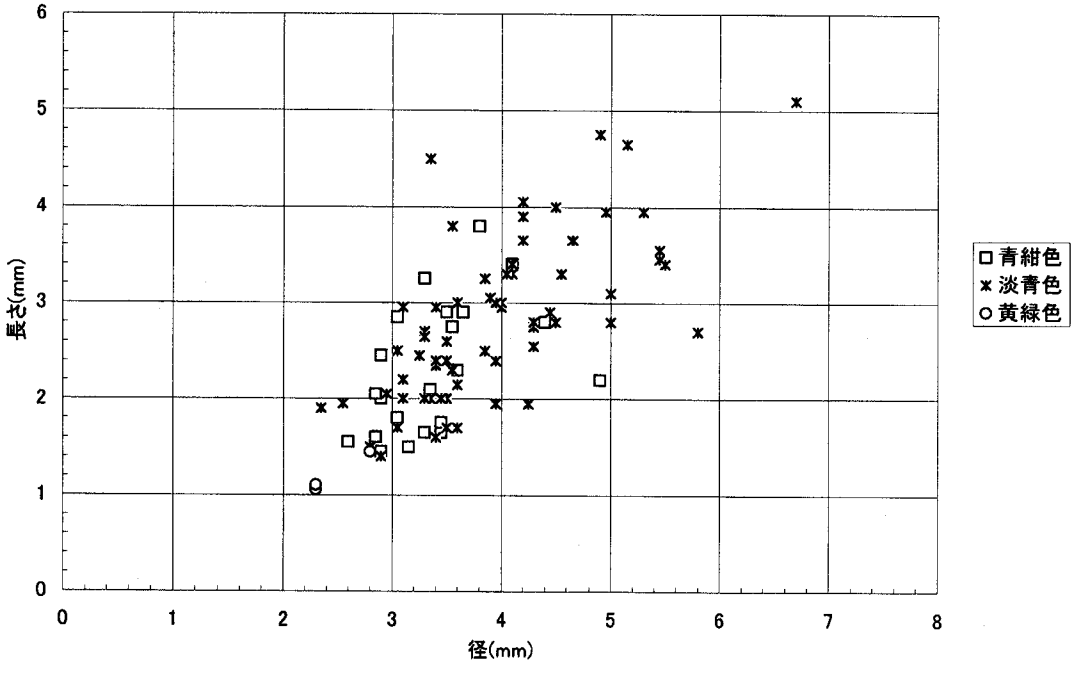


Fig. 1　小玉の径と長さの法量分布

るとその部分が変色を来す現象が起きるため、同じ蛍光X線分析法でも、X線強度が小さくても検出感度の優れたエネルギー分散型蛍光X線分析法が有効である。この方法により、資料を破損することなく非破壊でデータを得ることができる。また詳細な調査を行うには、風化部分を取り除いて、更に標準資料を用いた校正から成分の定量値を求める必要があるが、遺物を損傷させずに実施したため、今回は定性分析のみに止めている。

測定条件

分析装置：エネルギー分散型微小領域蛍光X線分析装置（エダックス社製／Eagle μ plobe）

対陰極：モリブデン（Mo）／検出器：半導体検出器／印加電圧・電流：20kV・400～500μA／測定雰囲気：真空／測定範囲0.3㎜φ／測定時間300秒

測定はすべての資料を対象としたが、結果は肉眼観察による分類に対応するものであったので、1点ずつの結果は一覧表に収め、詳細を各分類ごとの全体的な傾向として以下に記すこととする。また分析のチャートも、紙幅の関係からそれぞれの代表的なものを掲載するに止める。

日本の弥生時代のガラスには、これまでの調査でアルカリ珪酸塩ガラスと鉛珪酸塩ガラスのあることが知られている。アルカリ珪酸塩ガラスは融剤に酸化カリウムを用いるカリガラス（K_2O-SiO_2系）と融剤に酸化ナトリウムを用いるソーダ石灰ガラスに区別され、更にソーダ石灰ガラスは酸化アルミニウム含有量の高いもの（$Na_2O-Al_2O_3-CaO-SiO_2$系）と、低いもの（$Na_2O-CaO-SiO_2$系）に区分される。鉛珪酸塩ガラスには、鉛ガラス（$PbO-SiO_2$系）と鉛バリウムガラス（$PbO-BaO-SiO_2$系）がある。

定量値が算出されればそれによる同定が可能であるが、今回の調査では完全非破壊分析による定性分析であり、得られた蛍光X線の特徴と相対強度から判定することになる。

①小玉／淡青色グループ

アルミニウム（Al）、ケイ素（Si）、カリウム（K）・カルシウム（Ca）の他、チタン（Ti）・マンガン

(Mn)・鉄(Fe)・銅(Cu)・鉛(Pb)が検出された。鉛珪酸塩ガラスとするには鉛の強度が低いことから、銅着色のカリガラスで、鉛は着色に青銅が用いられたことによる混入と考えられる。マンガンのピーク強度は青紺グループに比べると著しく低い。なお、鉄、アルミニウムはガラス原料に混入する不純物と考えられる。カリガラスには一般的に数%のアルミニウムが伴うとされている。

②小玉／青紺色グループ

ケイ素(Si)、カリウム(K)が特徴的なピークとして検出されたほか、アルミニウム(Al)、カルシウム(Ca)、コバルト(Co)、鉄(Fe)、チタン(Ti)、マンガン(Mn)、銅(Cu)等の元素が検出された。特にカリウムのピークが強く出ており、カリガラスであることを示している。コバルト、鉄は着色材料に基づくものと推定され、マンガンはコバルトに伴う不純物と考えられる。これらは従来から弥生時代～古墳時代の遺跡で出土している青紺色のカリガラスと同じ特徴を示すものである。

③小玉(粟玉)／黄緑色グループ

ナトリウム(Na)、マグネシウム(Mg)、アルミニウム(Al)、ケイ素(Si)、カリウム(K)、カルシウム(Ca)、チタン(Ti)、マンガン(Mn)、鉄(Fe)、銅(Cu)、鉛(Pb)などのピークが検出された。ナトリウム、カルシウムが検出されていることから、ソーダ石灰ガラスと考えられる。しかし、カルシウムのピークから考えると含有量は少ない。ナトリウムのピークが少ないのは、検出感度が悪いことと、風化によるナトリウム成分の減少に伴うためである。

今回の定性分析の結果から定量的な同定は困難であるが、アルミニウムのピークが多く測定されていることから推定すると、従来から言われている高アルミナ含有のソーダ石灰ガラスと考えられる。黄緑色の着色は、鉄、銅、鉛が関与していると推定できる。

④管玉／赤色

ナトリウム(Na)、マグネシウム(Mg)、アルミニウム(Al)、ケイ素(Si)、カリウム(K)、カルシウム(Ca)、チタン(Ti)、マンガン(Mn)、鉄(Fe)、銅(Cu)、といった元素が検出された。

ピークパターンから判断すると、基本的には③と同様な高アルミナ含有のソーダ石灰ガラスに同定される。このタイプのガラスはチタンの含有量が他のタイプのガラスに比較して多く、ピーク強度も特徴的に見られる。

着色要因は銅のピークが大きく、銅が関与していると考えられるが詳細は不明であり、現在X線回折法等によって調査中である。不透明な赤色の管玉が報告されている例は少ないが、同色の小玉との関連についても調査中である。③のタイプと異なる点は、鉛を全く含んでいない点である。

◆顕微鏡による観察

ガラスの成形技法を知ることを目的として、実体顕微鏡を用いての観察も行った。出土ガラスは、表面的な観察の他に内部に含まれる気泡を見ることで、成形技法の判別が可能であり、それには実体顕微鏡観察を用いた観察によって、より詳細な情報を得られることが、先学によって実践・報告されている。小玉の成形技法としては、心棒に半溶融状態のガラスを巻き付ける「巻き付け技法」、鋳型に溶けたガラスを流し込む、あるいは細かく砕いたガラス片を鋳型に充填して加熱する「鋳型成形技法」、引き延ばして作られたガラス管を細かく折って、再加熱により破断面を整形する「引き延ばし(後再加熱)技法」の主に3種類が想定されている。特に「引き延ばし技法」による小玉の製作については小瀬康行氏による実証的且つ詳細な研究があるが、それによればこの方法で作られた小玉には、孔に平行する気泡列、あるいはこれが風化により表層に顕わになった「蝕像パターン」の見られることが挙げられ、更に実験の結果として、引き延ばされた時点で連続していた気泡が、ガラス管の細分化、再加熱の過程で、加熱の度合いにより徐々に独立化する過程が明らかにされている。南八幡遺跡出土の小玉には、いずれにも孔に平行した連続

した細長い気泡や、独立した気泡が連続したもの等、何らかの「引き延ばし技法」の痕跡を示す気泡が見られ、これら小玉が色調に関係なくこの方法により製作されていることを示していると思われる。実際、外見的にも、再加熱の度合いが少なく、折られた管玉の形状を比較的残しているものも見受けられる(No.74)。

淡青色小玉のNo.109では、本来短円柱状の玉が半分に割れ蒲鉾形になった曲面頂部に、径2㎜・深さ約1㎜に、すり鉢状の窪みが形成されているものが見られた。この個体の破断面には別に孔の肩が残っており、本来はこの孔を利用した小玉であったと思われる。すり鉢状の窪みも人為的に、何らかの回転工具で施したような正円を呈していることから、孔の部分で破損した個体に別の角度から再度穿孔を施して再加熱により整形することで、一回り小さな製品に再利用しようとした可能性が考えられる。(PL. 14～16)

管玉については1点のみであるが、この資料は孔に平行して数多くの筋が見られ、ガラスを引延ばして管状に成形したことが判る。(PL. 20) 小口部分や孔の端部、表面の筋を見る限り、再加熱や著しく研磨された様子は見られず、成形後は特に加工されていないようである。いわば小玉の原材料ともいえる資料である。また小口面の観察では、孔の外周に平行して回る黒い筋が見られるが、これは溶けたガラスを引き延ばすための心棒か、あるいは吹き竿に巻き付けた際の痕跡と思われる。(PL. 21・22)

この他観察の中で、製作技法とは直接関連がないが変わった例として、黄緑色粟玉No.36の孔内部に、角状の突起が観察された。これは孔内部の縁に残った気泡がはじけたものと考えられる。(PL. 17・18)

3. 暗赤色小塊物質

ガラスの小玉に混じって分析対象として持ち込まれた。大きさは約4×3×2㎜、重さは0.13 g、赤黒く金属光沢を有しており、劈開はシャープである。(PL. 23・24) 比重は電子比重計（ミラージュ貿易株式会社・SD－200L）を用いて浮力法によりで測定したところでは、8.2であった。これは経験的に赤色顔料「朱」の原料である辰砂の原石であることが予測されたが、念のため蛍光X線による含有元素分析とX線回折による結晶構造解析を行った。埋蔵文化財センターに新たに導入されたX線回折装置は試料水平型と呼ばれるもので、水平におかれた試料に対して管球と検出器が$\theta+\theta=2\theta$移動する。試料はラボジャッキ方式のステージ上に置かれ、ハンドルによって試料の高さを調整し、最終的にレーザー光を利用した高さ測定器により測定面の高さが決定される。試料は置くだけといってよい状態で測定が可能なため[6]、非破壊調査が前提となる（無理な体勢で固定できない、あるいはサンプリングして粉末加工する事が難しい）文化財資料の測定に適した装置といえる。当資料の分析でも、シリコン無反射板上に置いたのみで測定を行った。

それぞれの分析条件は次の通り。

蛍光X線分析

分析装置：エネルギー分散型微小領域蛍光X線分析装置（エダックス社製／Eagle μ plobe）

対陰極：モリブデン（Mo）／検出器：半導体検出器／印加電圧：40kV・電流：70 μ A／測定雰囲気：真空／測定範囲0.3㎜ φ／測定時間300秒

X線回折

分析装置：試料水平型X線回折装置（フィリップス社製／PW3050）

対陰極：銅（Cu）／印加電圧：40kV・電流：50mA／検出器：Xeガスプロポーショナル検出器／発散スリット：1°／受光スリット：1°／マスク幅：5㎜／走査角度10～80°（2θ）／ステップサイズ：0.02°／スキャンスピード：0.04°/秒

分析の結果、予想通り蛍光X線では水銀（Hg）と硫黄（S）のピークが観測された。また回折ピークが辰砂（Cinnaber）のものと一致し、辰砂（鉱石）と同定された。比重も辰砂の8.09～8.2に収まっており、

これを裏付けている。

4. まとめ

◆ガラス製品

南八幡遺跡9次調査出土のガラスを調査した結果、玉類は、いずれもアルカリ珪酸塩ガラスで、このうち青紺色と淡青色の小玉は、それぞれ着色要因の異なるカリガラス、黄緑色の粟玉と赤色の管玉は、どちらも同じ高アルミナ含有のソーダ石灰ガラスであったが、後者は鉛を含んでいなかった。

カリガラスは中国やインド、東南アジアで流通し、ヨーロッパ等西方には見られない組成のガラスであることから「アジアのガラス」とも言われている。日本では弥生時代に盛行し、中期後半から後期には東海以西に広く分布が見られる。その多くは青色系統の小玉であるが、極希に穿孔の施された勾玉も見られる。その後古墳時代に入る頃から次第に減少、古墳時代の後期には途絶える。肥塚が行ってきた従来の分析調査では、弥生時代の遺跡から出土する青紺色のカリガラスには、例外なく数%に及ぶマンガンが含有しており、これは中国や韓国で出土する同色のカリガラスの特徴とも一致している。このような高いマンガンを含む着色用コバルト鉱石は中国産の特徴とされ、これらのカリガラスが中国で製造されたと考えられる根拠となっている。(肥塚1996・1997)

ソーダ石灰ガラスは、弥生時代の後期以降、古墳時代にかけて盛行し、特に高アルミナ含有のタイプは、黄色、黄緑、赤茶など、それまでのカリガラスで知られていた青系統とは異なる多彩な色調を特徴としている。その組成もやはり西方のものとは異る「アジアのガラス」である。これに対し今回は出土していないが、同じソーダ石灰ガラスでも、アルミナの少ない青色系統のものは西方のものと組成の共通性が見られる。(肥塚1996)

今回の調査結果はこれまでの研究成果を特に逸脱することなく、弥生時代後期のガラスの様相を裏付けるものであった。ただ、本調査で1点のみ出土した赤茶色の管玉は、市内西区今宿五郎江遺跡4次調査(榎本1996) でやはり1点、よく似た外観のものが出土している他に類例を確認しておらず、特に分析によって組成が確認されたのは初めてと思われる、めずらしい資料である。今後、類例及びその組成分析、更には同じ色調の小玉との比較検討などにより、流通経路や系譜を明らかにできればと考える。

いずれにせよ、今回は完全非破壊による調査であったが、精密な組成の定量値を求めることは無理でも、これまでに行われてきた調査成果と比較検討することで、ガラスの種類を知るという目的は十分に果たすことが出来た。また弥生時代の先進地であった北部九州では、この時代のガラス資料が数多く出土しているものの、組成の分析データはそれほど出揃っているとはいえず、データの蓄積が行えた点でも意義があるものと考える。福岡市内でも弥生時代のガラス製品は数多く出土しており、今後も各装置を有効に活用し、ガラス文化の解明を進めて行きたい。

◆辰砂鉱石

次に辰砂についてであるが、この種の資料は前原市の三雲遺跡で二粒が発見されて以来、福岡市博多区の比恵遺跡群57次調査において、多量に出土し注目を集めた (長家1997)。さらに未報告であり詳述は避けるが、同じ比恵遺跡群の69次調査地点でも少量ながら出土が確認されており[7]、現時点で4例目の発見となる。遺物としての辰砂については、比恵遺跡57次調査の報告で本田光子氏が詳しく述べているので、ここでは割愛させていただく (本田1997)。

本来この様な資料が一粒だけ単独で存在しても、よほど注意していなければ見逃されるか、ただの変わった色の石、あるいは土として採取されない可能性が高い。三雲遺跡の例では調査担当者の柳田康雄氏が、中国で辰砂原石を実見した後の調査で発見されたと伝え聞く。比恵遺跡57次調査では、ピット内に

多量に固まって異様な色を発色していたことで発見された。同じ比恵遺跡69次調査の場合は57次調査と同じ担当者で、過去に辰砂を熟覧していたことで残された。今回もガラス小玉が出土し、「変わった色の微小遺物」に意識が集中していたことで取り上げられたもので、奇跡的といっても過言ではなく、遺物として残した各調査担当者の卓見には、驚かされるばかりである。

赤色顔料の研究意義については今更述べるまでもないが、その原料である辰砂鉱石のうち、特に粒状を呈する「砂辰砂」あるいは「芋辰砂」は近年急速に出土例が増えつつあり、弥生時代の社会や流通、国際関係の解明に非常に大きな役割を果たす遺物として注目されるものである。本田氏によれば、辰砂自体は国内にも鉱脈の存在が知られているが、いずれも母岩中に薄く層状に貼り付いた状態で産するものが多く、本資料のように塊で存在する形態の類似から、推定にも至らないとしながらも、その出自を中国大陸に求める可能性も指摘されている。このような辰砂が果たして弥生時代の「クニ」の中心部やその辺縁部のみに存在するのか、あるいは普遍的に原石の状態で各地に流通していたのか、また時代的にも弥生時代に限られるのか現時点では不明であるが、更に、この「赤黒く輝く礫(つぶて)」の認識を各地に広めることで類例も増え、そのあり方が明らかになるものと考える。

最後になりましたが、今回調査・報告の機会を与えていただいた発掘調査担当者の小林義彦氏、ガラスについて有益なご教示をいただいた藤田等氏に末筆ながら感謝申し上げます。

註

1）・2）福岡市埋蔵文化財センター

3）福岡市埋蔵文化財課調査員

4）奈良国立文化財研究所

5）小玉の中でも特に小型のものは粟玉と慣習的に呼ばれているが、どの程度の大きさから粟玉とするかの明確な規定はなく、感覚的なものである。ただ弥生時代後期の北部九州では、黄緑色の小玉は径2㎜前後に収まる極小のタイプが多く、慣習に従い粟玉と表記している。

6）ただし回折条件によっては、特定のX線反射指数の面間隔だけが検出され、同定が困難なものもある。また試料の設置条件によりd値に大きな誤差を伴う事もある。

7）2000年度報告予定

参考文献

榎本義嗣1996『今宿五郎江遺跡Ⅲ－第4次調査報告－・徳永A遺跡Ⅲ－第3次調査報告－・丸隈山遺跡Ⅰ－第1次調査報告－』福岡市埋蔵文化財調査報告書第479集　福岡市教育委員会

肥塚隆保1996「化学組成から見た古代ガラス」『古代文化』第48巻8号　財團法人古代學協会

肥塚隆保1997「カルメル修道院内遺跡出土ガラスの分析調査」『カルメル修道院内遺跡4』－カルメル修道院内遺跡第5次調査－福岡市埋蔵文化財調査報告書第504集　福岡市教育委員会

小瀬康行1987「管切り法によるガラス小玉の成形」『考古学雑誌』第73巻第2号　日本考古學會

長家伸編1997『比恵遺跡（24）』－第57次調査報告－　福岡市教育委員会

藤田等1994『弥生時代ガラスの研究』名著出版

本田光子1997「比恵遺跡57次調査出土の辰砂について」『比恵遺跡（24）』－第57次調査報告－　福岡市教育委員会

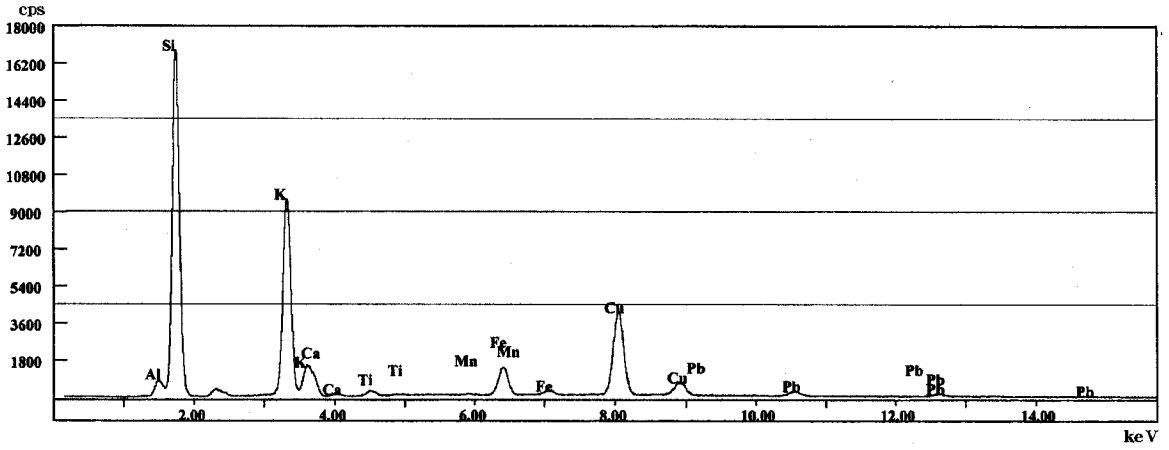


Fig. 2　淡青色カリガラスの蛍光X線分析結果

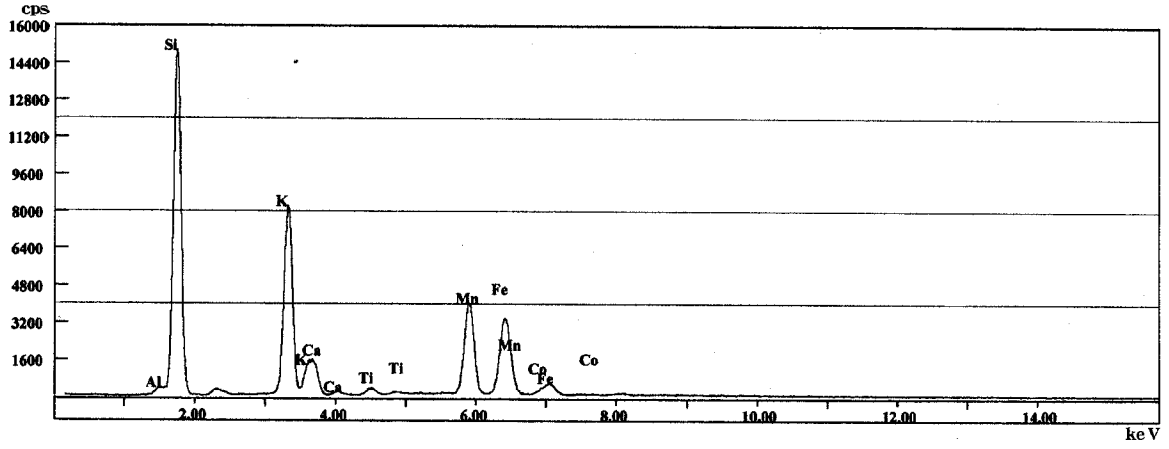


Fig. 3　青紺色カリガラスの蛍光X線分析結果

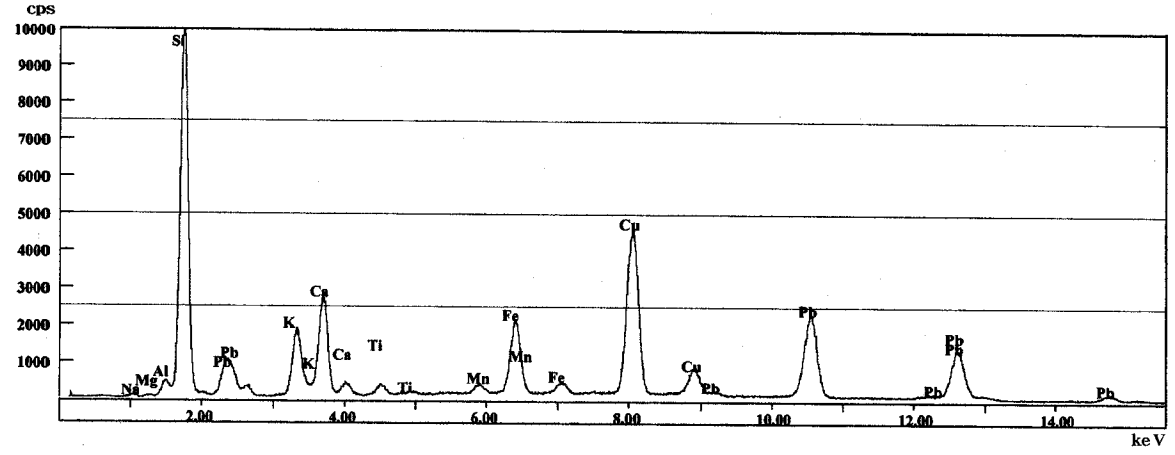


Fig. 4　黄緑色ソーダ石灰ガラスの蛍光X線分析結果

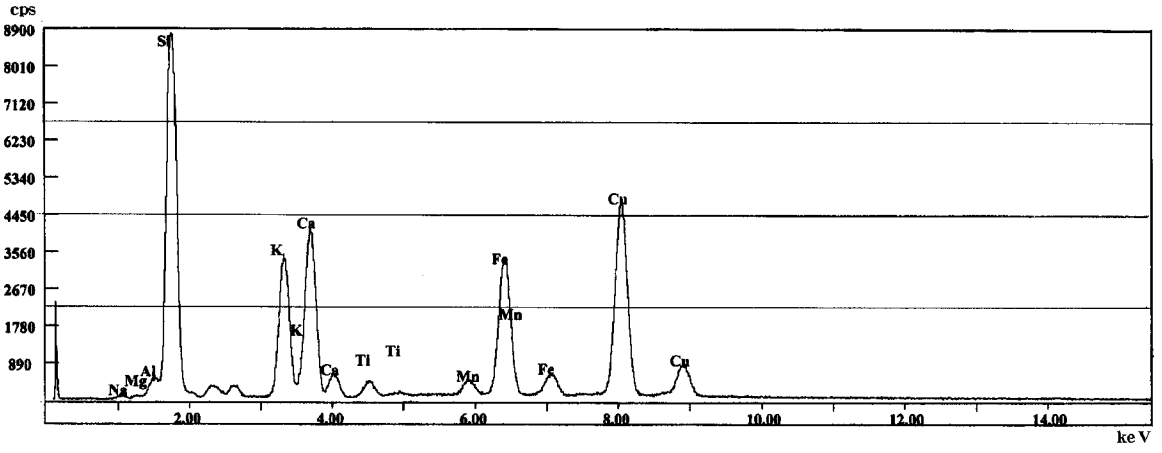


Fig. 5　赤色管玉の蛍光X線分析結果

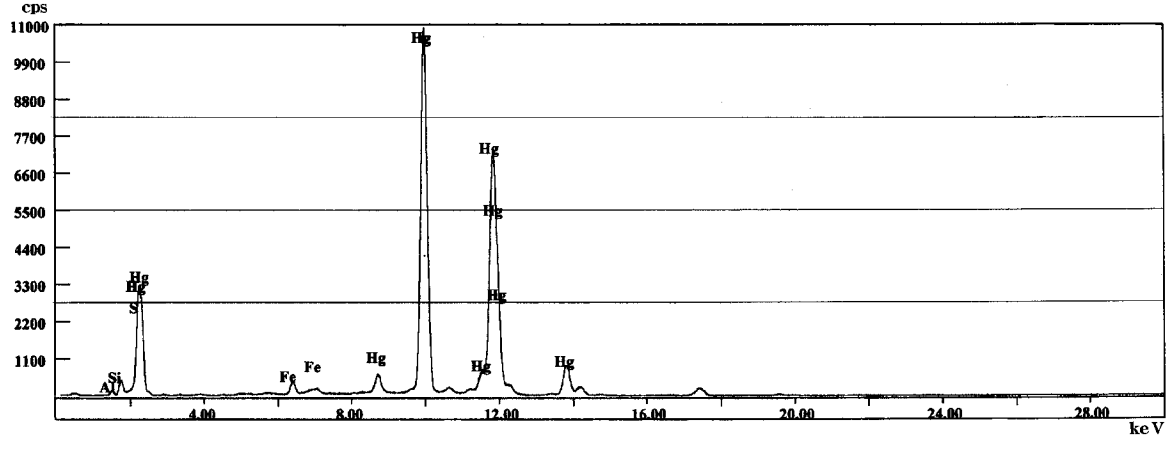


Fig. 6　辰砂鉱石の蛍光X線分析結果

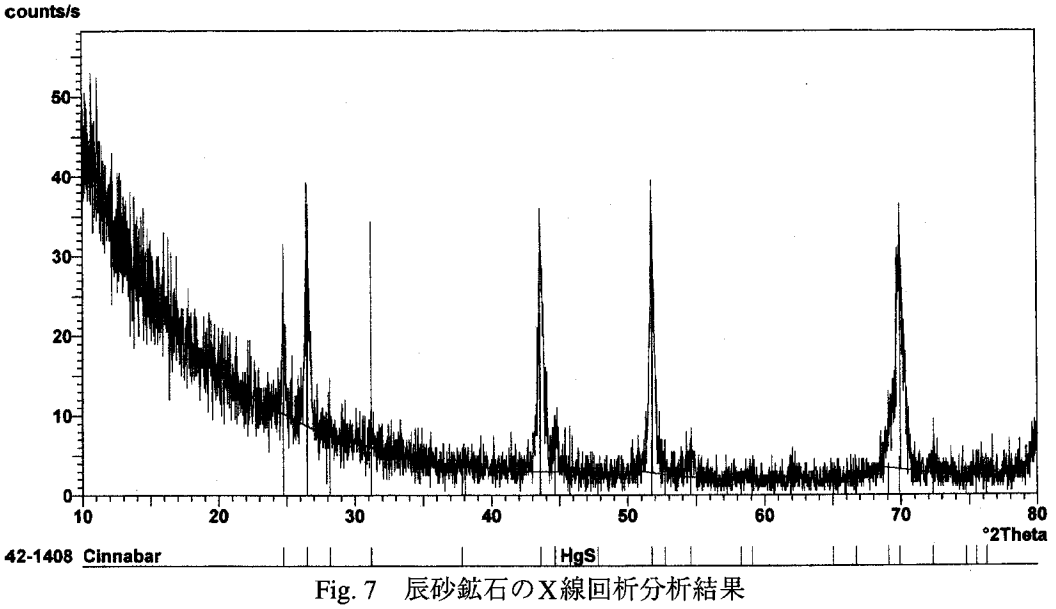
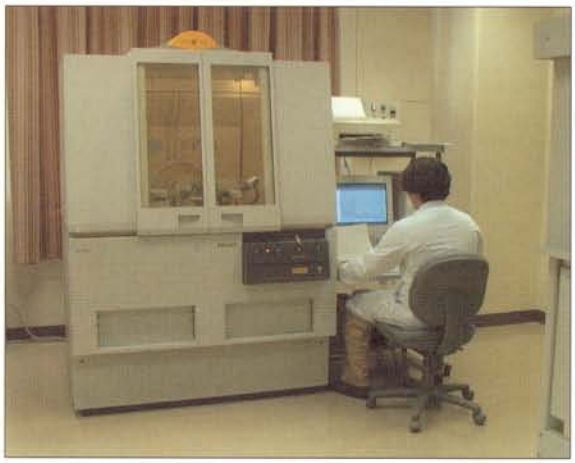


Fig. 7　辰砂鉱石のX線回析分析結果

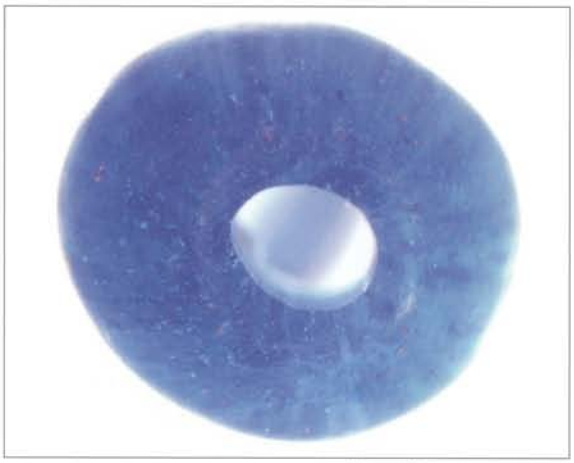
PL. 1　蛍光X線分析装置

PL. 2　同左　部分

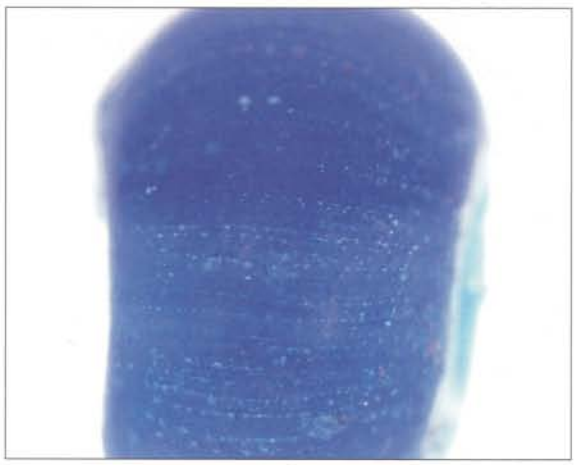


PL. 3　X線回析装置

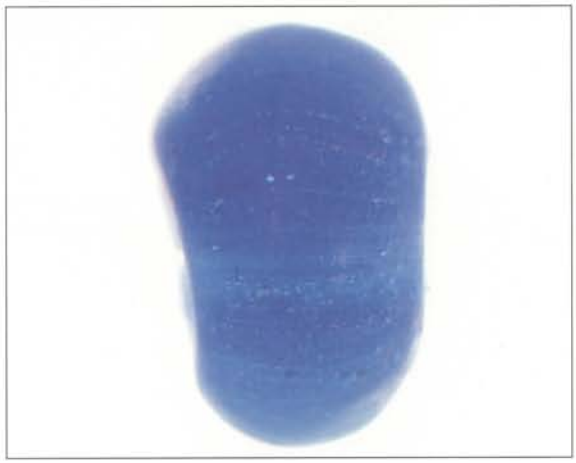
PL. 4　同左　部分



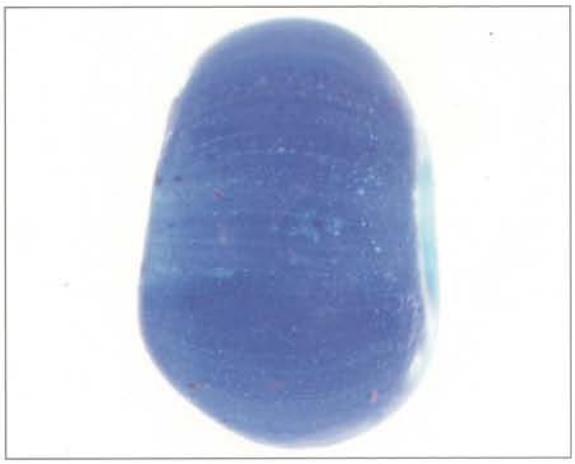
PL. 5　No. 29　約14倍



PL. 6　同左　約21倍

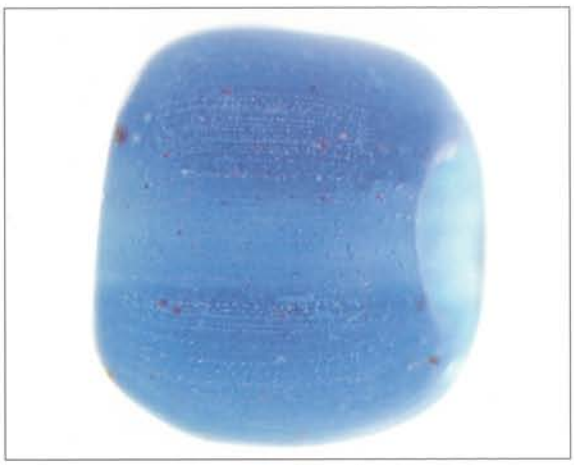


PL. 7　No. 29　約13倍



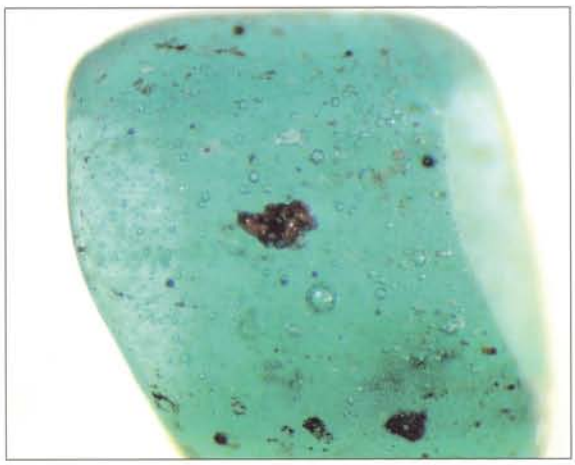
PL. 8　同　左

PL. 9　No. 76　約14倍



PL. 10　同　左

PL. 11　No. 76　約28倍

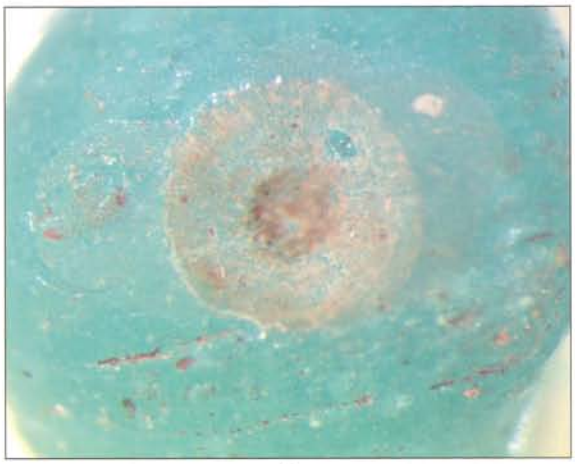


PL. 12　No. 46　約17倍

PL. 13　No. 32　約12倍

PL. 14　No. 109　約8倍

PL. 15　No. 109　約8倍

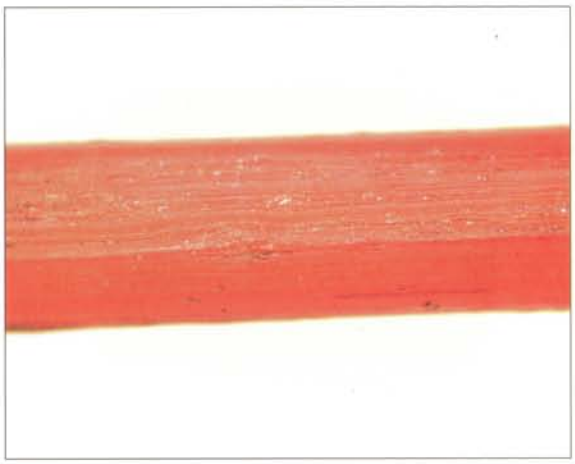


PL. 16　同左　約16倍

PL. 17　No. 36　約16倍

PL. 18　同左　約32倍

PL. 19　No. 87　約18倍



PL. 20　No. 110　約7倍

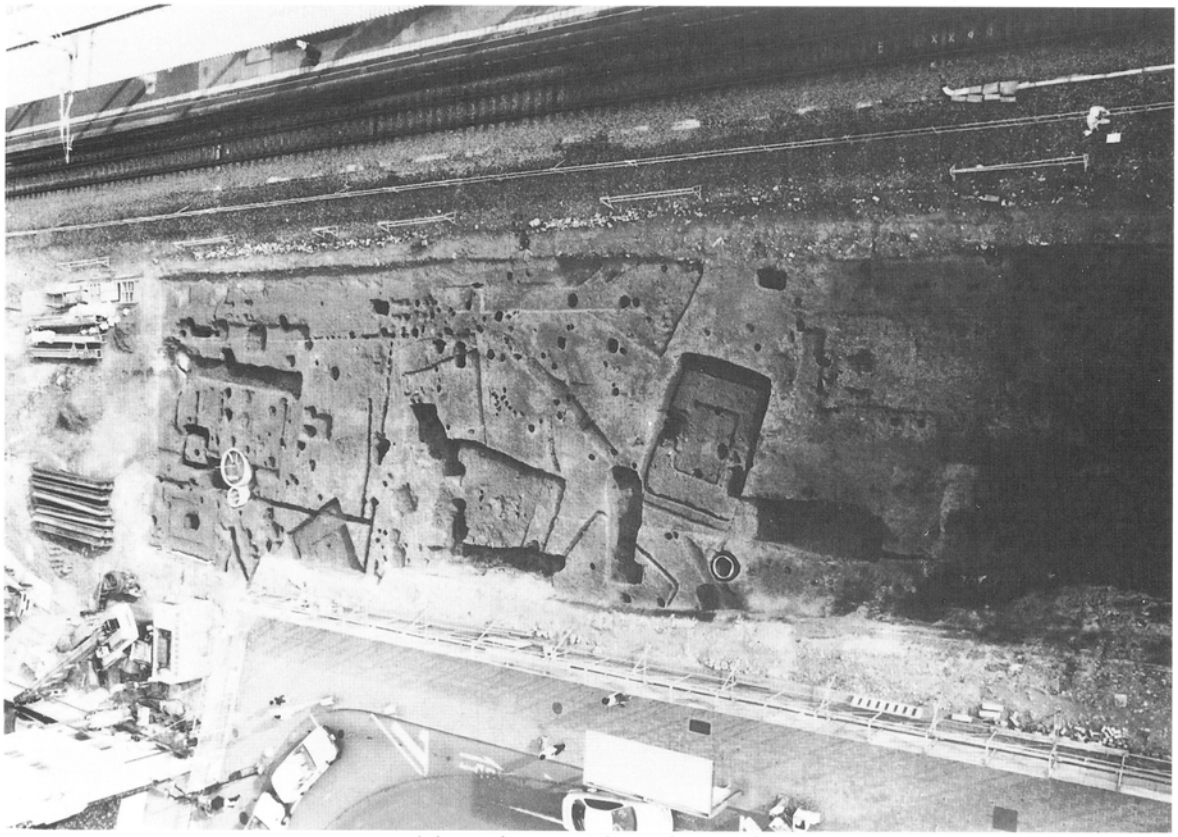
PL. 21　No. 110　約7倍

PL. 22　同左　反対面

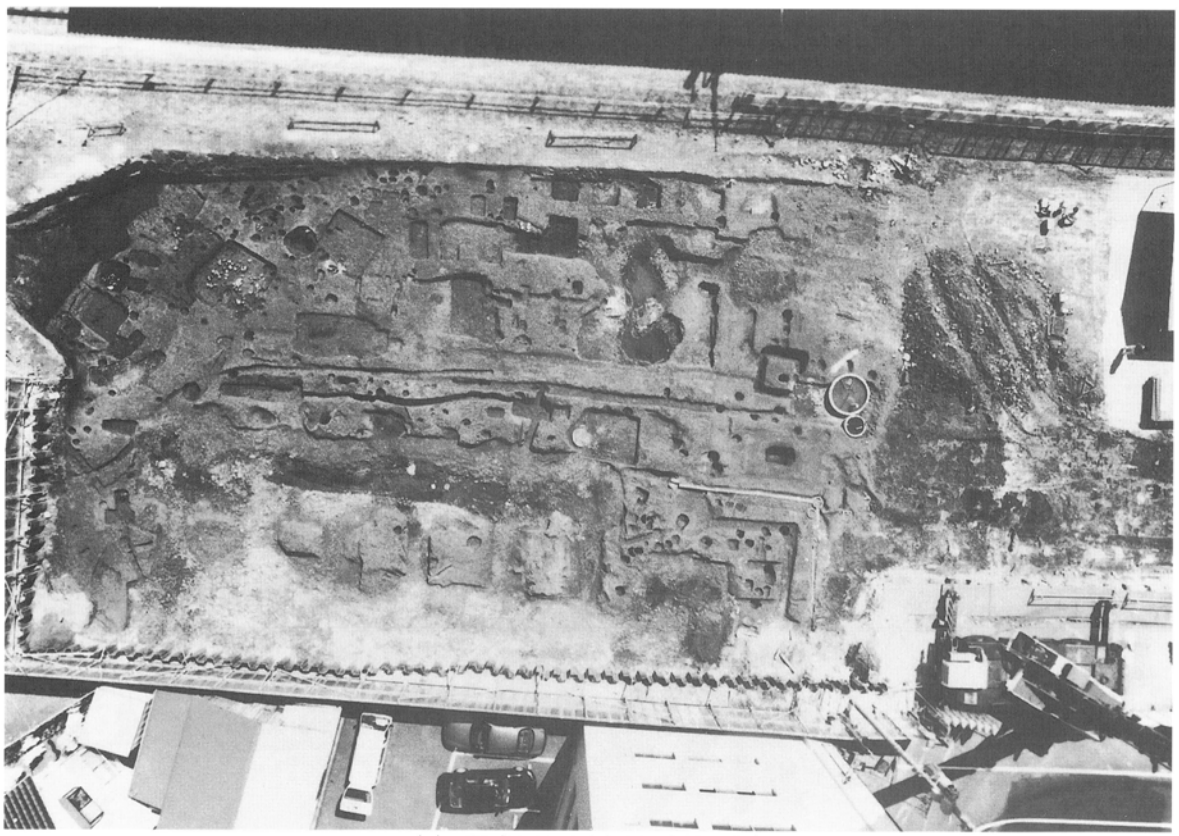
PL. 23　辰砂鉱石　約８倍

PL. 24　同左　反対面

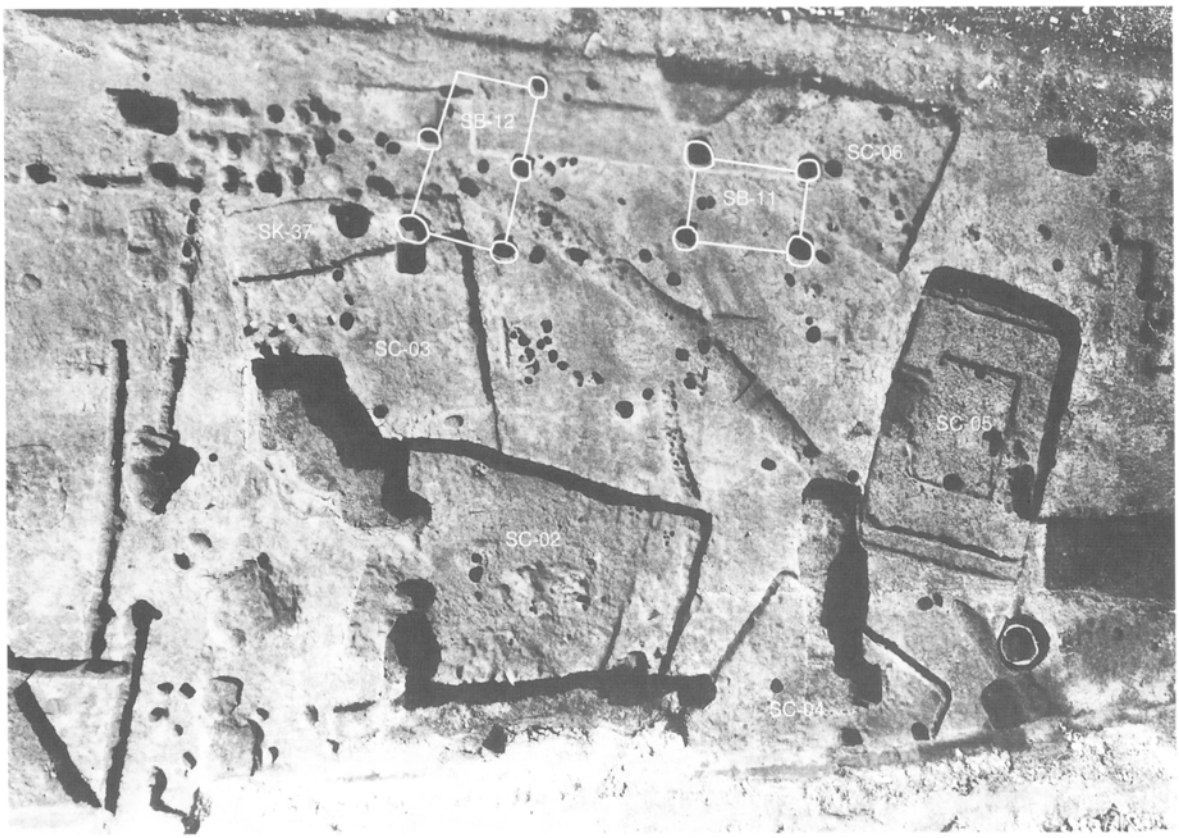
PLATES



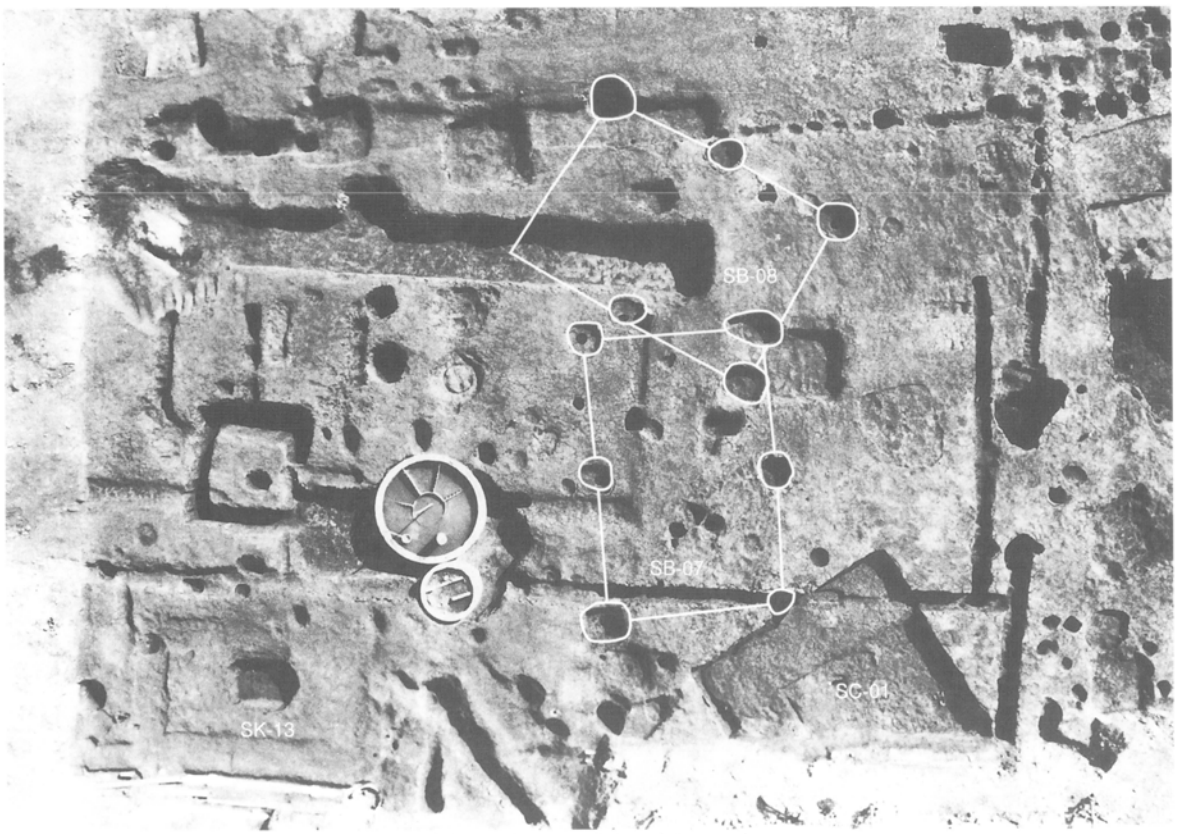
(1) 調査区Ⅰ区全景（北より）



(2) 調査区Ⅱ区全景（東より）

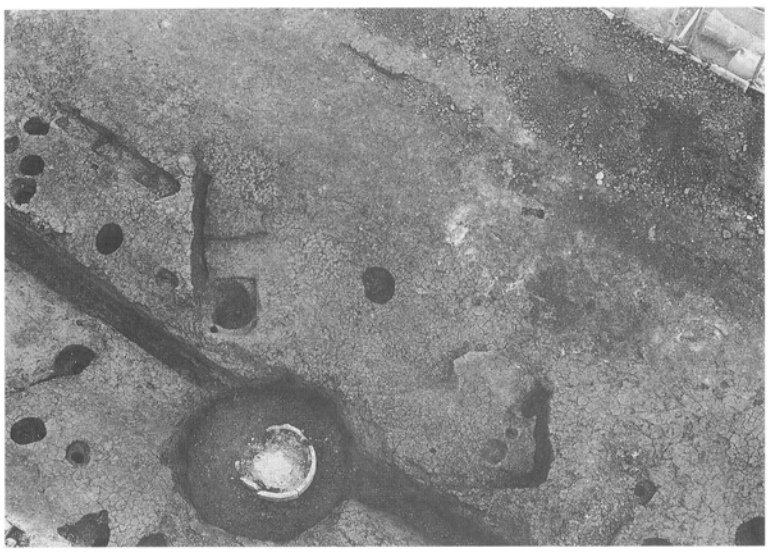


（1）2～6号住居跡全景（東より）

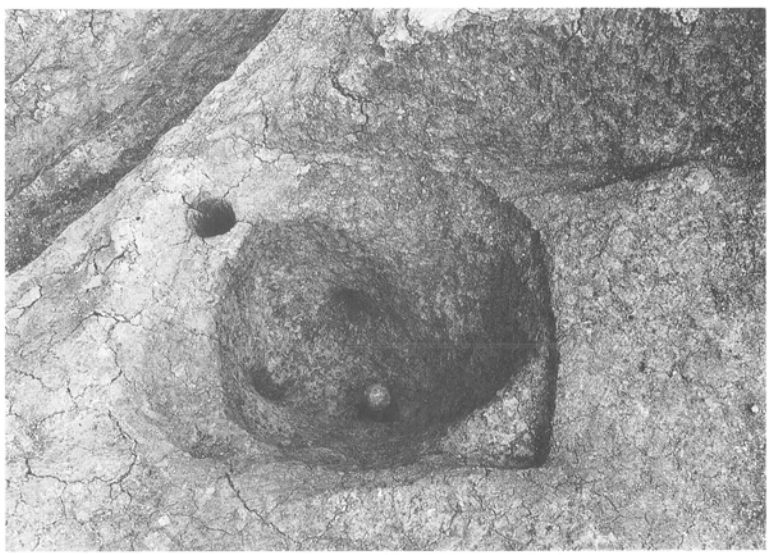


（2）調査区中央部（東より）

(1) 1号住居跡西半部（東より）



(2) 1号住居跡東半部（東より）

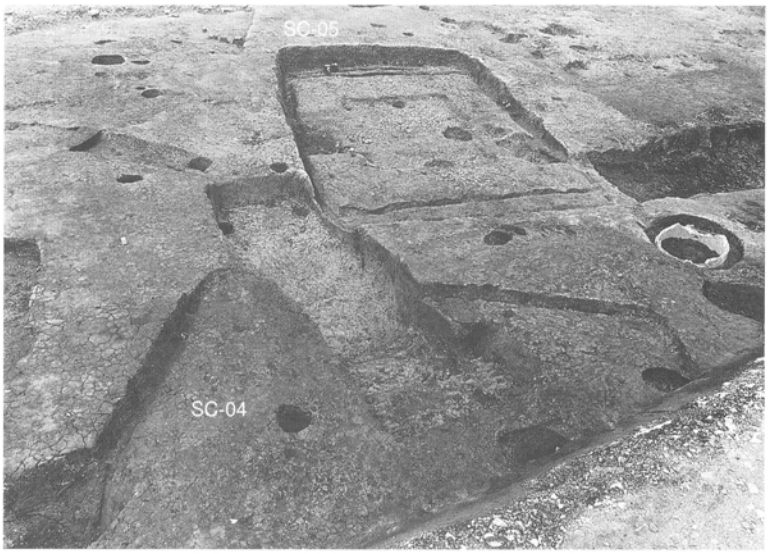


(3) 1号住居跡内土壙（北より）

（1）2・3号住居跡全景（西より）

（2）2号住居跡全景（西より）

（3）3号住居跡 全景（西より）



(1) 4・5号住居跡 全景（東より）

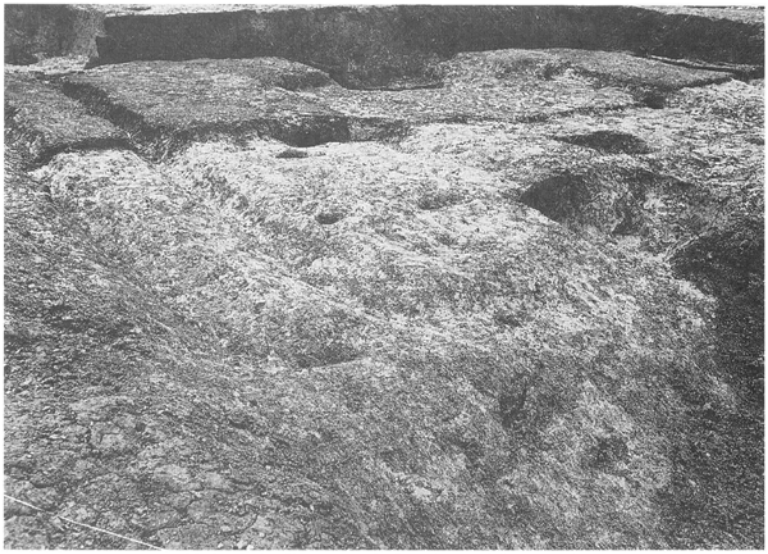
(2) 4号住居跡全景（東より）

(3) 5号住居跡全景（東より）

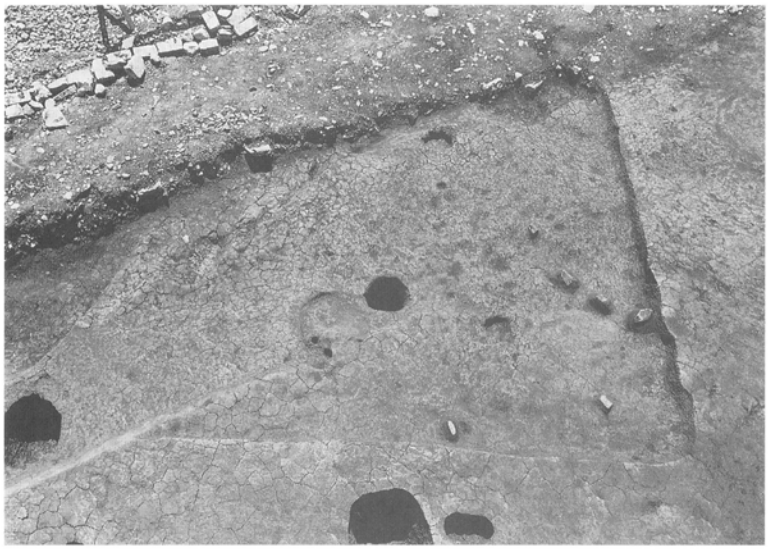
(1) 5号住居跡全景（南より）

(2) 5号住居跡北壁遺物出土状況（南より）

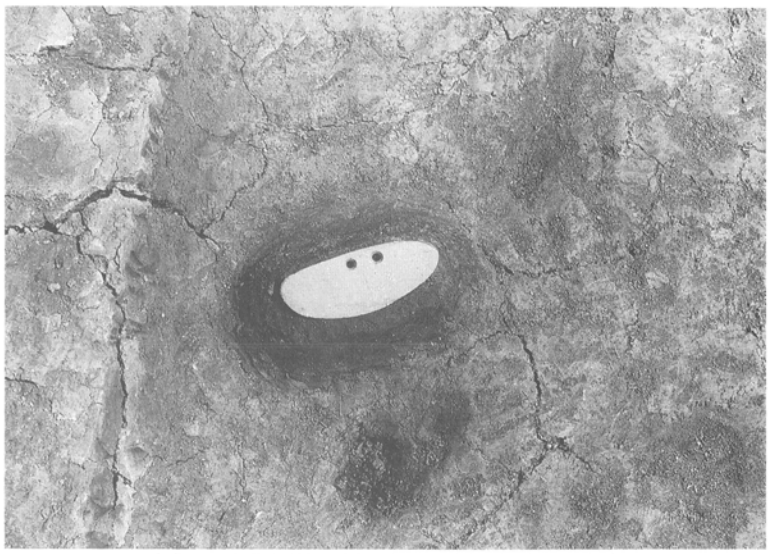
(3) 5号住居跡カマド内遺物出土状況（北より）



（1）5号住居跡貼床断面（南より）

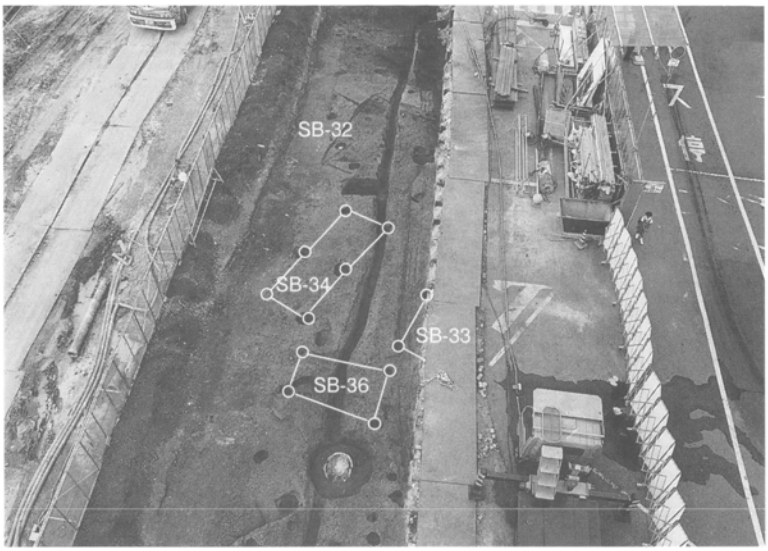


（2）6号住居跡全景（東より）



（3）6号住居跡石庖丁出土状況（北より）

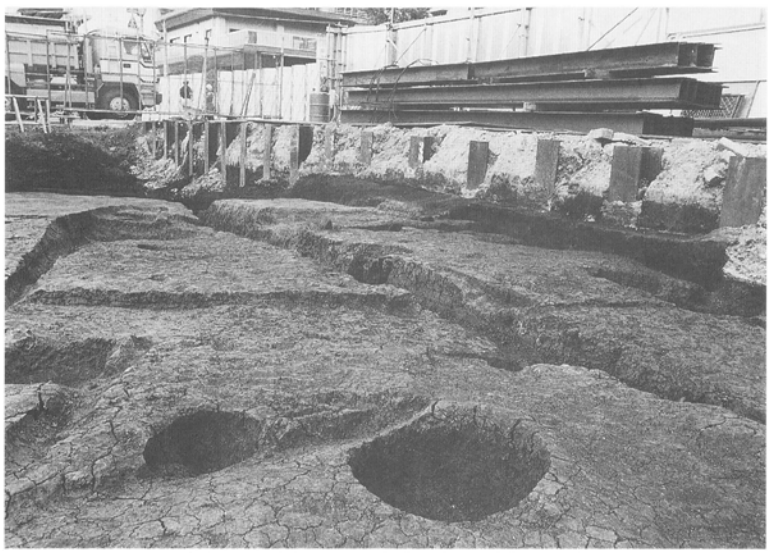
(1) 17号住居跡全景（南より）



(2) 32号住居跡・33・34・36号建物跡全景（南より）

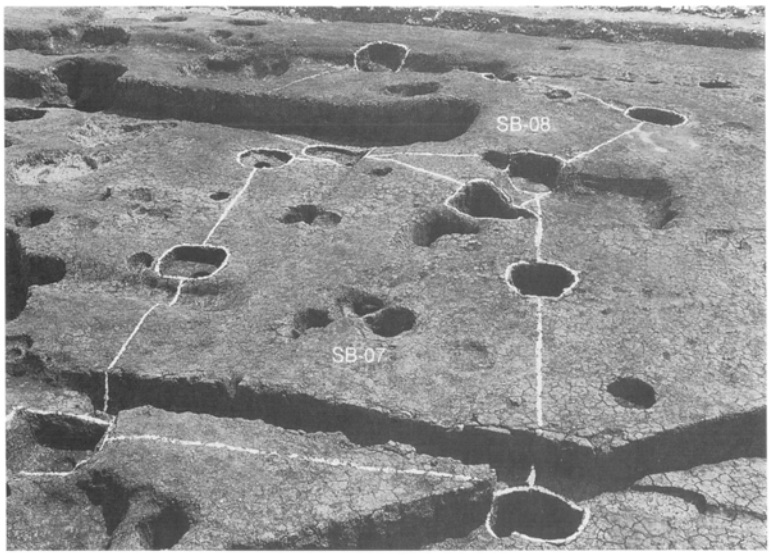
(3) 32号住居跡全景（南より）

（1）32号住居跡内土壙遺物出土状況（西より）

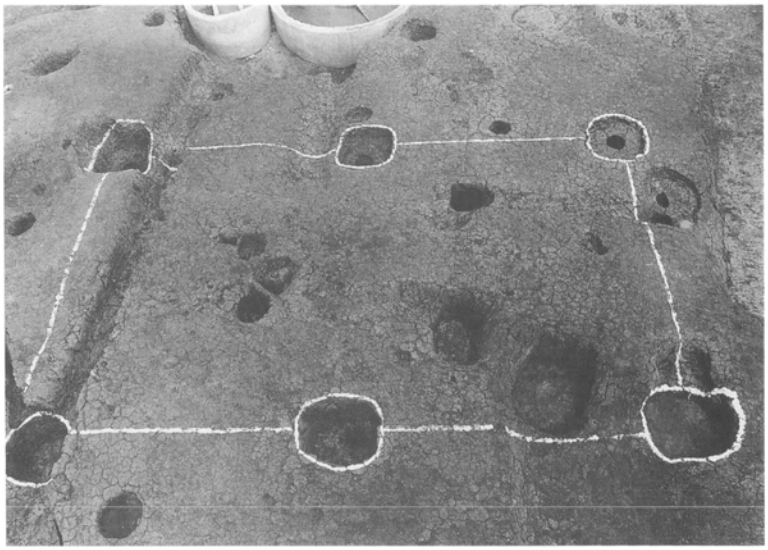


（2）32号住居跡貼床断面（南より）

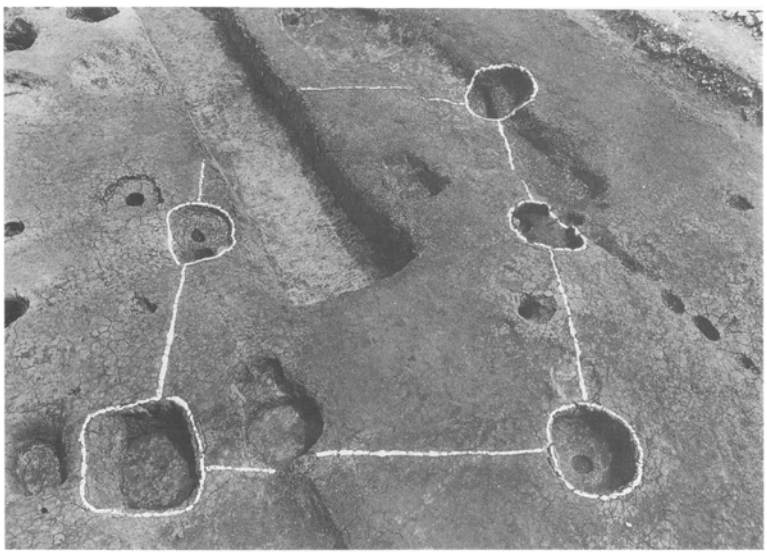
（3）32号住居跡炉跡断面（西より）



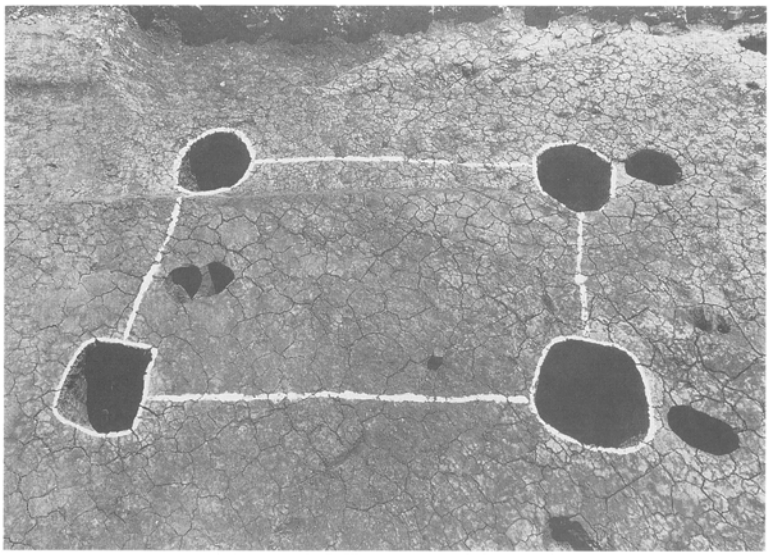
（1）7・8号建物跡全景（東より）



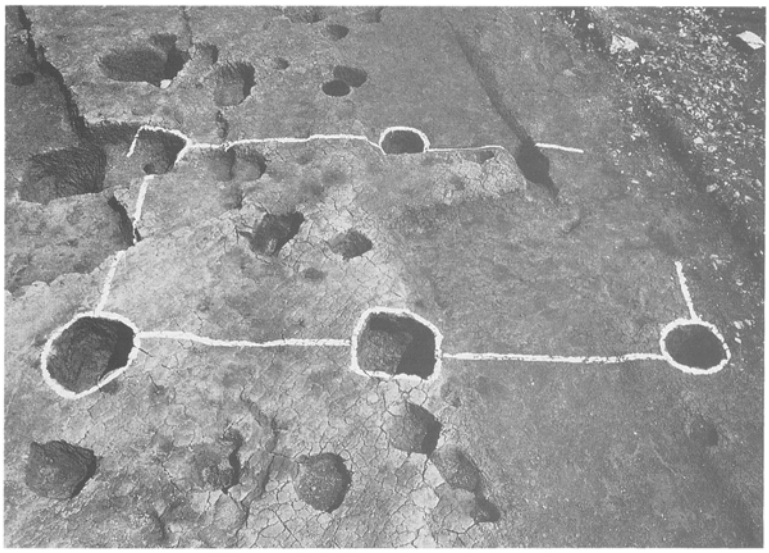
（2）7号建物跡全景（北より）



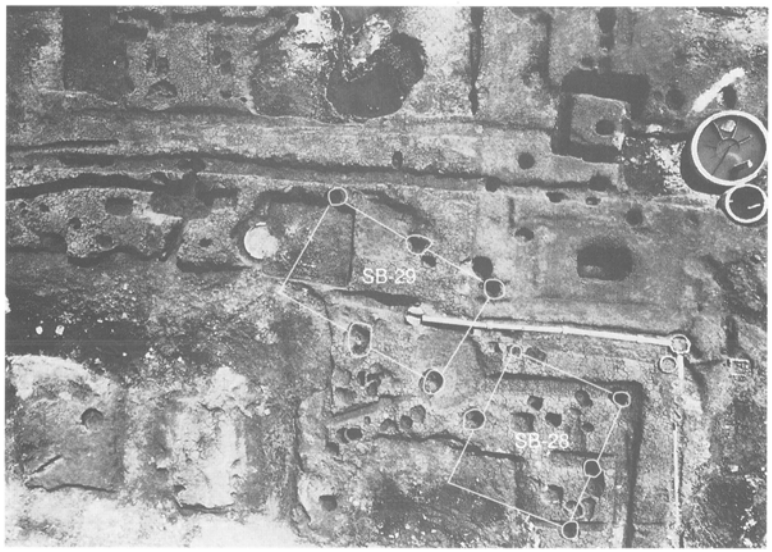
（3）8号建物跡全景（北より）



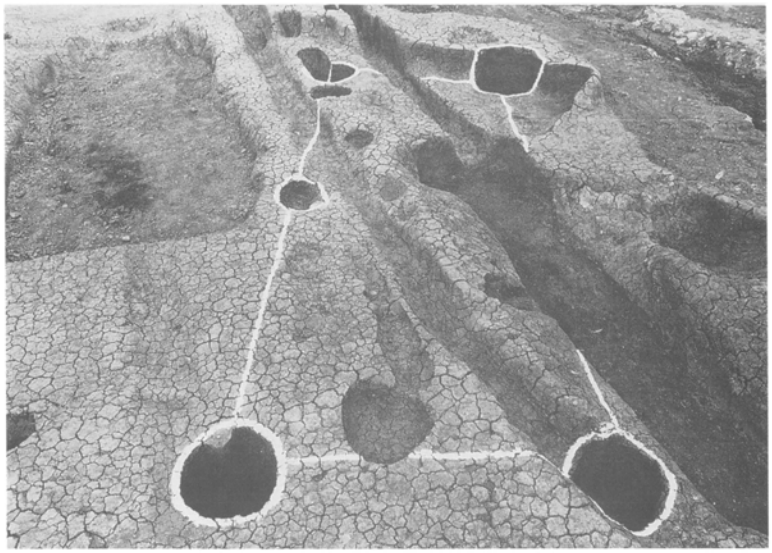
（1）11号建物跡全景（東より）



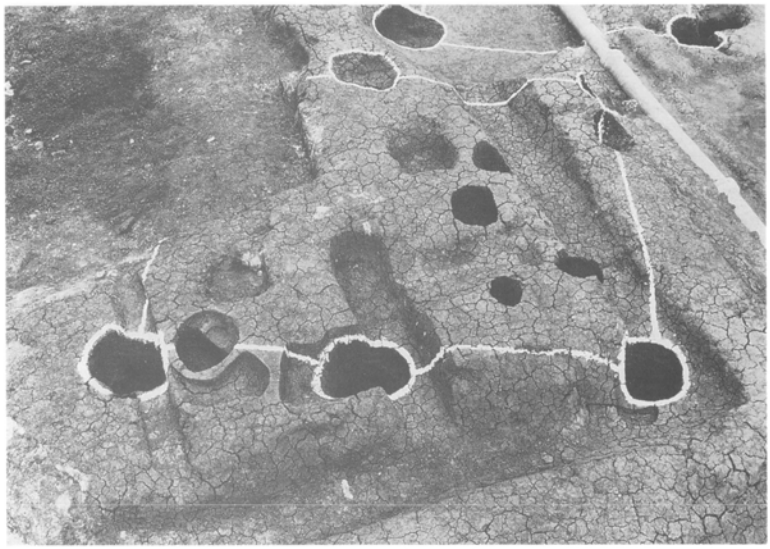
（2）12号建物跡全景（北より）



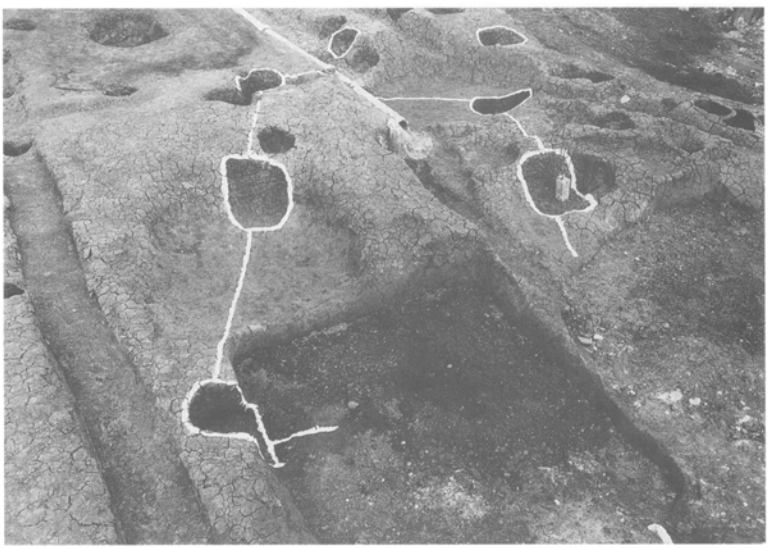
（3）28・29号建物跡全景（東より）



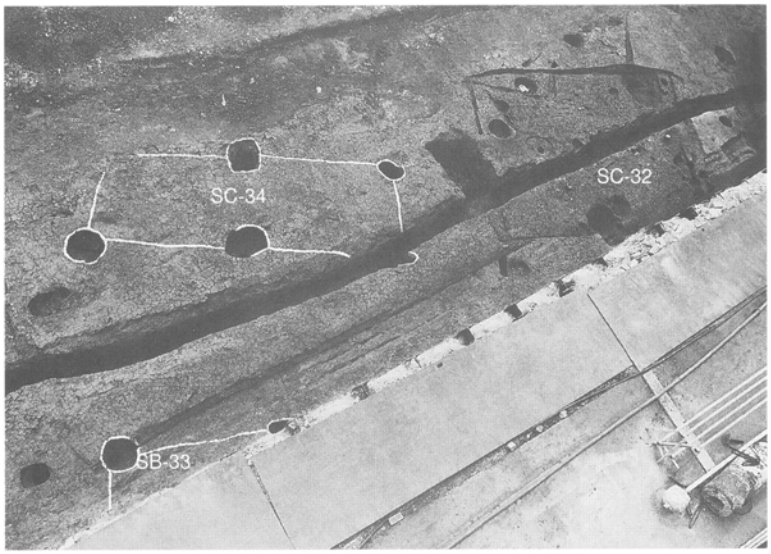
（1）27号建物跡全景（南より）



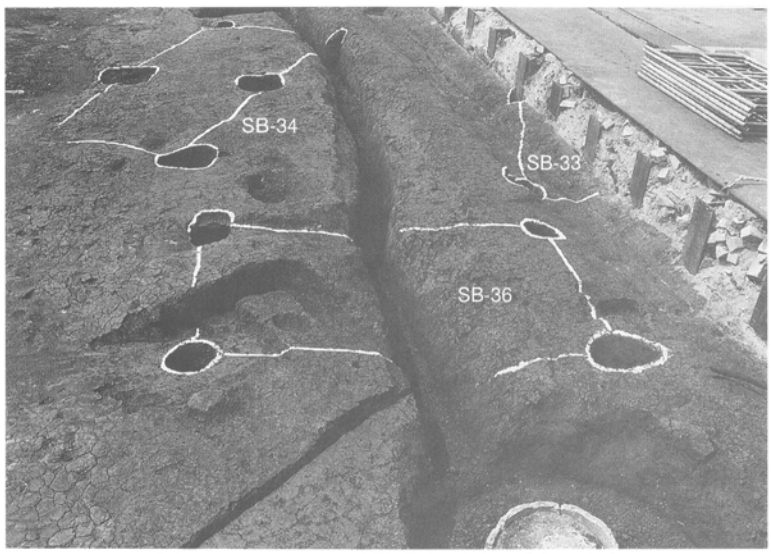
（2）28号建物跡全景（北より）



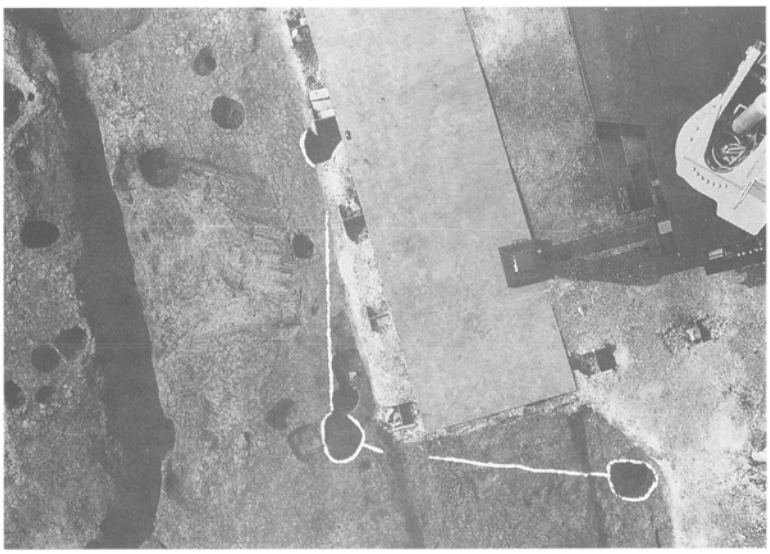
（3）29号建物跡全景（南より）



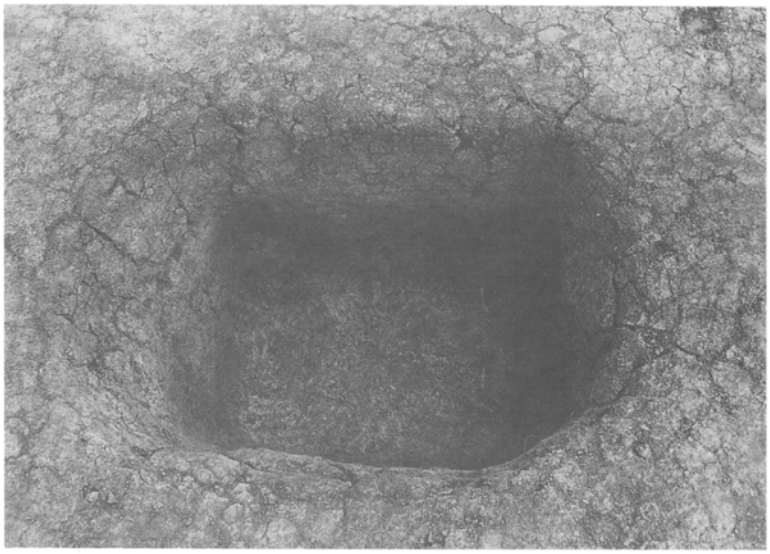
(1) 32号住居跡・33・34号建物跡全景（東より）



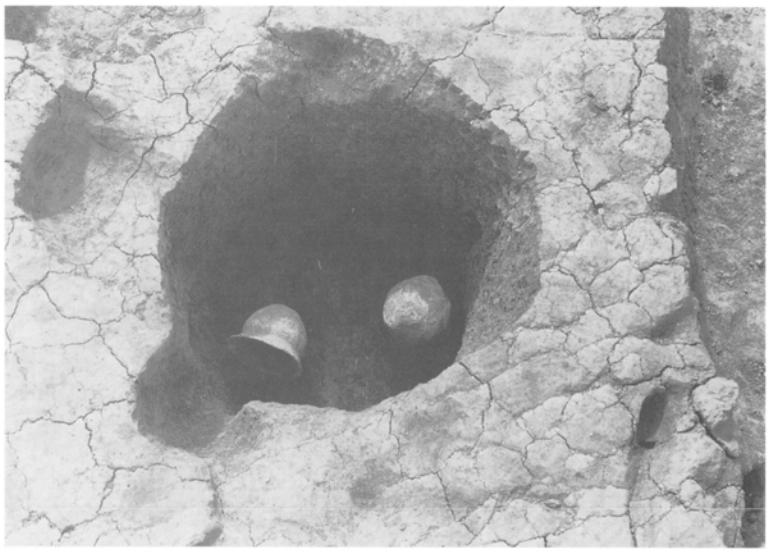
(2) 33・34・36号建物跡全景（南より）



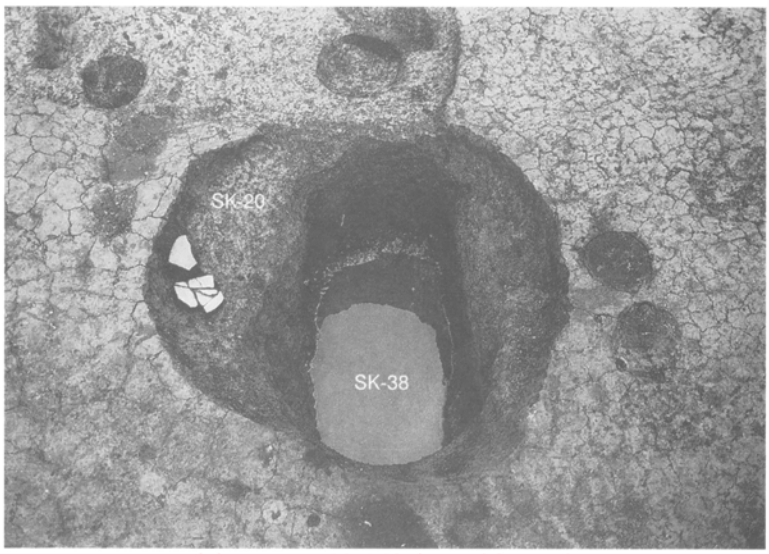
(3) 35号建物跡全景（南より）



(1) 13号土壙全景（西より）

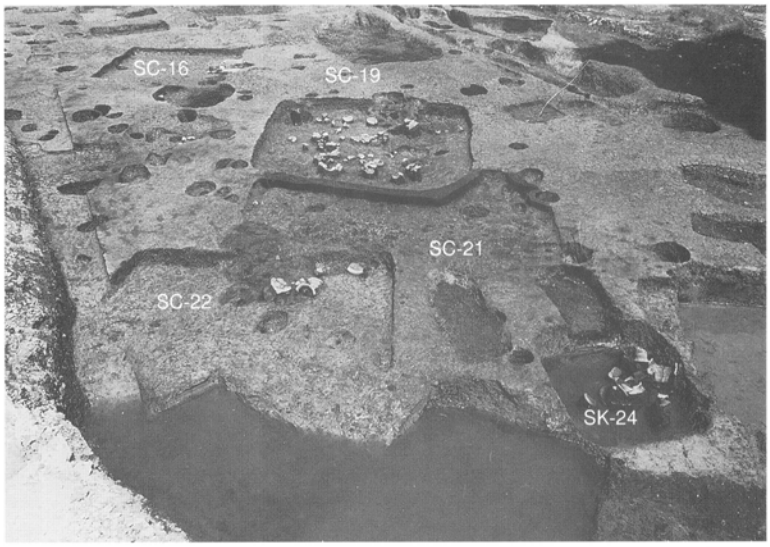


(2) 37号土壙全景（南より）

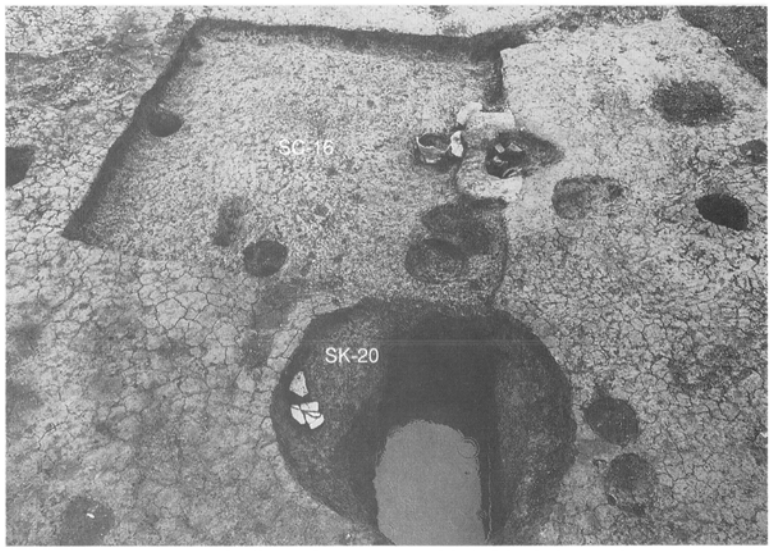


(3) 20・38号土壙全景（南より）

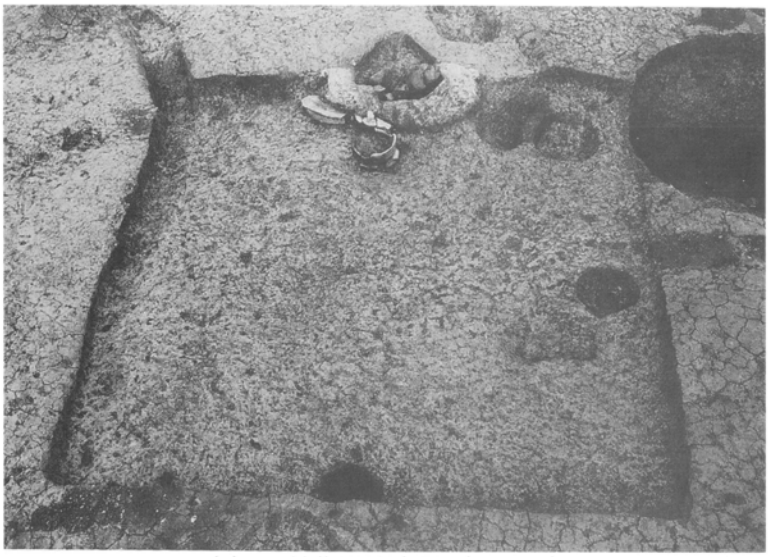
(1) 15～19・21～23・25号住居跡群全景（東より）



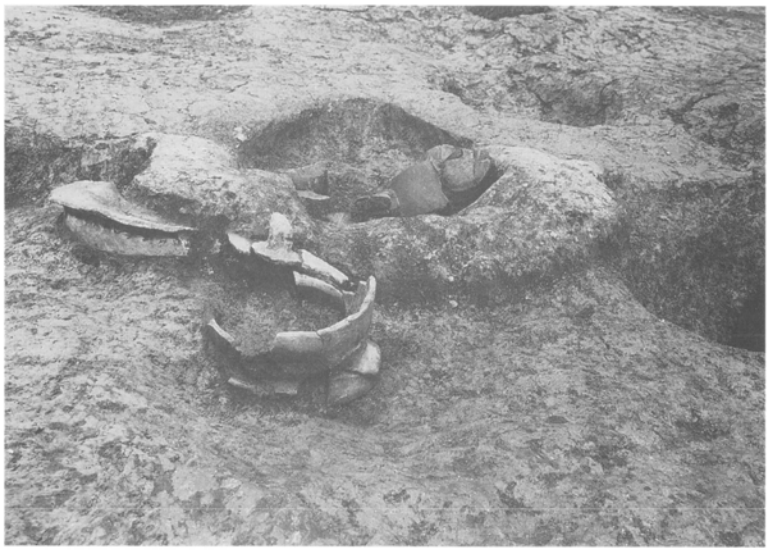
(2) 16・19・21・22号住居跡・24号土壙全景（南より）



(3) 16号住居跡・20号土壙全景（南より）

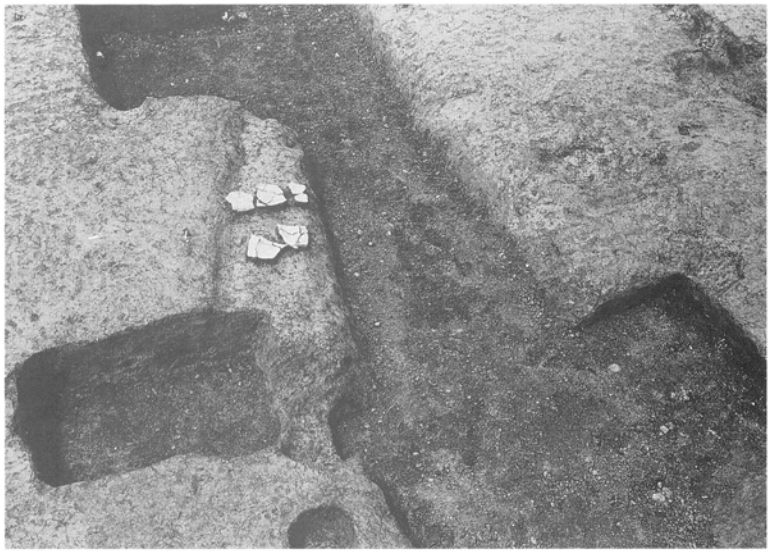


(1) 16号住居跡全景（西より）



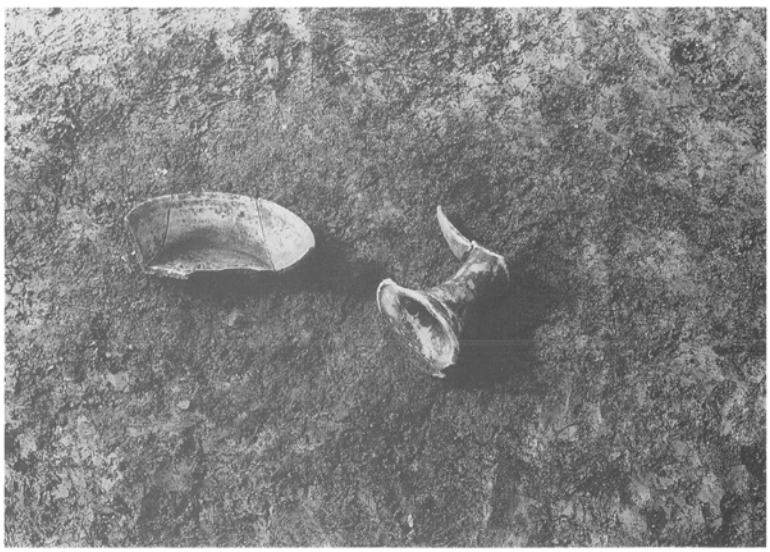
(2) 16号住居跡カマド全景（西より）

(3) 16号住居跡カマド横断面（西より）

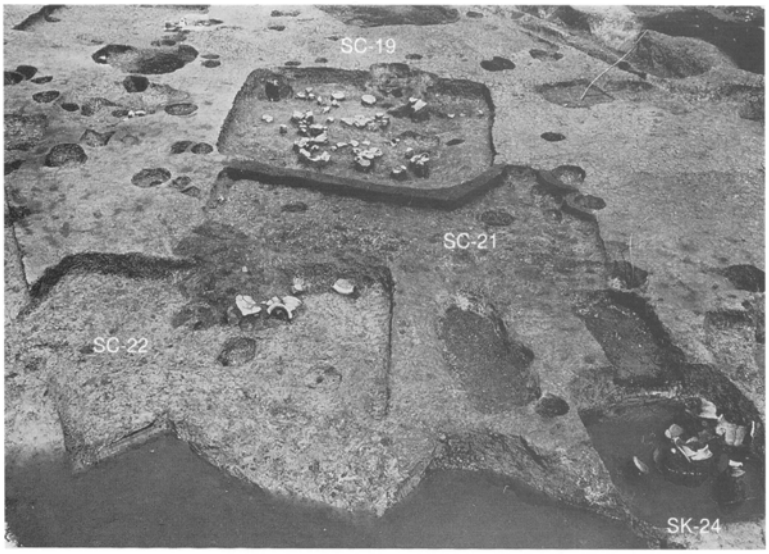


（1）15号住居跡全景（南より）

（2）18号住居跡全景（南より）



（3）18号住居跡遺物出土状況（南より）

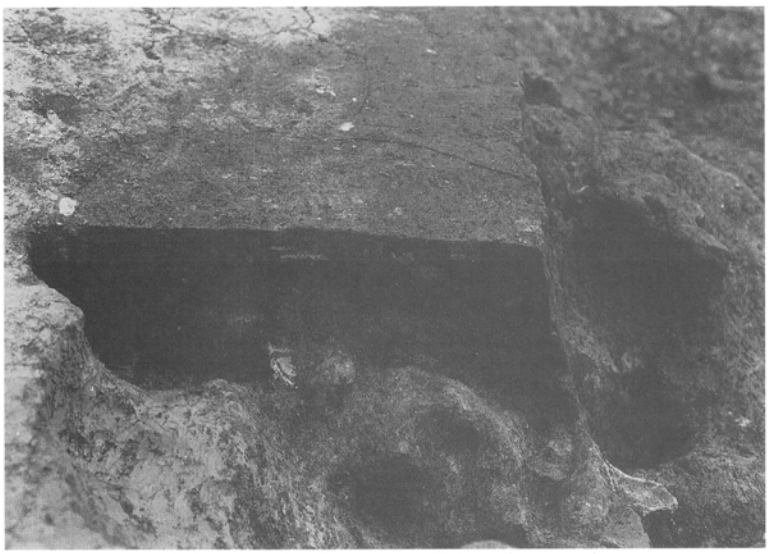


（1）19・21・22号住居跡・24号土壙全景（南より）

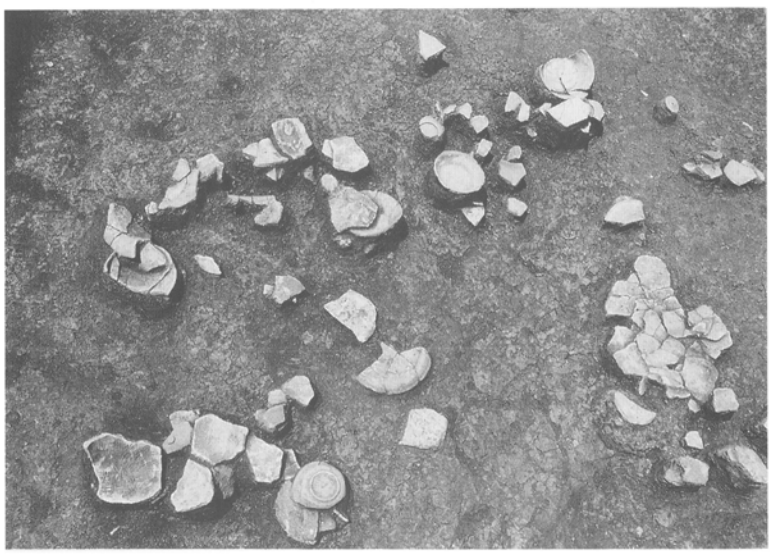
（2）19・21・22号住居跡全景（西より）

（3）19号住居跡遺物出土状況（南より）

(1) 19号住居跡カマド周辺遺物出土状況（西より）

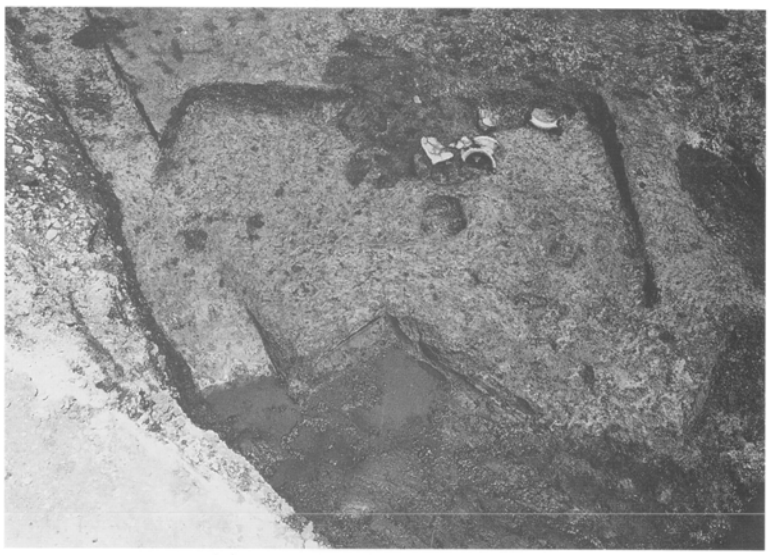


(2) 19号住居跡カマド断面（西より）

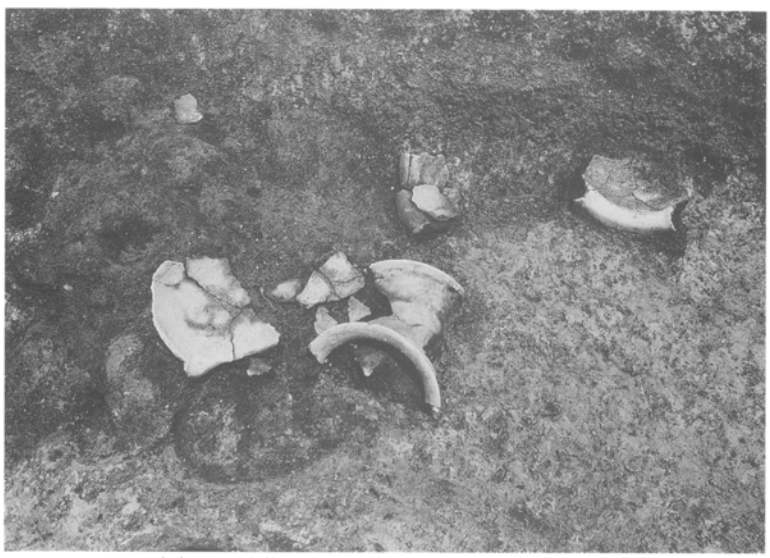


(3) 19号住居跡遺物出土状況（東より）

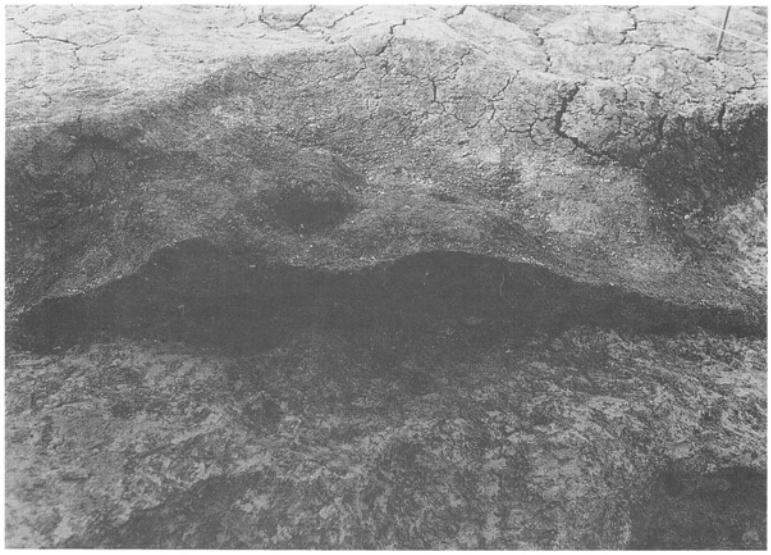
（1）21号住居跡全景（南より）



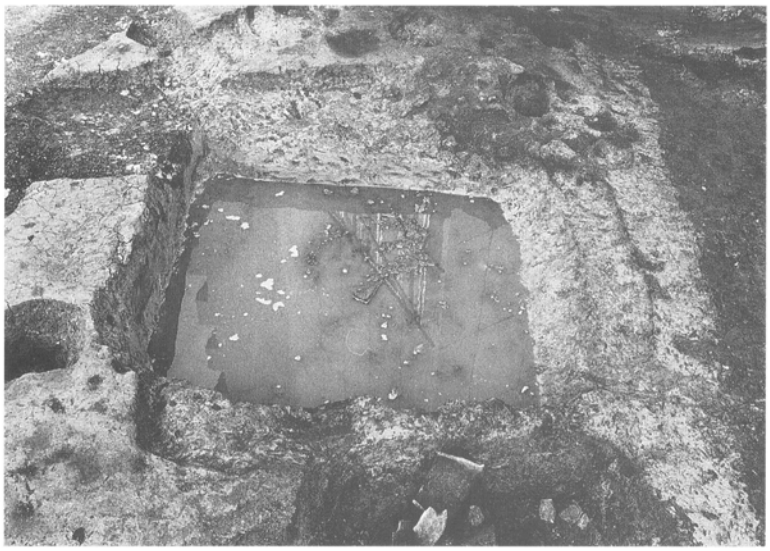
（3）22号住居跡全景（南より）



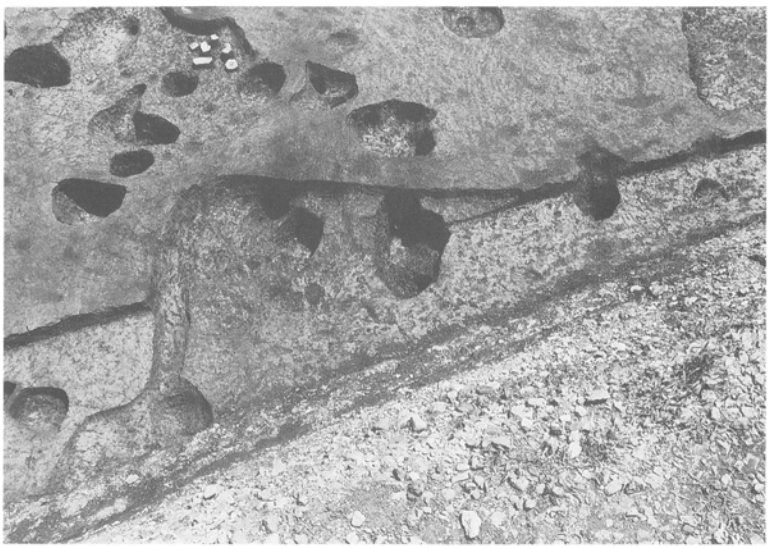
（3）22号住居跡遺物出土状況（東より）



（1）22号住居跡カマド横断面（南より）



（2）23号住居跡全景（西より）



（3）25号住居跡全景（南より）

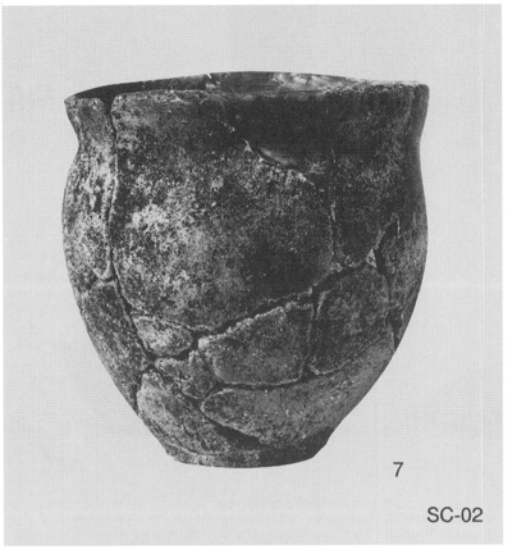
（1）23号住居跡・24号土壙全景（南より）

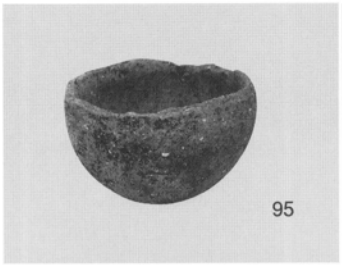
（2）24号土壙全景（南より）

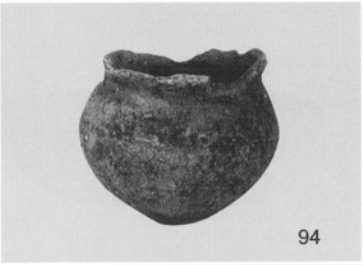
（3）26号土壙全景（南より）

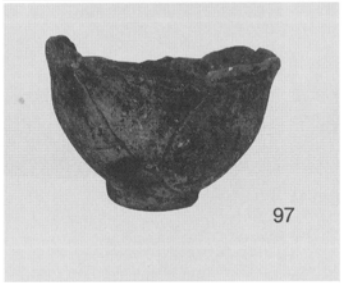
1
SC-01

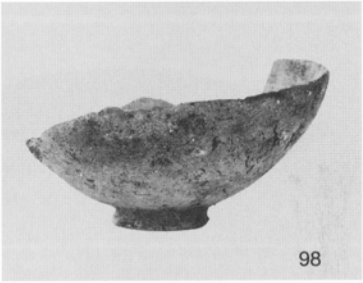
92
SC-04


7
SC-02

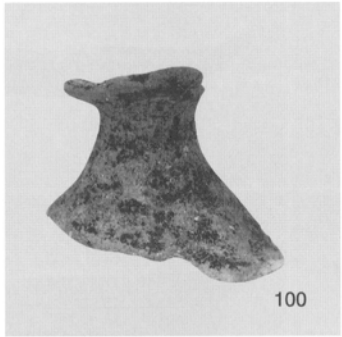

95

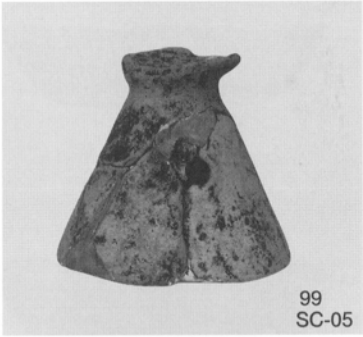

94


97

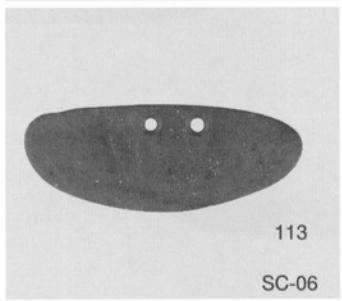

98

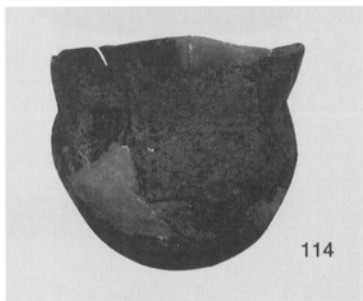
85

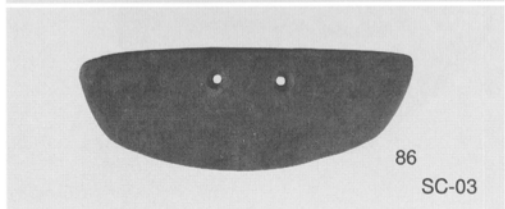

100


99
SC-05

83


113
SC-06


114

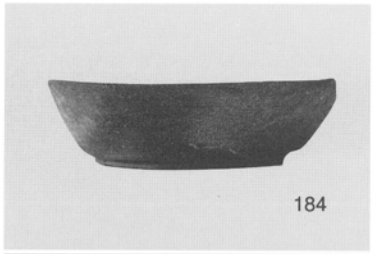

86
SC-03

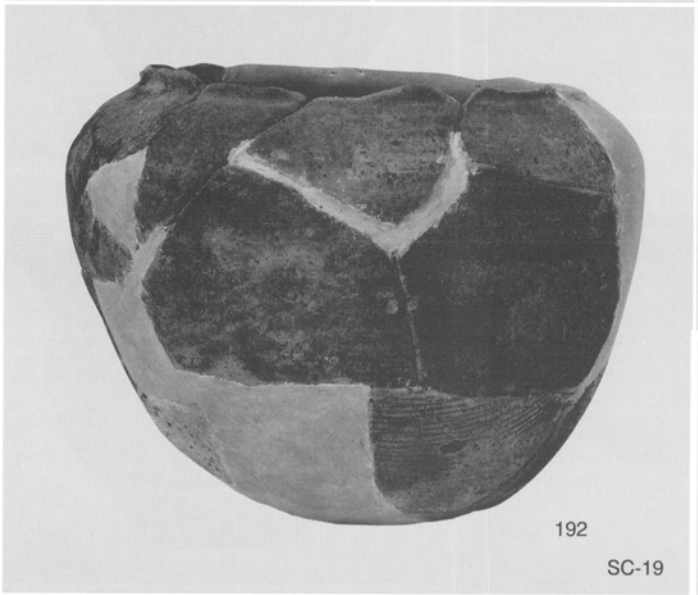
115
SC-32

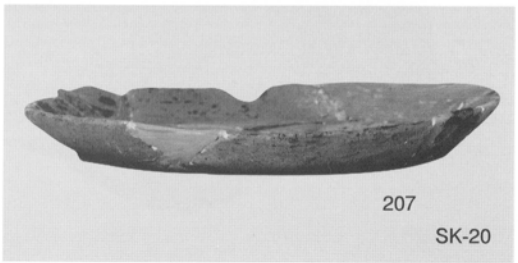
出土遺物１（１／３）

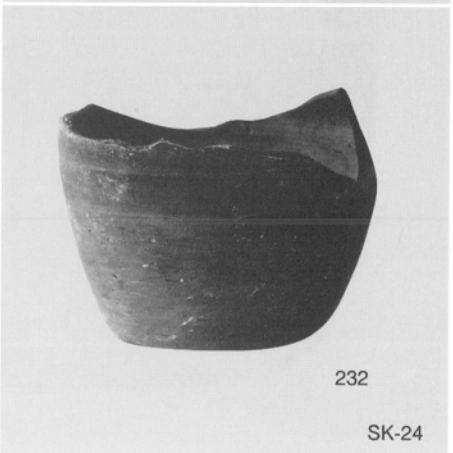
140
SC-15
143
148
SC-16
198
144
SC-18
166
164
181
155
173
182
177
176
178
153
171
156
162
SC-19

出土遺物２（１／３）



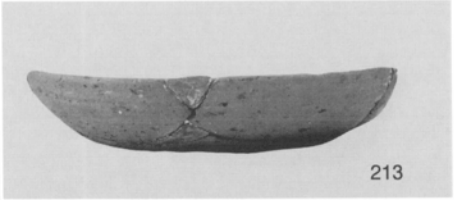


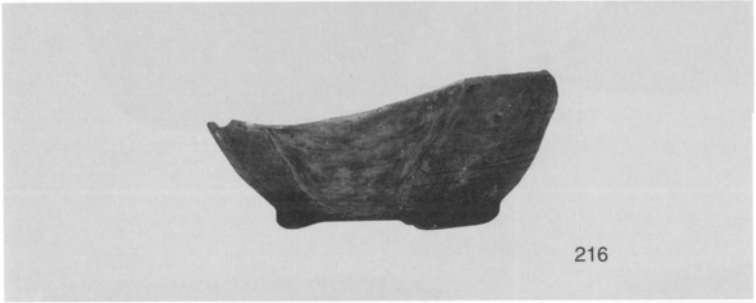


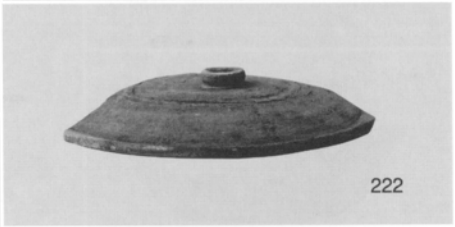


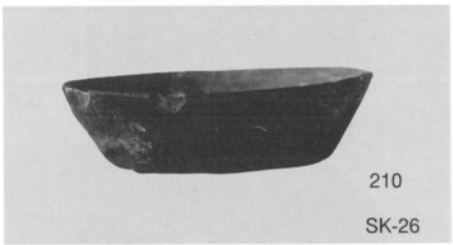
出土遺物３（１／３）

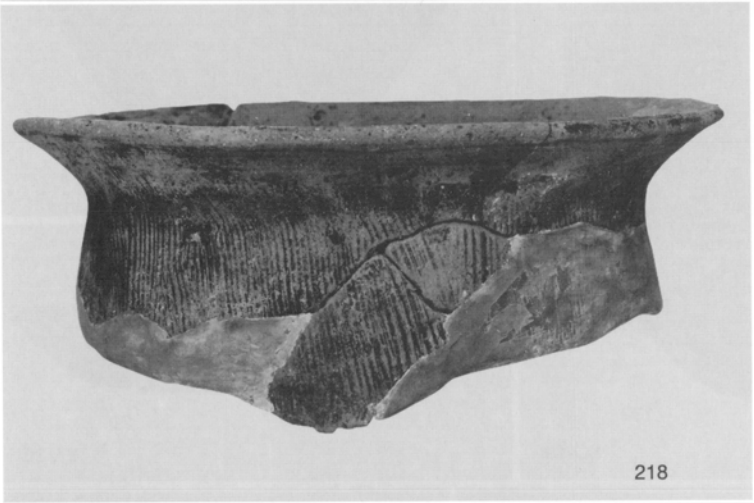
212


213


216

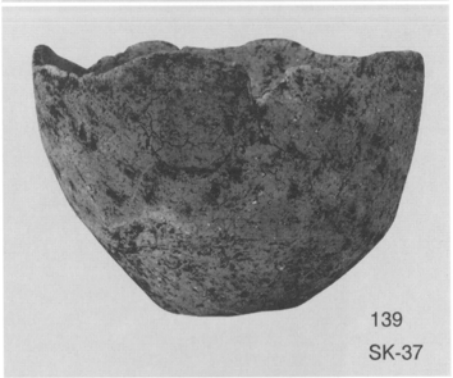

222

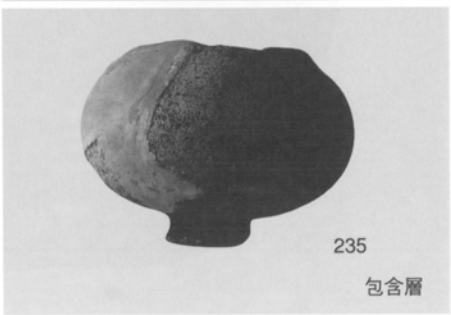

210
SK-26


218

138

221
SK-24


139
SK-37


235
包含層

出土遺物４（１／３）

南　八　幡　遺　跡　5

— 南八幡遺跡第９次調査の概要 —

福岡市埋蔵文化財調査報告書第６４１集

２０００年３月３１日発行

発行　福岡市教育委員会

印刷　㈱博多印刷